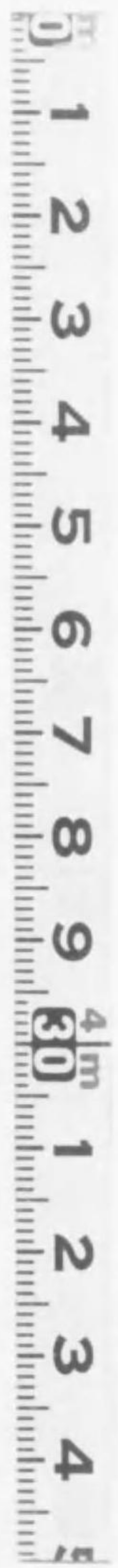


384-43
1200501459404

384
43



始



蘇峰德富猪一郎著



近世日本
國民史

明治天皇御宇史

第六册



〔官軍東軍交戦篇〕



眞寫御王親彰嘉宮寺和仁

官軍東軍交戦篇 刊行に就て

英雄歴史
を作る

分別臭き書齋人は、兎角環境の力、多數の力、若しくは因果律の力等に重きを置き、個人のを無視し、若しくは輕視する者が鮮くない。然も歴史の幕内に立入つて見れば、固より環境の力も、多數の力も、因果律の力も、それ〴〵其分に應じて働きを爲しつゝあるが、特に鮮かに見えるは、個人のものである。語を換へて云へば、歴史が英雄を作るでは無く、英雄が歴史を作る事實が、特に維新回天の史上に於て、赫灼として顯はれてゐる。そは嘉永の末、安政の始より、慶應の末、明治の始に至る約十六年間の事實が、雄辯にこれを物語つてゐる。而して其中に於て、明治初期の歴史を、更に最も然りとす。

* * * * *

戦争は一切を解決

戦争は一切を解決すと云ふ。成程其通りであらう。長篠の一戦にて武田氏は亡んだ。桶狭間の一戦にて織田氏は興つた。山崎の一戦にて秀吉の覇業は始まつた。關

ヶ原の一戦にて徳川幕府の基は定まつた。戦争は最も效果的に葛藤を裁断し、紛亂せる問題の解決を著けるものである。其の意味に於て鳥羽伏見の戦争が又たこれを最も痛快に立證してゐる。然るに其の戦争中に於てさへも、尙ほ廟堂の上には議論が紛々としてゐた。即ち鳥羽伏見の砲聲は、殷々として遠雷の如く御所の門内に轟きつゝあつた際に、其の評定の間に於ては、尙ほ公武合體論と、倒幕論とが、鎗を削りつゝあつた。

廟堂の形勢

當時の廟堂の形勢を見れば、其の有力にして多數者は、皆な公武合體派であつた。其の背後には薩長に次ぎ、若くはそれに雁行する武力を有する土佐藩の勢力を擁し、下には奇智縦横の後藤象二郎がこれを援くる。大名中の最も秀でたる山内容堂を魁とし、更に越前の松平春嶽、尾州の徳川慶勝、宇和島の伊達宗城など、何れも勤皇には相違無いが、同時に又た幕府にも同情を有し、所謂慶喜を入京せしめ、一切の問題を平和的解決に附せんとするの論が、多數を占めてゐた。されば戦争中と雖も、若し上に岩倉具視無く、下に西郷隆盛、大久保利通無きに於ては、廟議

が何れに決するとも、未だ知る可からざる勢であつた。言ひ換ふれば、開戦以後に於てさへも、其の當初は尙ほ平和解決論者が多數であつた。況んや開戦以前に於てをやだ。

岩倉西郷等の力

是に依つて知る。個人力の如何に歴史の運行に、大なる働きを占めつゝあるかを、岩倉、西郷、大久保三人の政治的功罪に就ては、史家の説必らずしも一であるまい。又一であることを必要としない。然も倒幕の廟議を具體的に決定したるは、實に彼等の力と云はねばならぬ。力のあるところ、即ち勢と功とは、これに歸せねばならぬ。

慶喜消極的の力

翻つて徳川慶喜の働きは、寧ろ消極的ではあつたが、尙ほ前に擧げたる岩倉、西郷、大久保に次ぐの大なる働きを、此の場合に爲したることを看過することが出来ぬ。慶喜は何故に率然として幕軍及び會桑二藩の兵の上京を許したる乎。又一旦これを容しつゝ、それを徹底するの力無く、直に浪華城を捨て、江戸に遁げ還りた

怪我の功名

る乎。今茲に彼の動機を論ずる必要は無い。兎に角彼が上京を許した爲に、戦端は開けたのである。彼が開志無くして開争したるが爲に、幕府側の諸軍隊は皆な潰走したのである。それで春秋の筆法で云へば、戦を始めたるも慶喜であり、戦を敗北せしめたるも慶喜である。官軍側から云へば、慶喜は官軍の爲に所謂る怪我の功名をしたものである。

慶喜の取るべき方策第一

此際慶喜の取る可き方法は、更に二個存したであらう。第一は飽迄浪華城に據つて戦ひ抜き、紀淡の海に幕府の艦隊を浮べ、西國大名の背後を扼し、其の藩地との連絡を絶たしむることである。最後の勝利は固より官軍に歸す可きであつたらうが、それにしても官軍はこれが爲に如何ばかりの苦痛を喫したる乎。容易に料り知り難きものがあつたらう。官軍側の主戦論者も、初から其の困難を豫期して、山陰道の方面に主上御遷幸の地を豫じめたものと察せらるゝ。

同じく第二

第二は堅く大阪城を守つて、一兵一卒でも京都に向はしめざることである。若し

彼が武装的平和手段を以て、浪華より京都の公武合體論者と互に呼應して策動するに於ては、如何に薩長が討幕の密勅を有したりとするも、これを施すに途無く、内外相應じて公武合體説を鼓吹するに於ては、岩倉、西郷、大久保の如きも、到底其の智勇を施すの機會を失つたであらう。故に慶喜の爲に圖れば、逸りに逸る會桑及び幕兵を制して、大阪城に立籠り、滿を持して發せざるが上策であつた。然も己む無くして出兵したならば、兎も角も最後迄戦ふ決心を爲す可きであつた。然るに容易に戦を始めて、薩長の術中に陥り、容易に退却して、薩長をして名を成さしめたるが故に、慶喜自身の立場から見れば、慶喜の取りたる方策は、正しく下策であつた。否な下々の下策であつた。然も官軍側から云へば、寧ろ慶喜が此策に出たることを感謝す可きであらう。

慶喜無聞志

徳川慶喜は何故に此の下策に出たであらう乎。彼が兵を上京せしめたる時には恐らくは戦争を意味せず、強制的入京を意味したのであらう。彼は既に討薩の檄を朝廷に捧げてゐる。而して兵を入京せしめて尙ほ戦争を豫期せずといふこと

は極めて不可解の様であるが、薩長の勢力を甘く見縊りて、とても物にはならぬと認めたのではあるまい乎。慶喜の云ふ所に依れば、苟くも出兵を止むれば、先づ慶喜を血祭りにして、而して後決行するなど、いふ空気が、城内に漲つてゐたといふから、彼も亦たそれ等の事も考慮して、これを許可したものであらう。且つ彼自身も十月政權奉還以來、朝廷の彼に對する措置が、餘りに殘酷、小思と考へ、深く憤る所のものであつたであらう。それやこれやの動機から、遂に許可したが、然も良心は人をして弱からしむるといふ言葉の通りに、彼は生れる前からの勤皇家であつて、朝敵の名を受けることは、彼に取つて何より苦痛であつたことも察せらるゝ。彼が闘志無かつたのは、畢竟これが爲ではあるまい乎。而して彼が倉皇として浪華城を遁れ出で去つたのは、これが爲ではあるまい乎。

子嗣々貴公

彼は少壯時代より剛情公と云はれた程の剛情者であつたとすれば、意志薄弱とは云ひ難い。又た元治甲子の役に、彼が禁衛總督として働きたることを見れば、彼は本來の臆病者でも無かつた。されど彼は諺に『萬能あつて一心足らず』と云ふ人

物であり、到底翻々たる一個の貴公子たることを免れ無かつた。彼は西園寺公望など、は、良き相手であつたとするも、岩倉など、太刀打の出来る柄では無かつた。況んや彼の懐刀であつた原市之進は、既に暗殺せられて、最早や彼の頼みとする程の人物は、一人も彼の左右には無かつたに於てをやだ。

時勢の變

人には得な場所に立つ者と、損な場所に立つ者とがある。成敗を以て人物を論ずることは、決して公平な見ではない。當時の幕府側にも人物はあつた。併し彼等は如何に申譯はしても、錦旗に向つて戦ふ程の勇氣は出なかつた。足利高氏時代ではそれが出来たが、明治初期時代では、それが既に不可能の事となつた。これ亦た以て時勢の變を見る可きであらう。

昭和十六年六月二十五日。時に獨ソ開戦四日に互るも

廟議未だ決するところを見ず。

例言

- 一 本篇は修史第三期、即ち、近世日本國民史著作の目的である明治天皇御宇史第六冊、織、豊、徳、孝明天皇時代以來、通算第六十七冊。
- 一 本篇は昭和十二年三月二十六日起稿、昭和十二年六月九日脱稿。
- 一 現在明治天皇御宇史第七冊、官軍東下篇第八冊、新政内外篇第九冊、關東征戰篇第十冊、奥羽和戰篇第十一冊、奥羽戰爭篇第十二冊、會津籠城篇第十三冊、北越戰爭篇第十四冊、奥羽平定篇第十五冊、函館戰爭篇第十六冊、明治政務篇第十七冊、新政扶植篇第十八冊、法度制定篇第十九冊、薩長内政篇第二十冊、内政統制篇第二十一冊、廢藩置縣篇第二十二冊、廢藩置縣後形勢篇第二十三冊、内政外交篇第二十四冊、歐米と東洋篇を稿了し、今や第二十五冊、征韓論篇起稿中である。
- 一 「征韓論篇」起稿既に半ばを過ぎ、三月十七日に至り、宿病顔面神経痛激甚、爾來今日に至る迄一百日、未だ一回も修史の筆を執らず。大正七年六月、近世日本國民史起

稿以來、未だ此の如く長きに亙りたる事無し。然も今や病漸く癒へんとす。不日必らず續稿を紹がんとす。天若し我が史運に祚せば、必らず完成の事を期す。

昭和十六年六月二十五日 東京西南郊大森山王草堂に於て

蘇峰 七十九叟

近世日本
國民史

明治天皇御宇史 第六册 目次

第壹章 開戦當時の朝廷

一 官軍と東軍……………一

官賊の名稱〔一〕 皇室反抗者無し〔二〕 慶喜の勤皇心〔二〕 會津の勤皇〔三〕 孝明天皇の會津嘉獎〔三〕 當座名分拘泥の非〔四〕

二 開戦後に於ける松平春嶽の態度……………五

開戦後の朝議〔五〕 調停説の本元〔五〕 春嶽邸の評議〔六〕 評議未決散會〔六〕 参内面々〔六〕 春嶽辭職申出〔七〕 尾土豫齋辭職申出〔七〕

三 山内容堂の慶喜入京論……………八

山内容堂の大喝〔八〕 公卿屏息〔九〕 容堂三條邸に入る〔一〇〕 三條公の忠告〔一〇〕 容堂意見書〔一〇〕 朝廷動ぜず〔一一〕 大久保容堂を説く〔一二〕

四 動搖豫防の論告……………一二

朝廷の無事解決策〔一二〕 伏見大津防備令〔一三〕 堂上地下官人諭告〔一三〕 人心動搖豫防〔一四〕 官中一時騒立〔一五〕 山階宮制止〔一五〕

五 正月三日の朝廷に於ける岩倉具視……………一六
 討幕張本岩倉(一六) 岩倉決心(一六) 岩倉の剛膽(一七) 朝廷大困難(一七) 徹夜大騒動(一八) 捷報宮中に入る(一八)

六 正月三日の戦場に於ける土藩の行動……………一九
 土佐と薩長兩立難(二〇) 土佐徳川方諒解(二〇) 後藤等の機心(二〇) 土藩中の討幕派(二〇) 伏見に於ける會土交渉(二二) 土兵發砲中止(二二) 山地二川の参戦(二二) 土藩僥倖(二三)

第二章 戦鬪初日及第二日……………二四

七 東軍側の觀た正月三日の開戦(一)……………二四
 阪軍進出(二四) 薩兵阻止(二四) 薩兵發砲(二五) 開戦必至(二五) 初日會戦了る(二六) 伏見方面閉戦(二六)

八 東軍側の觀た正月三日の開戦(二)……………二七
 林權助勇戦(二七) 林戦傷(二七) 會兵背進(二八) 白井隊退却(二九) 幕府歩兵隊退却(二九) 一の勝敗の影響(三〇)

九 薩藩側から觀たる正月四日の戦争……………三〇
 中書島戦(三〇) 京橋筋の戦(三一) 官軍増援隊下鳥羽に至る(三一) 暗夜交戦(三二) 下

鳥羽早曉戦(三二) 官軍砲兵の優勢(三三) 富の森戦(三三) 官軍苦戦(三三)

一〇 長藩側より觀たる正月四日の戦争……………三三
 大將軍宮出動(三四) 長兵の強味(三四) 三中隊の進撃(三四) 中書島戦(三五) 東軍逆風に苦しむ(三五) 高瀬川の戦(三六)

一一 東軍側より觀たる正月四日の戦争(一)……………三六
 東軍佐久間窪田戦死(三六) 間諜混入の説(三七) 退却阻止の命を奉ぜず(三八) 白井隊迂回策中止(三八) 白井隊鳥羽に向ふ(三九) 白井隊勇戦(三九) 官軍潰走(三九)

一二 東軍側より觀たる正月四日の戦争(二)……………四〇
 白足袋隊の勇(四〇) 竹中歸休を勸む(四〇) 白井隊等の浚休息(四一) 薩の伏兵を撃攘(四一) 八幡方面守衛(四二) 燼餘流木に驚く(四二) 慶喜敗戦眞相一斑を知る(四三)

第三章 戦鬪第三日……………四四

一三 薩藩側より觀たる正月五日の戦争(一)……………四四
 東軍統制乏し(四四) 薩軍の攻撃部署(四四) 富の森敵壘に近づく(四五) 大山隊の進撃(四六) 敵の砲臺占領(四六)

一四 薩藩側より觀たる正月五日の戦争(二)……………四七
 浚堤の戦(四七) 浚に迫る(四八) 東軍退却開始(四八) 薩軍死傷(四八) 浚敵の隻影なし

一四九 官軍浚入城〔四九〕 一先京都に引揚〔四九〕 仁和寺官士卒激勵〔四九〕 征討總督宣示〔五〇〕 伊達等の阻止行はれず〔五〇〕

一五 長藩側から觀たる正月五日の戦争……………五一

豊後橋より淀に向ふ〔五一〕 千兩松の戦〔五一〕 浚城兵官軍に通ずる噂〔五二〕 官軍浚占領〔五二〕 鳥羽街道官軍應援〔五二〕 當時の戦況〔五三〕 藤村の首〔五四〕

一六 東軍より觀たる正月五日の戦争(一)……………五四

上田隊の奮戦〔五四〕 白井隊の應援〔五五〕 白井奮戦〔五五〕 白井傷死〔五六〕 白井隊士尙勇戦〔五六〕 大垣兵來援〔五七〕 諸兵皆敗退〔五七〕

一七 東軍より觀たる正月五日の戦争(二)……………五七

伏見堤開戦〔五七〕 小原宇右衛門沈著〔五八〕 會兵突撃〔五八〕 佐川勇奮〔五九〕 小原重傷〔五九〕 新撰組猛戦〔五九〕 林權助父子〔六〇〕 幕軍士氣沮喪〔六〇〕

一八 東軍より觀たる正月五日の戦争(三)……………六一

淀市街戦〔六一〕 浚藩東軍を拒む〔六一〕 佐川剛勇〔六一〕 今泉巨海亦勇戦〔六一〕 會兵退却〔六二〕 幕軍皆退く〔六二〕 幕會兵葛葉村に次す〔六三〕 藤堂兵戦はず〔六三〕

第四章 東軍の敗因……………六五

一九 官軍東軍勝敗の機……………六五

東軍不統制〔六五〕 東軍中の善戦者〔六五〕 東軍敗北の眞原因〔六六〕 東軍の安心自慢〔六六〕 萬一官軍敗北せば〔六六〕 政權消長の大關係〔六七〕 萬一慶喜陣頭に立たば〔六七〕 慶喜間接的朝廷奉仕〔六八〕 慶喜庭訓〔六八〕

二〇 當時の形勢と大久保の書簡(一)……………六八

箕田宛狀〔六八〕 正月二日の朝議〔六九〕 阪軍出動〔六九〕 出京阻止の朝命〔七〇〕 遂に開戦〔七〇〕 始戦の責任者〔七〇〕 官軍勝利〔七一〕 征討將軍進發〔七一〕

二一 當時の形勢と大久保の書簡(二)……………七二

薩兵の勇猛〔七二〕 八幡山時官軍に歸す〔七二〕 彦根官軍に味方〔七三〕 世の中は意外〔七三〕 備因亦官軍〔七四〕 紀州鷲尾驛に通ず〔七四〕

二二 當時の形勢と大久保の書簡(三)……………七五

西園寺卿丹波路發向〔七五〕 西園寺の才氣〔七六〕 平運丸砲撃問題〔七六〕 兵糧心配なし〔七七〕 徳川重罪顯然〔七八〕

第五章 戦鬪第四日……………八〇

二三 薩藩側から觀たる正月六日の戦争……………八〇

東軍八幡橋本に據る〔八〇〕 官軍進撃〔八〇〕 東軍八幡を撤退〔八一〕 藤堂兵の官軍内應〔八一〕 四條隆平の藤堂氏曉諭〔八二〕 藤堂への勅旨〔八二〕 藤堂氏受書〔八三〕

二四 長藩側より觀たる正月六日の戦争……………八三
 長兵八幡の敵を撃つ〔八四〕 諸兵八幡町に入る〔八四〕 幕軍敗走〔八四〕 八幡橋本悉く官軍に歸す〔八五〕 林半七實歴談〔八五〕 八幡神輿還幸〔八六〕 神輿歸還〔八六〕 寂感御沙汰〔八六〕

二五 東軍側より觀たる正月六日の戦争(一)……………八七
 東軍重大問題〔八七〕 慶喜最初の主戦論〔八七〕 士卒感激〔八八〕 佐々木重傷〔八九〕 山崎關門の戦〔八九〕 藤堂義返りの影響〔九〇〕 津藩のきたなき〔九〇〕

二六 東軍側より觀たる正月六日の戦争(二)……………九一
 官軍關門に迫る〔九一〕 東軍枚方に退く〔九一〕 枚方軍議〔九二〕 枚方出火〔九二〕 諸軍退却命令〔九三〕 大阪城中騷擾〔九三〕

二七 中根雪江下阪の使命(一)……………九四
 慶喜及會桑兩藩主の態度〔九四〕 慶喜初志〔九四〕 慶喜變説病〔九五〕 雪江大阪發向〔九五〕 肥後世子上京〔九六〕 鳥羽村阪兵充滿〔九七〕

二八 中根雪江下阪の使命(二)……………九七
 戦火既に開く〔九七〕 辛うじて一船を得〔九八〕 大阪著〔九八〕 中根討薩徽を見る〔九九〕 中根登城〔九九〕 永井の依頼〔九九〕 大阪側自己陶醉〔一〇〇〕

二九 中根雪江下阪の使命(三)……………一〇一

三〇 中根雪江下阪の使命(四)……………一〇四
 上奏文携行謝絶〔一〇一〕 溝口依頼を勤む〔一〇一〕 慶喜當惑〔一〇二〕 當初より無準備〔一〇二〕 永井尙奏開を欲す〔一〇二〕 中根溝口等會談〔一〇三〕 滿城拂地の無策〔一〇四〕
 中根等歸途に上る〔一〇四〕 土藩の行動〔一〇五〕 八幡町邊の状況〔一〇五〕 淀川以北砲戦猛烈〔一〇六〕 雪江歸邸復命〔一〇七〕 奏開書既に提出済〔一〇七〕

第六章 徳川慶喜の大阪城退去……………一〇九

三一 何故に徳川慶喜は大阪城を立退きたる乎……………一〇九
 總て慶喜本意に反す〔一〇九〕 風聲守護依頼〔一一〇〕 悔恨の念に堪へず〔一一〇〕 無責任の申譯〔一一一〕 若し慶喜勝たば〔一一一〕

三二 如何にして徳川慶喜は大阪城を立退きたる乎……………一一二
 東歸思立の日〔一一二〕 堅忍持久の心なし〔一一二〕 密々東歸準備〔一一三〕 渡りに船〔一一三〕 出戦勸説の諸士を騙過〔一一三〕 密に出城〔一一四〕 先づ米艦に乗る〔一一四〕

三三 徳川總勢の退去……………一一五
 開陽艦に轉乘〔一一五〕 英艦の偵察〔一一六〕 開陽艦東向〔一一六〕 大阪城中脱けの殻〔一一六〕 海上の小戦〔一一七〕 春日開陽接戦〔一一七〕 慶喜東歸届出〔一一八〕

三四 徳川慶喜大阪城脱出の後日譚(一)……………一一九

神保修理の勤説〔一一九〕 板倉永井東歸賛成〔一二〇〕 諸士を出し抜く〔一二一〕 城門脱出〔一二二〕 會桑藩士の心中〔一二三〕 系體の顔末〔一二四〕 紹介か偶然か〔一二五〕

三五 徳川慶喜大阪城脱出の後日譚〔一〕……………一三三

東歸恭順言明〔一二二〕 慶喜心境の變化〔一二三〕 途中の風波〔一二四〕 慶喜戦闘心の有無〔一二五〕 寧ろ討薩を欲す〔一二五〕

第七章 慶喜退去當時の状況……………一二六

三六 浅野美作守の後日譚〔一〕……………一二六

浅野上阪の命〔一二六〕 稻葉聞老の申渡〔一二六〕 討薩に關聯〔一二七〕 上阪人々〔一二七〕 兵權放棄の意なし〔一二八〕 戦報を聞く〔一二八〕

三七 浅野美作守の後日譚〔二〕……………一二九

板倉の戦敗報告〔一二九〕 城中硬軟兩派〔一三〇〕 板倉申譯〔一三一〕 慶喜に會見を勧む〔一三一〕 慶喜迷懐〔一三一〕

三八 浅野美作守の後日譚〔三〕……………一三三

浅野東歸賛成〔一三二〕 東歸手配親書〔一三三〕 永井の東歸御供辭退〔一三三〕 永井の眞意〔一三四〕 榎本の歎息〔一三四〕 浅野紀州加太より東歸〔一三五〕 塚原將士に罵る〔一三五〕 士氣潰蕩〔一三六〕

三九 福地源一郎の大阪城退去譚〔一〕……………一三六

内應豫期に反す〔一三六〕 城中の倉皇〔一三七〕 籠城説起る〔一三七〕 慶喜出馬の噂〔一三七〕 御雇佛將校無用〔一三八〕 慶喜立退きの知らせ〔一三八〕 眞相判明〔一三九〕 内閣人影なし〔一三九〕

四〇 福地源一郎の大阪城退去譚〔二〕……………一四〇

實否調査〔一四〇〕 西の部下申達〔一四〇〕 變轉の世〔一四一〕 奉行詰所の狼藉〔一四一〕 福地西等兵庫に赴く〔一四二〕 當座の上分別〔一四二〕

四一 福地源一郎の大阪城退去譚〔三〕……………一四三

後始末〔一四三〕 蕭然出城〔一四三〕 敗兵歸城〔一四四〕 東照宮神輿入城〔一四四〕 市中平穩〔一四五〕 大風出船難〔一四五〕 鴻池別荘投宿〔一四六〕

四二 福地源一郎の大阪城退去譚〔四〕……………一四六

神戸著〔一四六〕 兵庫奉行所の狼狽〔一四六〕 英船乗込〔一四七〕 大阪城焼く〔一四八〕 江戸歸著〔一四九〕

第八章 慶喜退去後の大阪城中状況……………一五〇

四三 徳川慶喜脱出後の大阪城〔一〕……………一五〇

妻木の城引渡し任務〔一五〇〕 越前藩岡本への申談〔一五〇〕 尾州淺野への談〔一五一〕 城

外出火〔一五二〕 引渡未済〔一五二〕 越前藩士来らず〔一五二〕

四四 徳川慶喜脱出後の大阪城(二)……………一五三

外人大阪籠城の噂〔一五三〕 城中異状なし〔一五四〕 風説の因〔一五四〕 城中在留の人〔一五五〕 雜入亂入〔一五五〕 當時の城代〔一五五〕 金米書類の搬出〔一五六〕

四五 徳川慶喜脱出後の大阪城(三)……………一五七

慶喜手元品搬出〔一五七〕 榎本の妻木見舞〔一五七〕 米金分配指圖〔一五八〕 分配命令書〔一五九〕 城中出火〔一五九〕 長兵來迫〔一五九〕

四六 徳川慶喜脱出後の大阪城(四)……………一六〇

妻木と長州隊長との問答〔一六〇〕 昨非今は〔一六一〕 城中出火〔一六一〕 妻木等退城〔一六二〕 妻木申譯〔一六二〕 妻木歸府〔一六二〕

四七 徳川慶喜脱出後の大阪城(五)……………一六三

出火の原因〔一六三〕 火藥仕懸の噂〔一六四〕 長兵放火に非ず〔一六四〕 原因不明〔一六五〕 長兵砲撃炎上の噂〔一六五〕 千兩箱搬出〔一六六〕

四八 徳川慶喜脱出後の大阪城(六)……………一六七

妻木長人間答〔一六七〕 引渡通告〔一六七〕 火勢蔓延〔一六八〕 金枝妻木を見失ふ〔一六九〕 妻木に歸東勸告〔一六九〕 金枝歸東〔一六九〕 大阪砲硝蔵爆發望見〔一七〇〕

第九章 征討將軍宮發向……………一七一

四九 徳川慶喜追討の號令……………一七一

追討御沙汰發布〔一七一〕 御沙汰本文〔一七一〕 追討已むを得ず〔一七二〕 歸正獎勵〔一七二〕 追討令發布遅延理由〔一七三〕 岩倉演説〔一七三〕 久我中納言挨拶〔一七四〕

五〇 京畿の形勢大に定まる……………一七五

追討令奉承受書〔一七五〕 尾藩受書〔一七五〕 越前藩受書〔一七六〕 土藩受書〔一七六〕 大垣藩轉向〔一七六〕 小原二兵衛願書〔一七七〕 慶喜尾越宛直書到達〔一七七〕 仁和寺宮の戦勞勲ひ〔一七八〕

五一 大久保日記に掲げられたる正月三日以後の情報(一)……………一七九

大久保強硬〔一七九〕 朝議一動一揺〔一七九〕 朝臣大久保嫌忌〔一八〇〕 五日六日戦況〔一八〇〕 勝利薩長善戦の爲〔一八一〕 大久保軍事參謀命ぜらる〔一八一〕

五二 大久保日記に掲げられたる正月三日以後の情報(二)……………一八二

仁和寺宮淀城進陣〔一八二〕 民衆錦旗を迎ふ〔一八三〕 越士岡本來る〔一八三〕 岩倉の不滿〔一八四〕 大久保岩倉交情〔一八四〕 慶喜紀州入の評判〔一八五〕

五三 大久保書簡に現はれたる正月五日以後の情報(一)……………一八五

葦田宛狀〔一八六〕 淀城官軍に歸す〔一八六〕 六日の戦況〔一八六〕 東軍敗走〔一八七〕 慶

目次

一一

喜始め會桑東退(一八七) 皇運挽回の瑞(一八八) 新政功業薩長に在り(一八八) 五四 大久保書簡に現はれたる正月五日以後の情報(二)……………一八九

征東將軍官職跡巡覽(一八九) 華城の様子届出(一九〇) 將軍官枚方迄進發(一九〇) 薩兵
大阪進撃(一九〇) 三條副總裁外國掛(一九〇) 岩倉土佐詰詰談判(一九〇) 岩倉大久保協
力の効(一九一) 慶喜叢謀(一九一)

五五 大久保の襄田に與へたる前書の別啓……………一九二

連日大勝(一九三) 機先の成功(一九三) 辭官納地字内の公論(一九三) 關東浪士の件(一
九四) 四方錦旗に靡く(一九四) 將軍官大阪入城の豫定(一九四) 朝廷處置振り大切(一九
五) 賞罰内話(一九五) 久光上京期待(一九六)

五六 西郷吉之助の書簡に現はれたる開戦以後の情勢(一)……………一九六

桂宛の書(一九六) 敵軍匆忙敗走の狀(一九七) 連日勝通し(一九七) 賊勢五倍(一九八)
沿道民衆の薩長歡迎(一九八) 淀の模様(一九九) 近畿の模様(一九九) 山陽山陰の模様(一
九九) 京阪間の模様(二〇〇)

五七 西郷吉之助の書簡に現はれたる開戦以後の情勢(二)……………二〇一

川口景次郎宛狀(二〇一) 四日間勝通し(二〇一) 信吾彌助負傷(二〇二) 吉二郎病氣引籠
り(二〇三) 小兵衛の奮戦(二〇三) 西郷出戦せず(二〇三) 八幡へ参り君公に叱らる(二
〇四)

第十章 戦争直後の内政……………二〇五

五八 土佐と薩長(一)……………二〇五

薩長の功(二〇五) 大政返上論の影響(二〇五) 土佐の成功(二〇五) 薩長の返上論利用
(二〇六) 土佐派の弱味(二〇七) 返上劇意外の狂ひ(二〇七)

五九 土佐と薩長(二)……………二〇八

容堂最後迄努力(二〇八) 後藤福岡上書(二〇九) 皆敢て朝廷に背かず(二〇九) 一二藩依
頼の非(二一〇) 朝廷無偏の要(二一〇) 後藤福岡伏見に向ふ(二一一) 後藤初心遂行熱中
(二一一)

六〇 土佐と薩長(三)……………二一一

容堂最後まで抗論(二一一) 具視容堂を讀む(二一二) 内府侯に背く(二一二) 平和派請藩
容堂に追隨(二一三) 岩倉朝命傳達(二一三) 勝敗の決一髪にあり(二一四)

六一 農商への告示……………二一四

幕領を御料となすの告諭(二一四) 慶喜恭順(二一五) 計らずも謀叛(二一六) 朝廷兼同の
罪(二一六) 悔悟の省寛容(二一六) 天領を御料に復す(二一七)

第十一章 戦争直後の對外問題……………二一八

目次

一三

六二 大阪側より各國公使への告知……………二一八
 第三者の勢力(二一八) 朝幕共外使手當(二一八) 大阪側の外使通告(二一九) 自衛の要求(二二〇) 外人傍若無人の端(二二〇) 大阪側の士氣沮喪(二二二)

六三 新政府が遭遇したる最初の外交事件……………二二一
 朝廷對外施設重視(二二二) 外國事務總裁任命(二二二) 備前兵の外人殺傷(二二二) 外人非常見幕(二二三) 朝廷の狼狽(二二四) 日本蒸氣船差押(二二四) 朝廷の町村方安論(二二四)

六四 備前兵神戸事件の真相(一)……………二二五
 外人の挑發(二二五) 事件の大略(二二五) 外人の所記(二二六) 雙方の不注意(二二七) 外人の優越感(二二八)

六五 備前兵神戸事件の真相(二)……………二二八
 行列横斷(二二八) 日本人放銃(二二九) 其の責任者(二三〇) 英米兵日本兵を追ふ(二三〇) 外人の狼狽(二三一) 池田氏届書(二三一)

六六 對外和親の國是……………二三二
 日置帶刀始末書(二三二) 外人の高歴的言動(二三三) 朝廷對外方針布告(二三四) 朝廷の一大轉向(二三四) 東久世の通達(二三五)

第十一章 神戸事件の交渉……………二三七

六七 神戸に於ける彼我の會見(一)……………二三七
 彼我會見人名(二三七) 應接概略(二三八) 外國事務掛人名を問はる(二三八) 内亂か否か(二三九) 備前兵問題(二三九) 警衛責任者(二四〇)

六八 神戸に於ける彼我の會見(二)……………二四〇
 備前兵處置問題(二四〇) 警衛隊長一任(二四一) 違約の警告(二四二) 問題兵庫に局限(二四二) 日本人に對する治安(二四三) 日本蒸氣船取押を責む(二四三)

六九 神戸に於ける彼我の會見(三)……………二四四
 外人答辯(二四四) 東久世朝留を乞ふ(二四四) 政府政令不行渡の港(二四五) 布告勅書本國へ傳達を求む(二四六) 東久世京都への通報(二四七)

七〇 會見に關する吉井幸輔の觀察……………二四八
 吉井所記(二四八) 會見席次(二四八) 兵庫守備兵交代(二四九) 市中歡迎(二四九) 押收船還さる(二五〇) 備前問題心配なし(二五〇) 公家亦有爲(二五一)

七一 長藩片野十郎の談話……………二五二
 外人片野を脅威(二五二) サトー申分(二五二) 外人戦闘準備(二五三) 外人申分(二五三) 神戸會見の効果(二五三) 外字新聞記事(二五四)

七二 六國公使と新政府……………二五五
 パークスの得意(二五五) 外使の神戸移轉(二五六) 外交團總代の交迭(二五六) 東久世外

人會見赤英の巻通(二五六) サトーの東久世觀(二五七) 伊藤外人入京を許す(二五七) 長州の土地奉還(二五八) 伊藤の斡旋(二五八) 伊藤外國事務掛となる(二五九)

第十三章 主上の元服と其の當時の朝廷……………二六〇

七三 楫取素彦の京信(一)……………二六〇

長州側よりの觀察(二六〇) 朝威赫々(二六〇) 戦争の概観(二六〇) 東賊怯弱(二六一) 長崎の騒(二六二) 諸隊死傷手當(二六二) 官軍桑名へ進撃(二六三)

七四 楫取素彦の京信(二)……………二六三

關東征伐後廻の策(二六三) 對諸侯策(二六四) 世子出發を待つ(二六四) 楫取參與任命(二六五) 河原町屋敷取返し(二六五) 朝廷御沙汰書下賜(二六五) 毛利敬親への御沙汰(二六六) 同平六郎への御沙汰(二六六) 長藩戦死者への御沙汰(二六七)

七五 主上元服の禮を行はせ給ふ……………二六七

奉幣使發遣(二六七) 奉仕者評定(二六八) 大赦令(二六八) 慶喜以下官位褫奪(二六九) 償賞必罰(二七二)

七六 正月十日以降大久保の京報(一)……………二七二

外國掛任命(二七三) 朝廷褒賞(二七三) 歸順諸藩(二七四) 土藝態度決定(二七四) 勢は意外の者(二七四) 鳥羽伏見戰の效果(二七五) 町人の陣中見舞(二七五)

七七 正月十日以降大久保の京報(二)……………二七五

下賜領土返還(二七六) 仙臺の歸順(二七六) 備前兵一件(二七七) 朝廷の當惑(二七七) 尾州慶勝歸國(二七八) 紀州肥前歸順(二七八) 主上御元服(二七八)

七八 西郷吉之助の別報(一)……………二七九

見解對照(二七九) 伏見大阪町人の歡迎(二七九) 米價下落(二八〇) 土藝勤王となる(二八〇) 大垣小濱先鋒拜命(二八一) 轉向の早業(二八一) 松山桑名征伐方策(二八二)

七九 西郷吉之助の別報(二)……………二八二

東國の形勢(二八二) 東國民心離間策(二八三) 租税低減の見込(二八三) 賊を孤立させる案(二八三) 東國內亂の豫想(二八四) 軍艦新調の議(二八四) 備前問題處理(二八五) 白山の盡力(二八五) 藩主褒詞(二八六)

八〇 公家に對する戒飭の御沙汰書……………二八六

親王の位次改定(二八六) 利慾妄者に戒告(二八七) 官位は人材に應ずべし(二八八) 從前在朝人の宿弊(二八八) 文武砥礪勸奨(二八八) 俗傲を禁ず(二八八) 家來下郎の戒飭(二八九)

第十四章 新政府の官制……………二九〇

八一 新官制の制定……………二九〇

職制制定〔二九〇〕 三職分課規定〔二九〇〕 參與の事務〔二九一〕 徴士の制〔二九一〕 貢士〔二九二〕 始めの亂雜〔二九二〕 二九三

八二 新政府役員の撰敍 二九三

總裁以下の撰敍〔二九三〕 海陸軍務〔二九四〕 會計事務〔二九四〕 神祇科第一〔二九五〕 適材適所か否か〔二九五〕 會計掛の伺書〔二九六〕 國內への觸面案〔二九七〕

八三 備前兵事件に關する六國公使の要求 二九八

種々の重要問題〔二九八〕 兵庫奉行引上後の對外事務〔二九八〕 事務員任命通告〔二九九〕 備前問題處置指令〔二九九〕 各國公使申立〔三〇〇〕 發砲號令士官死罪の案〔三〇〇〕

八四 要求に對する新政府の評定 三〇一

朝廷會議〔三〇二〕 伊達後藤の齋らせる案件〔三〇二〕 會議狀況〔三〇三〕 會議因循〔三〇三〕 漸く決議〔三〇三〕 評定重大〔三〇四〕 備前家への通達〔三〇四〕

第十五章 大久保の遷都論 三〇六

八五 遷都論の發生 三〇六

環境一變の要〔三〇六〕 大久保參殿〔三〇六〕 大阪遷都提言〔三〇七〕 大久保内國事務掛任命〔三〇七〕 大久保提言の理由〔三〇八〕 大久保廣澤等に相談〔三〇八〕 國事掛増員〔三〇九〕 遷都論張本の一説〔三一〇〕

八六 廣澤日記と遷都問題 三一〇

廣澤大久保と密議〔三一〇〕 三條公等に密議言上〔三一〇〕 木戸入京〔三一〇〕 木戸の用向〔三一〇〕 木戸總裁局顧問となる〔三一〇〕 遷都問題評議〔三一〇〕 遷都論の目的〔三一〇〕

八七 大久保一藏遷都の議(一) 三一四

鴻業未だ牛に至らず〔三一四〕 建武の前鑒〔三一五〕 國內同心の要〔三一五〕 根本改定の要〔三一五〕 上下隔絶の弊〔三一六〕 君道と臣道〔三一六〕 更始一新遷都にあり〔三一七〕

八八 大久保一藏遷都の議(二) 三一七

遷都の地〔三一八〕 江戸に及ばぬは當然〔三一八〕 内國事務の大根本〔三一八〕 大久保立論の理由〔三一八〕 京都は改革難〔三一八〕 回覽に附す〔三二〇〕 真正起草者〔三二〇〕 薩人賛成〔三二二〕

八九 遷都論の行衛 三二一

異論多端〔三二二〕 久我の反對〔三二二〕 後藤岩倉の眞意〔三二二〕 公卿愈因循〔三二二〕 木戸の賛成〔三二三〕 木戸伊藤宛狀〔三二四〕

第十六章 新政府の會計處理 三二六

九〇 新政府の財用 三二六

財用の乏〔三二六〕 徳川慶喜に献金を求む〔三二六〕 坂本の財政配慮〔三二七〕 三岡坂本談

九一 戦争と金穀……………三三九
 話(三二八) 三岡召さる(三二八) 金穀取扱命ぜらる(三三九)
 三岡の人物(三二九) 岩倉に進言(三三〇) 三岡自ら米穀徴發(三三一) 三岡西村を説く(三三一) 朝廷窮乏の一例(三三二)

九二 紙幣發行の議(一)……………三三三
 經過問題の困却(三三三) 金策評議(三三三) 大金の急要(三三三) 金札發行申出(三三四) 評議決せず(三三四) 決死内決(三三五) 岩倉の賛成(三三五)

九三 紙幣發行の議(二)……………三三六
 三岡覺書(三三六) 諸侯に紙幣貸付案(三三六) 利足の事(三三七) 市在貸付方法(三三七) 西洋紙幣と異(三三八) 中根雪江の記事(三三八) 當座募金(三三九)

九四 御用金の徴發……………三三九
 會計御用曉諭(三三九) 岩倉自ら三井等面諭(三四〇) 金拾萬兩徴發(三四〇) 出金人名(三四一) 心細き會計(三四三)

第十七章 新政府政令不統一……………三四四

九五 東久世通禧の三條實美に與へたる一書……………三四四

若干の左右扞格(三四四) 江戸近報(三四四) 各藩會盟誓書徴發の要(三四五) 各藩要人皆同意(三四五) 政令不統一の一例(三四六) 政令粗漏(三四六) 將軍管中人無し(三四七) 澤任官希望(三四七) 悪習多端(三四七)

九六 東久世通禧の岩倉具視に與へたる一書……………三四八

外人取締願調(三四九) 徳川紀州上陸の噂(三四九) 東征急要(三四九) 徳川内部擾亂策(三四九) 諸侯東征誓約の要(三五〇) 岩倉身上忠告(三五〇) 一家の事注意の要(三五一)

九七 岩倉の徳川慶喜懐柔運動……………三五二

急要政策(三五二) 岩倉の調略手段(三五三) 江戸情報(三五三) 春嶽に斡旋依頼(三五三) 岩倉強説(三五三) 徳川方二分方策(三五四) 購報要領(三五五) 岩倉和宮手書を得(三五五)

九八 岩倉具視と越前君臣……………三五六

越前君臣の方策(三五六) 岩倉徳川血食保證(三五六) 春嶽直克宛狀(三五七) 恭順徹底勸説(三五七) 中根山田宛狀(三五八) 龜之助相續の案(三五八)

第十八章 天皇親征の決定……………三六〇

九九 天皇親征と遷都論……………三六〇

岩倉の天皇親征策(三六〇) 大久保義田宛狀(三六〇) 關東追討必須論(三六一) 拔本塞源の策(三六一) 進攻治定(三六二) 根本擧つて百目振起(三六二)

100 岩倉具視親征の議を上る(一).....三六三
 岩倉大坂行幸の議(三六三) 征討の急務(三六四) 討勦難事(三六四) 關東の形勢(三六四)
 當今の規模(三六五) 奥羽鎮撫使人選の要(三六五) 賊集討勦の要(三六五) 海軍の力(三
 六六)

101 岩倉具視親征の議を上る(二).....三六六
 攝海御親臨の要(三六六) 親征急要(三六七) 東征將軍設置の要(三六八) 徳川海軍の力
 (三六八) 將士激勵の効(三六八) 右建議決定(三六九) 遷都論と同心異曲(三六九)

102 親征の發令.....三七〇
 征討將軍召還(三七〇) 親征條目(三七〇) 親征諮詢(三七一) 親征宣布(三七二) 維新以
 來行幸の嚆矢(三七三) 車駕親臨の發令(三七三)

103 大久保一藏の原案.....三七四
 關東征伐見込言上(三七四) 親征大典決定(三七四) 海陸軍配置(三七五) 東國兵の手配
 (三七五) 岩倉親征意見書原案(三七六) 軍事總裁公卿任命案(三七七) 大旨吻合(三七八)

104 箱根以西の大勢定る.....三七八
 一月間の大變化(三七八) 幕府の人物(三七八) 豫想外の鳥羽伏見の敗(三七九) 薩長軍の
 緊張(三八〇) 幕軍の油斷(三八〇) 案外脆き大阪城(三八一) 豫期外の薩長側成功(三八一)

105 東征の急務.....三八二

幕を窮鼠たらしめず(三八二) 武力派の覺悟(三八二) 東征必須の理由(三八三) 對外關係
 經緯(三八三) 統一政府を認むる爲(三八四) 調停運動防止の爲(三八四)

年表並人物概覽

其一年表.....一―四
 其二人物概覽.....五―一六

挿入繪圖

一 仁和寺宮嘉彰親王御寫眞.....卷首

近世日本
國民史 明治天皇御宇史 第六册 (通第六十七册計)

官軍東軍交戦篇

蘇峰學人



第壹章 開戦當時の朝廷

【一】 官軍と東軍

稱
官賊の名

京都側の軍を官軍と稱するには、何等苦情は無い。京都側は日本政府を代表して立つ軍である。やがては錦旗を翻へし、總督宮を奉じて出掛くる軍である。但だ之と對抗する大阪側若しくは其他一切の對抗者を、賊軍と稱するは當らない。當時

に於ては反對者に飽迄惡名を押し被せることは、是亦た戰略の一であつた。政争の場合には、味方は美名を稱し、反對黨には相互ひに、勝手に名目をつけて之を罵倒するの例が少くない。官賊の名稱も亦た此例に外ならない。

皇室反抗者無し

武力解決派の巨魁の唯一とは云はぬが、其の尤も重なる一人大久保一藏さへも、開戦の當初は、東兵と稱した〔參照 第六六冊一〇三〕。されば之を東軍と稱するが、穩當の名稱であらう。要するに徳川慶喜を中心として、薩長に反對したる一味の中には、幕府旗本、會津、桑名、其他の外様、譜代各藩及び薩長嫌ひの浪士、徳川側恩顧の徒など、之を吟味し、分析すれば、決して單純の者ではない。けれども彼等の一人たりとも、皇室に對して、敵對し、若しくは反抗したる者もなければ、敵對若しくは反抗せんとする者も無かつた。

慶喜の勤皇心

若し尊皇の一事に就て見れば、決して薩長がそれを専らにす可きものでは無かつた。東軍の中心人物徳川慶喜の如きは、其の政治家としての言動に就ては、頗る不滿の點もあり、其の經歷の中には、非難す可き點も少くなく、現に大兵を率ゐる薩長を飛ばして、上京せんと試みたるが如きは、其の重なる一例とす可きも、然も

會津の勤皇

其の動機を如何に精嚴に覈査しても、賊臣たる可き要素は無かつた。否な若し彼に始終一貫の誠意ありとせば、それは尊皇の一點であつた。彼は其の一點では水戸烈公の子であり、水戸義公の裔であることを辱しめなかつた。彼は決して賊臣傳中の人でなく、失敗したる勤皇傳中の人とす可きであらう。

會津の如きは、其の藩祖以來勤皇佐幕をもて始終した。當時多數の人心は、只だ幕府あるを知つて、朝廷を閑却したるに際し、會津藩祖保科正之は、其身は二代將軍徳川秀忠の庶子であり、三代將軍徳川家光の弟であるに拘らず、彼は君臣の大義を明らかにし、尊皇の大義を全うした。而して其の尊皇佐幕の精神は、松平容保の時代、特に彼が文久より慶應に至る七年間に於て、最も明著であつた。若し當時の大名中に於て、眞に孝明天皇の宸襟を安んじ奉りし第一人者を數へなば、前に島津齊彬あり、後に松平容保ありと云ふを適當とす可きであらう。

孝明天皇
會津嘉

文久から慶應の末にかけて、京都は殆んど不安、不穩、不秩序の零團氣が濃厚にして、云はゞ動亂の衝とならんとし、且つなりつゝ、あつた。斯る際に於て、専心一意朝幕の爲めに、一藩の力を擧げて奉仕したるは、實に會津をもて其尤とせねばならぬ。

されば孝明天皇には其の忠誠を嘉みし給うて、宸翰をも賜はり、御製をも賜はり、御物をも賜はり、其の恩寵は、當時に於て、殆んど無比とも云ふ可きものであつた。乃ち彼及び其の一番がそれに感激して、彌よ倍す奉効の忠貞を勵みたるは、固より云ふ迄もなきことであつた。

當座名分
拘泥の非

然るに彼等の立場からすれば、事志と違ひ、單り薩長から陰謀もて、排斥せられたるばかりでなく、やがては其の極力支持したる徳川慶喜其人からさへも、裏ら切らるゝ結果に陥り、今更ら前後を顧慮するに違あらず、遂ひに武士の意地として、最後の籠城に立ち到つた。されば彼等の心事は諒とするに足るものがあるばかりでなく、寧ろ憐む可きものありと云はねばならぬ。多くの場合に於て、美名は成功者に歸し、悪名は失敗者に歸するも、公平に考慮すれば、美名ほどの美も無ければ、悪名ほどの悪もない。仔細に點檢すれば、麥の中に稗がある如く、稗の中には麥がある。人事は恒に複雑である。時局は概ね錯綜してゐる。徒らに當座限りの名分に拘泥するは、決して歴史の真相を描く所以でない。

【二】 開戦後に於ける松平春嶽の態度

開戦後の
朝廷

慶應四年—明治元年—正月三日、朝廷に於ける評定の骨子を爲す一方に於ける中根對岩倉の調停説も、征討説の大久保對岩倉及び大久保對三條、岩倉の始末は、既記の通りだ。而して其の鳥羽、伏見に於ける戦捷も亦た然りだ。(參照 六六冊九二—一〇五)。然も尙ほ朝議に就て、語る所あらねばならぬ。

調停説の
本元

調停説の本家本元は、越前春嶽と土佐容堂だ。而して春嶽は軟的調停説にして、容堂は硬的調停説であつた。春嶽は飽迄穩當、平和の態度もて、調停説を主張したが、容堂は動もすれば威嚇の態度を執つた。而して朝廷に於ても、容堂に對してはより多く憚るところがあつた。それは容堂の人物もさることながら、其の背後に於ける土佐の聲望、踏込んで云へば土佐の兵力が、彼の言動を力づくるに足るものがあつた爲めだ。而して申す迄もなく大阪側をして、京都打入を決行せしめたる所以も、畢竟容堂及び後藤の内應を待みとしたるが爲めだ。但だ彼等の待みとし

たるは、果して確實なる手形を握りてゐたのであつた乎、將た半は空持みであつた乎、それは姑らく問題とするも。

春嶽邸の評議

春嶽邸に於て、春嶽は徳川慶喜入京の件に就き評議をした。彼は其の先提として岩倉に中根雪江を遣はし、岩倉の意見を確かめしめた。入京すれば直に参内することには岩倉は同意した。参内と同時に直に議定職に補せらるゝには、岩倉は毛利敬親と同時を條件とした。然らざれば朝廷の片手落であるを理由として。

評議未決散會

春嶽邸には伊達宗城も來た。幕府目付梅澤孫太郎も來た。藝州辻將曹も來た。土藩の神山左多衛も來た。但だ容堂は最初は病を以て辭し、次に來るを約したが、直ちに参内するを以て、遂ひに來らなかつた。而して後藤も招かれたが、彼も亦た参内の爲めに果さなかつた。而して春嶽邸では、評定中伏見の兵火を見たから、遂ひに何等評決する所なくして、春嶽も、宗城も、参内した次第は、既記の通りだ。(參照 六册九二、九三、及び九六)

参内面々

一、公(春嶽)御参朝之處、尾老侯(慶應)土老侯(容堂)豫老侯(藝若)侯(茂勳)後に長勳、先き立て御参有之、尾侯は御所勞中押而御参内故、御假建所へ御病床を補理、御平臥也。

春嶽辭職申出

帥宮、山階宮、仁和寺宮、中山前大納言殿御初、要路之諸卿虎之間に御列参、議定諸侯も御出席に而、方今之形勢御評有之、公(春嶽)御列坐之前へ御進み、是迄精々御盡力御座候へ共、遂に今日之御次第に立至り候義、被(對)朝廷、被(仰)譯も無之、全く御微力御不行届故之御義候へば、唯今議定之御職掌御取揚げ、斧鉞之御嚴譴被(爲)蒙度と、愷々切々御申立有之、御退席之上、尙又中山殿迄、御嚴達之御旨有之、御指出に相成御書取如(左)。

只今伏見表及(兵)争候趣承候、兼而私共へ盡力之儀被(仰)付置候處、無(其)詮、今日之場合に至候儀、全盡力不行届故と、重々奉(恐)入候。此上は早速御役御免被(成)下候様奉(嘆)願候。然る上は、如何様之御譴責被(仰)付候共、謹而奉(甘)受候。

正月

越前宰相

尾土豫藝辭職申出

尾侯、御名代成瀬華人正を以、御同様被(仰)立、土、豫、藝之三侯も、兼て議定之御職掌被(蒙)候事候得ば、御不肖ながら、如何様にも御盡力可(被)成は勿論候得共、是迄從(朝)廷、追々之被(仰)出等、一切御沙汰無之、今日之事件に相成候而も、御同然に候は、全く御不才御不堪故、御談も不被(加)御義と、御推量被(成)、朝廷之御爲にも不被(爲)。

二 開戦後に於ける松平春嶽の態度

七

成候へば、今日より御職掌被免候様、御一同御殿達有之由。此れは、越前と尾張とは、先手を打ての責任辭職であるが、自餘の人は、朝廷が彼等議定職を無視して、彼等に何等相談もせず、其の大事を、決行せらるゝに對しての抗議と見ても、差支なきものであらう。然も此の三人―容堂、宗城、茂勳―何れも慶喜上京を期待したる調停派であつた。

【三】 山内容堂の慶喜入京論

山内容堂
の大喝

山内容堂の態度は、松平春嶽に比すれば、羊と狼との差別がある。彼は大聲咆哮して、喰つて掛るの見幕をもて、朝廷の公卿等に肉薄した。侯(容堂)の參朝せらるゝや、忽ち砲聲轟々京郊に震ふ。越侯爲に驚き、亦俄に參朝あり。侯は是れ必ず薩長兩藩より、内府の先驅を砲撃して、私に兵端を開きたるぞと、面色火の如く、先づ薩侯を詰りて、公等若し容堂を疑はゞ、之を引出して殿前に首刎ねんは、唯是れ一兵士の事なり。公等敢て心に安んじて、これを斷ずる

の勇ありやと迫り。とあるが、恐らくは其通りであつたらう。但だ鳥津忠義の參内は、戊辰日記に據れば、薩侯は夜半に及び、御參内ありとあれば、彼が喰つて掛つたのは、薩侯では無かつたであらう。

公卿屏息

侯更に殿中を睨一睨して、聲を勵まし、朝廷苟も太政官を建て置かれ、不肖容堂議定の職に列するに、是れ程の大事を謀られずとありては、其職に在る能はず。即座に之を辭し奉る。依て直ちに藩兵を引揚げ、歸國仕ると大喝す。流石に三條、岩倉の兩公を始め、侯に對して敢て一言を發する能はず。

容堂一人の歸國は、深く意とするに足らず。されど彼が兵を引揚げての歸國は、朝廷に取りては一大事である。三條、岩倉諸卿の心配は、恐らくは此の一點であらう。侯は偶ま討幕を唱ふる某卿に向ひて、咄、公卿など申す者は、主殺しの光秀にすら、將軍宣下ありたりと罵らるゝや、某卿勃然と怒り、不意に懷中より短銃を取出し、其の銃口を侯に擬す。後藤之を見て馳來り、身を以て侯を蔽ひ、某卿を叱して立去らしめたり。

如何にも其の光景が、想はるゝ。

容堂三條
邸に入る

是に於て侯は、蹶然衣を拂ひて退出あり、清和院御門外なる三條家の邸に引取られ、信受院の室に入らるゝや、已に日暮に近き頃なりしに、急ぎ祖父江久作を召し、先づ日之御門出張の兵隊に、令を傳へしめて曰く、今日の事は、全く薩長と會桑の私闘に過ぎず。故に我が土佐の兵は、決して之に加るべからず。侯は又曰く、御門を警衛せる我が兵隊は、何者にも若し禁闕に侵入すると見ば、朝敵と心得て之を討て、諸隊私に自ら進退せず、我命を待つべきなりと。

三條家と山内家とは、親類の間柄だ。故に彼は退いて三條邸に赴いたのだ。

三條公の
忠告

或は傳ふ三條公は、侯に向ひ、深く忠告せらるゝ所ありしにより、侯にも歸國の儀は思止らるゝ事となり、更に岩倉公の注意にて、尾越兩藩と同じく、禁闕守護の御命下り、日之御門の警衛を御受けあられし次第なりと。(鯨海群侯)

容堂意見

尙ほ山内容堂の正月三日の朝廷に提出したる意見書は、左の如し。

德川内府之儀に付、昨日(正月二日)廷議會桑兩藩大阪より致歸國候上、内府(德川慶喜)可被召御沙汰之旨、奉領意候。然に先般も申上候通、内府早々被爲召、朝廷之

御規則速に被爲議定、四海寧謐の基本相立候儀、今日之急務にて、會桑歸藩の遅速は、全く小事と奉存候間、是に不拘、一日も早く内府歸洛之御沙汰被爲仕候儀、當然之御事と奉存候。

正月三日

山内 容 堂

此の如く彼は、會桑歸國杯は、姑らく措き、只だ速かに德川慶喜を上京せしめよと提議したのだ。

朝廷動ぜ

されば鳥羽、伏見の開戦は、彼に取りては全く不本意千萬にて、其怒を主戦派に遷したるも、彼としては寧ろ異しむに足らない。但だ當時の朝廷には既に其人ありて、容易に動す可くもなかつた。當時新たに參與の命を拜したる井上聞多が、今や味方は薩長決死の兵だ。幕軍は鳥合の驕兵、此の戦は必らず勝算我にある。勝ちさへすれば、德川氏の八百萬石は、朝廷の御領地となる。若し土佐が反抗すれば、その上に廿四萬石を増加する迄にて、寧ろ朝廷の爲めに祝す可きである。容堂公が兵を引て歸國すると申すならば、勝手に歸國せしめて然る可し。(忠正公勤王事続)

と言ひ放つたのは、主戦派に取りては、大に人意を強うする所以であつたに相違あるまい。

大久保容堂を説く

尙ほ山内容堂は、同夜伊達宗城と、三條小橋の旗亭にて小酌しつゝあるを、大久保一藏訪問し來り、小話して、必らずしも容堂が歸國するものにあらざるを確め、大久保も其意を安んじて去つた〔伊達宗城の直話〕と云ふ説もある。而して當時薩長の連中には、容堂の邸舎大佛に打込んと逸る者もあつたが、西郷は鹿兒島城下にさへ佐幕派は居る、必らずしも土藩を酷責す可きではないと制止し、戦報を聞かば、乾は必らず國許から兵を率ゐて來るであらうと言ふたとの説もある。此れは中らずと雖も、遠からざる言であらう。

【四】 動搖豫防の諭告

朝廷の無事解決策

朝廷側では、最後まで無事解決を期待した。されば幕兵が京都打入の警報に接するや、一方に勅命謹承の返答を齎らし、大阪より還りたる尾越兩藩主をして、其

の言責を實行す可く、右人數早々引拂様取計可致候と命じ、又た上參與四條隆誥を伏見に派遣し、姑らく徳川慶喜の上京を止めしめんとした。

徳川内大臣

先達而下阪に付、尾越兩藩へ鎮定之儀、被仰付、御請申上候處、今日大兵伏見表へ押出候趣、如何に被思召候、都下人心動搖にも可及候間、御沙汰有之候迄、上京之儀可_レ見合候事。

然も四條隆誥は、遂ひに赴くに及ばなかつた。

伏見大津防備令

尙又薩長、土、藝四藩には、伏見の防備を嚴にす可く、又た彦根、大洲、平戸、大村、佐土原五藩には、大津の防備を命じた。而して何れも、若不奉命候へば、不被_レ得_レ止之場合に付、爲_レ朝敵を以て、御處置可_レ被_レ爲_レ仕候事とか、若しくは、若押而上京亂暴等之儀有之候は、其節は不得_レ止之儀、可_レ爲_レ朝敵に付、可_レ致_レ其處置、御沙汰之事とか、萬一の場合をも豫じめ指令する所あつた。而して同時に宮、堂上、及び地下官人に、左の如き諭告を發した。

堂上地下官人諭告

大政御復古に付而者、深被_レ廻御遠慮、各藩衆庶一點之遺憾なからしめ、上下戮力

偏に御國威維持可被爲遊御趣意に而、去月九日來尾州越前等へ、懇に御沙汰之趣も有之、兩藩にも出格盡力、追々鎮定之道相立、追々思召之通可運之趣言上も有之候處。

此れは十二月晦日までのこと。

從昨日(正月二日)到今曉、阪兵追々伏見表出張、其實如何難計候得共、不容易進退、其儘難被差置次第に候。

此れは尤のこと、朝廷として到底袖手傍觀の出來得可き様がない。

人心動搖豫防

乍去、尙又尾越兩藩へ被仰付候廉も有之、此上盡力鎮定可致旨、言上候間、旁平釋に者可至哉に候得共、何分前條之件々、意外之形勢に付、御油斷不可有之儀、萬一之節者、當今彈丸戰爭之情態、不被爲得止、一時叡岳へ御遷座之思召に候間、心得迄に被仰渡候、但緩急其期に臨み、狼狽無之様、兼而覺悟可有之候事。

但即今猥動搖不可有候事、猶又三番所非藏人、取次口以下、口向一同諸官人に至り、各半は供奉、半は此御所可爲留守候に付、其番々にて、兼て可申合置事。

此の如く人心の動搖を豫防し、併せて開戦の場合には、主上の御遷座を豫告した

るものだ。而して斯る豫告が、却つて人心動搖の動機となることも、決して必無では無い。兎も角當初は、一發の彈丸が飛ぶに際せば、直に御遷座と豫期したものに、それがやがて愈よ苦戦の場合にと一變し、而して大捷の爲めに、遂ひに其事無くして止んだものであらう。

宮中一時騒立

尙又た尾越兩藩に禁闕の警衛を命じ、宇和島にも同様、禁闕警衛可有之と命じ、又た高野山に立籠りたる鴛尾隆聚には、紀藩と力を戮せ、大阪城を衝く可く命じ、紀藩にも同様の命を下した。而して夜半に到り、鳳翬を紫宸殿の階上に持ち出すものあり、公卿等何れも乘輿叡山に遷幸し、皇姑淑子内親王(仁孝天皇々女)も、之に従はせらるゝものと猜定し、宮中一時騒ぎ立つた。

山階宮制止

此れは主殿頭壬生輔世が、前記叡山遷幸の告諭を見て、豫じめ駕輿丁に、其の準備を爲さしめたるものであつた。然るに松平春嶽、伊達宗城等は、山階宮晃親王に謁して、鳳翬一たび動かば、天下の大事去らんと諫めたから、親王より公卿を制止し、宮中も漸く鎮定した(岩倉公實記)。當時朝廷の倉皇の狀想ふ可しだ。

【五】正月三日の朝廷に於ける岩倉具視

討幕張本
岩倉

討幕の張本は、岩倉具視だ。彼一人では無いとしても、彼は重なる一人だ。討幕密勅降下の如きも、偏へに彼の畫策に出でたるもの。されば彼は此の一點に於ては、大久保、西郷とは、特に大久保とは無二の同志だ。されど彼は十二月九日の大改革には、脱兎の勢を作したが、正月一日、二日、三日に至りては、當初は處女の如く、出來得可くんば、干戈を動かさずして、改革の効果を收めんことを期した。その爲めに大久保をして、決死、必死の上申書を呈せしめた。(參照 六六冊九四九五及び一〇三)

岩倉決心

惟ふに岩倉の此の如く前に急にして後に緩、前に猛にして後に寛なりしは、果して當人の言の如く、大政返上の爲めに、徳川慶喜を見直したる爲め乎、否乎を詳にせざるも、少くとも其の目的は變せざるも、其の手段を加減したるは相違なし。然も彼は愈よ大阪側が、京都打入を敢てするに於ては、今更ら平身低頭して之を驩迎せんとするものでは無かつた。彼には最後の決心が存在し、且つそれが決し

岩倉の剛
體

て動搖し無かつた。

堂上激派の一人、烏丸光徳は、岩倉の態度が、鮮明を缺くを見、彼は尙ほ心を佐幕に存するものとし、非藏人松尾但馬に向つて、岩倉が大事を誤るを語り、正月三日の夜、烏羽伏見の戦急なりと聞き、憤然岩倉に向て其罪を責め、若し謝せずんば、彼を刺さんと、刀を懷にして起つた。松尾は袂を牽いて止めたが、聽かずして岩倉の休憩所に入つた。此時砲聲宮中に轟き、戸障子皆な震ふた。岩倉は神色自若、脇息に據りて假睡してゐた。烏丸は彼の肩を揺がし、伴り報じて曰く、官軍已に敗れ、敵兵京都に迫ると、岩倉曰く、予は一死以て國に殉せん、卿等宜しく後圖を作せよと。此に於て烏丸も始めて岩倉の人物に敬服し、出で、松尾を召し、再び岩倉に對して異心を挿まざる旨を告げたと云ふ。(岩倉公實記)

朝廷大困
難

兎も角も三日の夜は、實に朝廷の内外とも、大混雜の狀、知る可しだ。而して議定の面々、及び諸藩出身の下參與なども、何れも烏羽伏見の砲聲を聞きつゝ、之を以て薩長對會桑の私闘と見做し、若しくは見做さんとする者多數にして、其の多數を壓して、朝議を確定したるは、上に三條、岩倉あり、下に大久保ありと云はねばなら

ぬ。廣澤眞臣日記に曰く。

徹夜大騒動

正月三日 申の下刻、於伏見、徳川先鋒、會桑歩兵等と、薩土長之兵隊、戰爭相始る。此件を以、薄暮御所へ罷出候處、東久世、岩倉兩卿より、斷然下參與被仰渡。此内以來御斷をも申出置候得共、是非令所勤候様との御事に付、御請申上之。徹夜實に大騒動、難盡筆頭。以後日々御所へ出勤す。

と、徹夜實に大騒動、難盡筆頭の一句、當夜の光景を描き出して、眞に逼ると云ふ可しだ。

尙ほ薩士伊集院兼寛の手記に曰く、

捷報宮中に入る

正月三日 幕兵鳥羽伏見兩道に迫り、戰端已に開け、捷報一度達するや、宮中疑懼の色變じて、歡喜の聲となり、前には西郷、大久保の宮中にあるや、蛇蝎の如く近くものなかりしを、陸續來りて面談を請ふもの多く、煩に堪へず、只今歸邸せりと、西郷の話せることあり、且語て云、鳥羽一發の砲聲は、百萬の味方を得たるよりも嬉しかりしと、予等に向て一笑せり、當時宮中の形勢を想像するに足れり。〔大久保利通傳〕

如何にも其通りであつたらう。尙ほ正親町三條實愛日記に曰く、

三日

- 一 昨夜來、阪兵上伏之旨（伏見に上るを云ふ）長人より申出、且内よりも申來。
- 一 已半午前十一時參内、阪兵上迫候旨、追々申來、戸田よりも届出（戸田家と正親町

三條家とは親類の間柄）。

- 一 以勅使可止兵可被仰下被決候。
- 一 申刻（午後四時）より鳥羽邊薩藩賊交戰之旨申來、追々全勝候由也。
- 一 伏水所々放火、爭戰相始、徹明。

とある。此れにて其の急惶惚忙の狀、察す可しだ。されば朝廷に於て、仁和寺宮嘉彰親王（後に小松宮彰仁親王）に、征討將軍を命せらるゝに至つたのは、翌正月四日のことであつた。

【六】 正月三日の戰場に於ける土藩の行動

土佐と薩長
兩立薩

山内容堂及び後藤象二郎等の態度は、薩長とは全く一致し、難き立場にあつた。要するに西郷、大久保等をして、慶應三年十月以來、約一百日間、悩みに悩ましめたのは、土佐の調停的態度であつた。薩長は慶喜を除外して、改革を行はんと欲し、土佐は慶喜と與に、改革を行はんと欲した。而して最近に於ける容堂等が極力武力解決に反對したる顛末は、既記の通りだ。(參照 三)

土佐徳川
方諒解

尙ほ山内容堂、後藤象二郎等と、慶喜及び其の周邊の間に、幾許の諒解が成立してゐたかは、容易に揣摩し難きが、大阪側では幕兵一たび京都に近けば、土藩の内應を期待したることは、若年寄格平山圖書頭が、當時幕府の外交吏員福地源一郎に向つて語りたることを以てしても、自から分明だ。(參照 六六冊七七、七八)

後藤等の
機心

而して此れは未だ必らずしも、大阪側の妄想として一笑に附し去る可きものでなく、其間には多少其の理由若しくは事情の潜在したるは疑ふことは出来ない。何人も後藤等に多少の機心の存在したるを否定するものはあるまい。若し問題ありとせば、否定ではなく、其の程度如何であつた。但だ伏見に、警備として、薩長と共に出張したる土藩の兵士は、未だ必らずしも悉く容堂や、後藤の意の如くなら

土藩中の
討幕派の

なかつた。即ち彼等の中には、小隊長山田喜久馬の如き、乾退助一味の討幕論者があつて、薩長と其の行動を與にした。

伏見に於
ける會土
交渉

當時—慶應三年十二月廿八日—伏見に出張したる土佐の兵は、二小隊に過ぎなかつた。而して正月二日會津兵の二百ばかり、手毎に槍を提げ、伏見京橋に上陸するや、薩藩淵邊直右衛門、有馬藤太、長藩林半七、鳥尾小彌太、土藩谷兎毛、八木佃作相謀りて、同伴し、同夜會藩宿陣御堂(東本願寺)に至り、一應之を取り糺したるに、徳川内府御召により上京に付、其の先供であると答へた。仍りて谷兎毛は一同を代表し、朝廷の御旨を伺ふまで、通行差控へを申し渡し、同夜は引取り、翌日は愈よ幕の歩兵隊も到着し、それから竹中丹後守の名を以て、通過の照會が來た。之に對しては、土藩谷、八木の名をもて、左の如く答へた。

過刻御紙面之趣、委細承知仕候。然に於朝廷未何等之御沙汰無御座候に付、今少御通行之儀、御差控被下度、御沙汰次第、是より御答可仕候。先右計如斯御座候。

以上

正月三日

八木佃作

六 正月三日の戦場に於ける土藩の行動

竹中 丹後 守 様

土兵發砲
中止

谷、八木何れも土藩の小監察だ、尙ほ正月三日には、土兵の此の方面に在る者四小隊、其の隊長、山田喜久馬、吉松速之助、澁谷傳之助、松下意興の四人であつた。會藩の砲隊長白井五郎太夫が兵を率ゐ、竹田街道に進まんとして、土藩の陣地に近くや、小隊長澁谷傳之助は、已に裝彈せる銃口を之に擬し、兵士を折り敷かせたが、白井は待つた、と大聲に呼はり、兩手を揚げて之を制し來つた。澁谷は先づ敵の砲門を後に向けさせ、朝命を傳へて、其の通行を拒絶し、白井は更らに他に轉じ去り、爲めに互ひに兵火を交ゆるに及ばなかつた。

尙又た伏見の市街戦に際しても、敵兵は土藩の陣地へは寄せ來らず、山田は唯だ遙かに火光の中より、敵兵を狙撃せしめてあつたが、夜半過ぎに至り、斥候に出でたる曾和傳左衛門は、長藩林半七の言を傳へて來援せしめたが、山田が進んで之に趨きし時は、敵は既に去りて、空しく戦機を逸した。山田の手記に曰く、

山地二川
の参戦

余の先刻斥候せし場所へ、早や敵兵襲ひ來り、丹波橋通りの一寺院に據る。余等

の隊は西に進んで、守口橋の東側に陣せしが、偶ま薩藩の白砲隊來り進み、我隊竝に二川元助の隊も來り加り、八丁繩手に戦ひしに、敵兵は忽ち崩れ立ち、思ひかけなく、一方に我藩の旗を望む。是れなん山地忠七の隊が、北方より横手を衝き來るにぞありける。山地、二川の二隊長は、孰も余の同志にして、十分の戦意あるも、皇居守衛中なりしより來るを得ず、戦ひ始るとの注進あるや、二川（後に坂井重季）は兵糧を戦地に送るとて出張し來り、山地は亦鳥羽街道に大斥候をなすと唱へて、戦地に來り、偶ま長兵を援けたるなり。

尙ほ、維新土佐勤王史に、

此の日北村長兵衛も、亦砲兵隊を指揮して、戦列に加はる。抑も此の一戦のみにて、負傷者數人を出せしに過ぎざるも、之によりて、纔に土藩の面目を保ち得たるは、頗る僥倖と謂ひつべきなり。

とあるは、如何にも妥當の觀察であらう。此の如くして土藩は薩長に伍して起つを得た。

第二章 戦闘初日及第二日

【七】 東軍側の観た正月三日の開戦 (一)

阪軍進出 長薩土側からの正月三日の戦争は、前に記したる通りだ〔参照 六六册一〇〇一—一〇五及び六七册六〕此れより眼を轉じて、東軍側の立場より觀察せんに、

扱も阪軍は正月二日、大河内正質〔松平豊前守朝臣を總督とし、若年寄竝塚原昌義〔但馬守〕を副とし、我合津が藩兵は、田中隊、上田隊、生駒隊、堀隊、大砲隊二組、別選隊、諸生隊竝に我藩に附屬せる新選組にて、桑名、大垣、濱田、高松、鳥羽の諸藩兵にして、水陸竝び進み淀に至る。〔合津戊辰戦史〕

此れは二日の事。

薩兵阻止

明くれば三日、大目付瀧川具舉〔播磨守は、慶喜公の薩藩弾劾の上奏書を持し〔参照 六六册九〇〕〕佐々木只三郎が率ゐたる見廻組に護衛せられ、鳥羽街道より進んで上鳥羽に至る。然るにその時先驅は、四塚の關門に至れるが〔原註 關門は東

寺の南門の西三丁許、西國街道との交叉點にあり〕關門を守れる薩兵拒んで入れず、應接數回に及びたるも、守兵固く執つて應せず。具舉止むを得ず、淀に向つて退却す。此の如く慶喜薩藩弾劾の上奏文を携へたる瀧川は、空しく其の目的を達し得ずして淀に退却した。

薩兵發砲

此の街道を進み來れる阪軍は、大久保忠恕〔主膳正、又は豊後守〕が兵を主力とし、桑名兵を先鋒とし、新撰組、大垣兵等之に屬す。具舉は此の大部隊と共に再度京都に向ふ。此の時薩兵は上鳥羽迄進軍せるに、見廻組の士をして、徳川内府上奏の爲め上京する旨にて、再三交渉せしも、薩兵應ずる色なく、遂に申の下一刻頃〔午後五時頃〕に至り、薩兵より發砲す。是ぞ戊辰戦亂の第一砲聲なりき。〔原註、戦の始まりは下鳥羽の北方、赤池と上鳥羽の南方、小枝の間なる、おせき茶屋附近なり〕

開戦必至

薩兵が發砲を始めたのは、事實だ。但だ此れが爲めに戦闘を開始したと云ふは當れるも、もし此れ無ければ、戦闘を開始せすと思ふ者あらば、そは大なる妄想だ。發砲は何れの側より始むるにせよ、當日の形勢は、到底其儘にて済む可きものでは無かつた。阪軍は大阪を進發する時から、京都打入を目指してゐた。薩長軍は勿論

それを喰ひ止むるつもりでゐた。されば双方共に戦争の覺悟もて立ち合ふからには、戦争は必至の結果だ。

初日會戦
了る

是に於て佐々木只三郎令を下して部下をして齊しく進ましめた。隊士皆槍劍を揮ふて敵に迫る。敵兵大小銃を發し、彈丸雨注し、隊士多く死傷す。俄然呐喊の聲起るや、具擧の乘馬之に驚き、南方に狂奔し、後隊を蹂躪す。撤兵隊の將校驚き馬と共に走る。後軍敵を見ずして前馬の崩るゝと共に、兵仗を棄て、狂奔す。只三郎隊士に令して、銃を拾ひ彈を帶び、桑名兵、窪田備前守が歩兵等と再度敵に迫る。戦ふこと數刻、亥の刻頃(午後十時頃)に至り、決定的の勝敗なく戦地を去る。此れが鳥羽街道の初日の戦争を、會津側から見た記事だ。此れにて見れば如何にも兩軍が交綏したるが如きも、其の勝味は東軍にあらずして、薩長軍にあることは明白である。

伏見方面
開戦

尙ほ伏見方面の記事は、左の如し。
然るに申の下刻(午後五時)に及びて、鳥羽街道に於て砲聲雷の如きを開き、戦端の既に開かれたるを知り、伏見の我が軍士氣俄に昂り、京軍先づ砲聲を開始し

我が先發の隊を撃つ。

薩藩でも鳥羽では此方から先づ發砲したと云ふが、伏見では會津側から先づ發砲したと、現場に在つた林半七(友幸)などは云うてゐる。然しそれは別段問題ではない。既に鳥羽で開戦すれば、伏見で開戦す可きは當然だ。別に何れの方から發砲を始めたとして、それが問題となる程の事ではあるまい。

【八】 東軍側の觀た正月三日の開戦 (二)

林權助勇
戦

伏見に於ける發砲は官軍側では東軍より始め、東軍側では官軍側より始めたと云ふが、何れにしても開始せられた。當時會津藩の大砲奉行林權助は六十餘歳、長髮白麻の如く、大砲三門を發射して應戦した。其の距離數間、林は更らに槍を持して突撃せしめた。敵は障物に據り、我は然らず。組頭中澤常左衛門先づ斃る。我兵死傷少からず。林は隊士に命じて、援を陣將に請はしめたが、其の所在を得ず。番頭生駒五兵衛隊に至り、急を告げ、援を請ふたが、生駒は陣將の命無くんば兵を動かす

可からずとて、之に應せず。林はそれにも拘らず、此地一步も退く可からずとて、大砲を發射し、再び槍をもて、突撃せしめた。別選組頭佐川官兵衛、番頭上田八郎右衛門及び新撰組之を援けた。その最中に、伏見市街に火起り、火光は會津軍の背後を照し、兵士は悉く敵の照準中の物となつた。此時別選組頭依田源治敵弾に中つて斃れた。林は泰然動かず、死傷半ばに過ぎた。恰も濱田藩士伊藤梓、同藩士四十名を率ゐ來り、林に告げて曰く、憾むらくは援けんと欲するも兵器無しと、林は仍りて死者の銃を取りて與へた。伊藤等奮闘して、多く斃れた。偶ま一丸來り、林の面を掠めた。顔面焦黒と爲り、全身重傷を被り、前後三たび、復た起つ能はず。然も彼は猶ほ踞して號令したが、隊士彼を負ふて退いた。林は尙ほ疾呼して曰く、予を顧みるを要せず、須らく進んで敵を撃つ可しと、組頭佐藤織之進、同小原宇右衛門共に負傷し、尙ほ殘兵を督して奮闘したが、砲車破碎して用を爲さず、將士多く死傷した。遂ひに兵を伏見奉行邸に縱ち、四日午前一時比、退いて淀に陣した。

會兵背進

當時會津兵は林權助の指揮の下に、殊死して戦ふたが、一は地利を失ひ、一は全軍號令の統制を缺き、遂ひに最初の第一戦に、其の銳鋒を挫かれ、空しく背進の止む

林戦傷

無きに至つた。(會津戊辰戦史)

白井隊退却

三日會津藩の大砲隊長白井五郎太夫兵を率ゐて、竹田街道より入京せんと、京橋を渡りて、伏見町に入つた。行く數町にして土佐藩の兵之を遮り止めて曰く、此處は弊藩警備の地なれば、進軍は無用である。此處より遠からず別路あれば、その路よりせらるれば、敢て弊藩の關知する所にあらずと、宛も會津藩兵に向つて、無障礙の道路を指示したる趣きがあつた。(會津戊辰戦史)。仍りて白井隊は此れより進んだが、畔路狹隘にして大砲を曳くこと能はず、三門の大砲を遺棄し、四人にて一門を運搬し、迂回して土佐藩陣地の背後に出で、薩邸を襲撃し、火を放ちて竹田街道を進む。會津林隊戦ひ利あらず、命ありて白井隊伏見の街端に退き、遂ひに兵を淀に收めた。

幕府歩兵隊退却

三日夜子の刻(午夜)鳥羽街道の官軍、東軍を襲ふた。東軍は狼狽し、兵仗を棄て、走るものあるに至つた。幕府の歩兵頭窪田備前守(重章)歩兵頭竝大澤顯一郎等之を見て憤然衆を勵して進撃した。官軍大に亂れ、殆んど支へざらんとした。會津官軍の別隊、東軍の左翼を撃ち、東軍亦た亂れて奔り、退きて淀に陣した。

この勝敗
の影響

以上正月三日の開戦は、鳥羽より始まり、伏見に及んだ。二道の東軍は何れも相應に戦ふたが、遂ひに官軍の爲めに致され、入京の目的を達せざるのみか、止むを得ず淀に退いた。此の最初に於ける勝敗は、やがては維新戦史の全部に亘りて大影響を與へた。而して此の官軍に取りての勝利は、薩長側に取りては、恐らくは意外の賜物であつた。彼等は慶應三年十月密勅下降の比より、既に開戦の日に於ては、主上の御遷座を計企したるほどにて、豫じめ東軍の京都打入を期したるもの、如くであつた。然るに打入らざるばかりか、それが淀に退却したることは、全く豫期外であつた。意想外であつた。

【九】 薩藩側から觀たる正月四日の戦争

中書島戦

正月三日の官軍東軍戦間開始は、官軍の勝利に歸して、東軍は何れも退却した。然も伏見方面では、東軍の一部は中書島に據りて防戦し、退却の模様が無かつたから、薩藩の小銃二番隊の右半隊は、午前八時頃阿波橋の敵に向ひ、長藩兵と與に之

を攻撃した。又た左半小隊は、京橋筋に向ひ、長藩兵と、與に今富堤の堡壘に據れる高松勢を攻撃し、更らに増援を得て、之を撃退した。小銃一番、同三番隊は同日鳥羽方面に應援の爲め出動し、又た小銃四番隊は、午前九時頃伏見出發、鳥羽方面に進の豫定であつたが、阿波橋附近に於て、長藩兵の激戦中なるを知つて、之を増援し、且つ白砲隊の援助を得て、敵を撃退し、豫定を變更、午後四時頃御香宮に引き揚げたが、外城四番隊は、當日御香宮の警衛として、同所に屯した。

京橋筋の
戦

一番大砲隊半隊(砲三門)は、午前八時ごろ、京橋筋に向ひ、高松勢と激戦中なる小銃二番隊及び長藩兵に協力して、戦間に參加したが、大山彌助の率ゐる二番大砲隊の三分隊及び三番遊撃隊亦た増援隊として之に參加し、遂ひに此の方面の敵を撃退した。

官軍増援
隊下鳥羽
に至る

元來伏見市街は一筋道にて、加ふるに左右兩側の人家は兵燹に罹り、とても多數の兵を使用するの餘地なき爲め、増援隊たる二番大砲隊及び三番遊撃隊は、鳥羽に向つて前進するに決し、狩賀、赤池を経て、午後下鳥羽に到り、此の方面の戦間に參加した。

暗夜交戦 當日京都より小銃十二番隊、二番遊撃隊は増援として伏見に到着した。敵は、日没に至り、淀方面に退却したが、暗夜の爲め、各隊協議の上、翌朝を俟ち之を追撃することとした。

下鳥羽早曉戦

鳥羽方面に於ては、四日早朝午前四時頃敵又た襲來したが、戦間一時間餘にして之を撃退した。折から霧深く、午前八時に至り少し霽れたから、我軍一齊に攻撃に移つた。我が第一線が、下鳥羽入口に至れば、村落に敵の防禦線があつた。仍て正面より一番砲隊及び小銃五番隊、左方乾田より私領、外城の諸郷隊並に小銃一番隊を以て、之を攻撃し、右方河原よりは、小銃六番隊が、敵の左翼に逼つたので、敵兵はやがて退却した。然るに敵は下鳥羽の中央なる菊亭殿用米庫に米俵もて臺場を築き、頑強に防戦したるが爲め、我軍大に苦戦し、正午比に至つて漸く之を撃退するを得た。而して此の點に於ては、伏見方面より赴援したる小銃一番隊の、敵の右側に對する側面攻撃は、大に効果があつた。それより官軍は、敵を追撃して、富の森に進出したが、此時一番遊撃隊、兵具隊、私領一番隊、並に長藩第三中隊（整武兵等の到來したるを以て、是等諸隊を第一線に進め、昨日來の第一線各隊を第二線に變更

した。

官軍砲兵の優勢

伏見に在つた薩の一番大砲隊の半隊と、大山彌助の指揮する二番大砲隊三分隊も、午後來會したので、鳥羽方面砲兵の力は、益々優勢となつた。

富の森戦

富の森は、此の方面に於ける、要害の地だ。敵は壘を以て、臺場を築き、烈しく我軍を砲撃し、我が損傷少からず。依て伏見大川筋より白砲隊を進めて、側射を加へ、二時間餘も攻撃したが、遂ひに其の目的を果さず、加ふるに日没に及びたるを以て、我軍は横大路村に引上げ、夜を徹するに至つた。當日の朝、薩藩小銃八番隊、番兵一番隊は、京都黒谷なる會津の屯所を襲ひ、屯所殘留の大小砲彈、火藥、金品等を收めて歸營した。（元帥公傳 大山巖傳）

官軍苦戦

以上の所記によりて、略ぼ伏見、鳥羽方面に於ける、戦間第二日の概況を知るに足るものがある。當日は東軍も善く戦うた。是を以て官軍も頗る苦戦した。

〔107〕 長藩側より觀たる正月四日の戦争

大將軍宮
出動

更らに長藩側から、正月四日の戦闘を觀察せんに、

四日天寒く、風亦愈々加はる。幕軍曉を冒して、鳥羽、伏見の兩道より更に來り進む。薩兵の鳥羽に在るもの、先づ逆へて、之を撃つ。戦ひ利あらず。時に大將軍宮（仁和寺宮嘉彰親王）此曉既に東寺に至る。更に進で鳥羽に向はんとす。薩兵錦旗を仰望して、士氣頓に振ひ、兵を横小路の藪中に伏して、以て待つ。敵軍伏に遭ふて、隊伍擾る。薩兵乗じて之を撃つ。敵の援兵來る。薩兵頗る苦戦し、援兵を我が本營に乞ふ。乃ち相國寺駐在の第三中隊（整武隊）をして、鳥羽口に赴かしむ。（原註、此時朝命あり、將軍宮護衛の兵を出さしむ。兵數足らざるの故を以て、既に發する所の第三中隊を以て、護衛を兼ねるものと見做さんことを請ひたり）

長兵の強
味

第三中隊赴援の一事は、薩藩側でも、分明に之を認めてゐる（參照 九）。獅子の分前は、薩兵にあるも、長兵微りせば、勝敗の數、逆じめ睹る可からざるものがあつた。此處に亦た長兵の強味がありと云はねばならぬ。

三中隊の
進軍

會々、東福寺駐營の我一中隊（奇兵隊）半小隊、第五中隊第二奇兵隊一分隊、巡邏して、鳥羽口に至るもの、薩兵苦戦の狀を見て直ちに赴き援け、激戦遂ひに敵を斥く。

中書島戰

既にして第三中隊（整武隊）進で鳥羽に至り、夜に乗じて、敵兵を追躡し激戦す。薩兵既に大に疲れ、進む能はず。因て我兵亦軍を駐む。（防長回天史）
以上は鳥羽方面に於けるもの。

東軍逆風
に苦しむ

伏見方面に在りては、幕兵猶ほ中書島に據て拒戦す。我第二中隊（遊撃隊）主として、之に當り、進み撃て之を破る。我第六中隊第二奇兵隊將に鳥羽に赴かんとし、高瀬河堤に到て、忽ち幕兵と相遭ふ。激戦時を移し、遂に之を破る。此日敵軍進路を開かんと欲し、附近の民家に火す。風烈しく火盛なり。敵軍反て自から苦しむ。我が長薩兵機に乗じて之を撃ちたりと云ふ。

所謂る比叡風に吹きまくられたる東軍は、逆風であり、官軍は順風であり、それに東軍が自から放火すれば、東軍自ら火攻に遭ふと、殆んど同様のこととなる。

鳥羽、伏見兩路の敵軍、遂に大敗す。夜に及び、征討將軍、土州侯（山内春繁）を副將と爲し、越前（春嶽）伊達（宗越）二侯を參謀と爲すの内命を發す。皆辭して受けず。我兵第五中隊（整武隊）をして、第二中隊（遊撃隊）に代らしめ、第六中隊第二奇兵隊をして休息せしめ、第一（奇兵隊）第八小隊（前鋒隊）を出して、戦地に向はしむ。（同上）

高瀬川の戦

尙ほ林半七の語る所によれば、

四日は高瀬川の戦争ばかりで、是は朝の内十時頃までに皆な済んだ。其朝は霧がかゝつて居て、能く分らぬ。それに大砲を撃つた烟と、火事の烟で、眞黒になつて居つて、彼方も分らぬが、此方も分らぬ。鳥尾子爵鳥尾小彌太が怪我をしたのも其朝で、耳の後ろを少し怪我をした。何でもないといふて居つたが、血が出るから東福寺へ拉れさしてやつたやうなことであつた。それから鳥羽街道の方へは、抜刀で指揮をして出たが、アノ方の高松の兵は、皆な戦争をする氣でないから、ドン／＼逃げてしまふた。あとに残つた弾薬やら、銃などは、皆分捕にしたが、銃などは、一發も打つてはありはせなかつた。

併し會津兵や、幕府の兵の中には、善く戦ふたものがあつた。

【二】 東軍側より觀たる正月四日の戦争 (一)

東軍佐久

轉じて東軍側の立場から、正月四日の戦争を觀れば、東軍は大舉して、伏見、鳥羽兩

間窪田戦死

道より進撃した。官軍は豫じめ兵を鳥羽街道の竹叢中に伏せ、之を待ち受けた。鳥羽方面の東軍一齊射撃をなし、其鋒當り難し。忽ち竹叢中の伏兵東軍を撃ち、而して本道の官軍且つ戦ひ、且つ退きたるもの、亦た盛り反へして東軍を反撃し、その爲めに東軍は潰亂に陥つた。幕府の歩兵奉行並佐久間近江守(奮急は、敗兵を收めて再び戦はんとしたが及ばず。此に於て彼は従者澤田鉄太の携へたる銃を執り、自ら伏兵の指揮官を狙撃せんとしたが、却て竹叢中の伏兵の爲めに亂撃せらるるもの數發、遂ひに丸に中りて馬より落ちた。同時に歩兵頭窪田泉太郎(鎮守も亦た一隊の兵を勵まし、亂軍の中に入り、奮闘して死した。

間窪田の戦死

佐久間の従者澤田鉄太(變色は、長州の間牒であつたと云ふ(會津戊辰戦史)。佐久間が傷を被りて死するに當り、篤く看護し、頭髮を截り、厚く遺骸を葬り去り、維新後其の頭髮を、其の遺族に贈つたと云ふ。窪田は幕末には相當に知られたる治部右衛門の子。佐久間の兵は、歩兵第十一聯隊、窪田の兵は第十二聯隊の内の一大隊、共に大阪にて徵募したるものであつた。兵の内には敵の廻し者もあり、兩將共に、味方の丸にて戦死したとの説さへあつた。然も其の眞偽は確かでない。當時人心洶

退却阻止
の命を奉
ぜず

洵の際、何處まで信ず可き乎、何處まで疑ふ可き乎、何れも分明でなかつた。伏見方面には午前九時頃砲聲起る。會津藩の田中八郎兵衛斥候せんと、淀の市外に進む五六町餘、幕府の歩兵陸續相ひ接し來る。田中怪みて其故を問へば、隊長の命にて退却するなりと答ふ。田中は驚いて本營に復命せんとするに際し、偶ま竹中丹後守(重國)に遇ひ、其旨を告げた。竹中は怪みて曰く、曾て退却を命じたること無しと、自ら馳せて之を止むれども、従はず、皆な争ふて淀に退く。竹中も亦た餘儀なく淀に至つた。田中八郎兵衛は、走りて之を會津藩の陣將田中土佐に告げた。

白井隊迂
回策中止

此の時總督松平豊前守(大河内正實)竹中丹後守等相議して、宇治を迂回し、官軍の本營桃山の背後より進撃するの策を決し、之を會津藩の白井隊に命じた。午前十時比、白井隊は進んで、田中土佐の陣前を過ぎ、淀の市外に向ふ。田中八郎兵衛は、白井五郎太夫が後方より至るに遇ふ。八郎兵衛は怪み問ひて始めて其實を知り、乃ち會津藩の柴太一郎、廣川元三、郎等と共に白井隊を止む。諏訪常吉馬を馳せて、進軍中の白井隊を止む。白井は此に於て柴、廣川、及び幌役林又三郎(安儀權助の子)等と本營に至り、白井隊を援くるの兵あるか否かを問ふ。竹中曰く無し。此に於て廣川等は議

白井隊鳥
羽に向ふ

して曰く、孤軍深入、到底敵を破るに足らずと。會ま鳥羽の戦敗れ、大兵退却し來る。竹中曰く、鳥羽の戦急なり、請ふ宇治を措きて鳥羽を援けよと。白井隊乃ち鳥羽に向ふ。時に午後二時比であつた。

白井隊勇
戦

白井隊は此に方向を轉じ、小橋に至れば、幕兵伍を亂して退却中だ。白井隊は猛然其の中央に轟進す。官軍は勝に乗じて淀近傍に進み來り、砲を發する頗る劇し。白井隊は之に應戦し、進んで淀の市外に至つた。近傍平田蘆葦繁茂し、防戦に不便。官軍忽然密竹中より發砲す。會津兵退くこと一町許。白井五郎太夫、組頭小池勝吉、遠山寅次郎等止り戦ふた。宛も官軍援兵加はり、砲撃の猛烈前に倍した。

官軍潰走

白井隊は此處を先途と奮戦し、佐川隊、堀隊、林隊亦た來り援けしかば、官軍は辟易し、隊伍少しく亂れた。白井即ち大聲を發し、隊士を鼓舞して、進撃を命じた。伊東覺次郎、其聲に應じ、第一に進み、刀を揮うて突入した。古川次郎も亦進みて敵兵を斬つた。會津兵槍刀を揮ふて進撃し、覺に本道及び密竹中の官軍を銃撃し、遂ひに官軍は潰走し、東軍は進撃して小鳥羽に至つた。然るに本營より兵を收むるの命あり、斯る好機を空しく逸し去るを遺憾としつゝ、已むを得ず淀に向つて退却した。

【二】 東軍側より觀たる正月四日の戦争 (二)

白足袋隊
の勇

伏見街道に在る幕兵及び會津の林隊は、斜に鳥羽に向つて大砲を發射した。此れは官軍の援を絶たんが爲めだ。而して其の砲弾は白井隊の頭上に破裂した。加ふるに糧食乏しき故を以て、田中八郎兵衛、諏訪常吉等淀に至りて、伏見街道の砲撃を止め、本營に至りて、糧食を送らんことを謀り、併せて援を請うた。而して再び胸壁に至れば、我兵は已に勝を得て壁外に進撃しつゝあつた。淀に在る幕兵之を聞いて先を争ふて進み來つた。白井隊は皆な白足袋を着けて標識とした。此に於て白足袋隊の名大いに顯はる。

竹中歸休
を勵む

竹中丹後守會藩の將士に向つて曰く、貴藩今日の奮戦大に勞せり、須らく歸休せよと。白井隊士曰く、此地の防守は、我隊に一任せられよと。然も竹中は固く執つて曰く、戦は今日限りの事にあらず、卿等淀に至りて姑らく休息せよと。白井隊士曰

白井隊等
の淀休息

く、此の胸壁に二中隊を置き、前方十餘町に一中隊を置き、又其の前方に一小隊を出し、道傍の竹叢中に伏を置けよと。竹中曰く、哨兵を用るには自から其法がある。心配無用であると。歩兵頭秋山下總守も亦た曰く、幕兵一大隊及び大垣藩の兵を出し、路左の竹叢に兵を伏せ、路右の蘆葦は焼き盡して嚴守せしめんと。此に於て白井隊士議して曰く、上田隊は今日淀に在りて戦に會せず、宜しく之を第一に進め、河畔の胸壁を固守し、堤下の村家に屯在せしむべし。第二堀隊、第三白井隊と決し、之を竹中丹後守に告げ、白井隊、堀隊、佐川隊は淀に至りて休息した。已にして堤畔に在つた幕府の歩兵退いて淀に至るもの相接す。會津兵之を止む。幕兵等曰く、隊長の命なり、背く可からずと。上田隊は午後五時を過ぐる比鳥羽街道に至り、淀の街端に屯し、前方八町餘の地點に、守兵を置き、嚴守した。

薩の伏兵
を撃つ

然るに竹中丹後守の言に依れば、鳥羽街道の竹叢には、大垣兵を伏せしむる計策であつたが、大垣兵在らずして、却て薩兵の占むるところとなつた。戦ふに及んで伏起り、銃丸東軍の中堅に注ぎ、死傷多く、遂ひに幕兵敗れ、會津兵亦た苦戦した。然も白井隊奮戦し、佐川隊之を援け、遂ひに捷利を得た。會藩士佐川官兵衛、竹中丹後

守を見て曰く、軍機此の如くならば、明日の戦捷期し難し。旗本兵多きも、決死勇闘する者、會津兵に若かず。予は伏見の敵に當らんも、徒歩或は其機を失せんことを恐る。希くは其の乗馬を貸せよと、竹中首肯して其の乗馬を贈つた。

八幡方面
守衛

午後官軍八幡の方面に廻らんとするの報あり。淀本營より田中土佐隊、生駒五兵衛隊に命じて、之に備へしめた。八幡は松平伯耆守(宮津藩)の守衛地だ。其兵寺院市家に充つ。手代木直右衛門周旋して、田中隊を寺院に、生駒隊を市家に宿せしめた。四日の夜、佐川官兵衛は、少數の兵を率ゐて、伏見街道淀を去る半里許に篝火を焚き、巡邏を嚴にした。會ま幕兵俄然驚擾し、叫びて曰く、官軍舟を棹して下ると。依りて頻りに砲撃した。佐川隊士行きて之を見れば、燼餘の大木、河水に浮沈して下れるものであつた。同夜幕府は佐川に命じて、幕府の歩兵、築造兵及び大銃手一部を統率指揮す可きを以てした。因りて幕府の歩兵をして、淀川前岸の蘆葦中に伏せしめた。此れは明日官軍襲撃し來らば、側面より之を銃撃せん爲めであつた。而して又た佐川は明日幕兵を部署して、防戦す可き地理を視察し、終夜巡邏を嚴にした。(會津戊辰戦史)

燼餘流木
に驚く

慶喜敗戦
真相一斑
を知る

夜半徳川慶喜は、目付遠山金四郎を淀に遣はし、白井隊、堀隊、佐川隊、林隊の將士を慰勞した。而して松平容保も亦た其の近侍淺羽忠之助、加藤内記を戦地に遣はし、陣將田中土佐以下の將士を慰勞した。而して彼等は午後十時大阪に還り復命した。此に於て始めて東軍敗戦の真相の一斑を知るを得た。蓋しそれ迄大阪城中では、伏見方面の軍は進んで藤の森に至り、鳥羽方面は進んで東寺に據ると誤り傳へられ、それを信じ切つてゐたのであつた。

第三章 戦闘第三日

【一三】薩藩側より觀たる正月五日の戦争 (一)

東軍統制
乏し

正月五日は、戦闘開始の第三個日だ。東軍の中には、随分力闘したのもあつたが、其の大勢は概ね不利であつた。官軍は寡、東軍は衆であつたが、然も官軍には統制があり、東軍には動もすれば、それが乏しかつた。官軍には征討總督の宮が、錦旗を翳して發向あらせられたが、東軍にはそれと云ふ主將が出で來らなかつた。従つて東軍の士氣は官軍のそれに及ばざる遠しであつた。此れから正月五日の戦闘記事に入る。

薩軍の攻
撃部署

四日の夜、鳥羽方面に於ては、薩藩の總轄隊長、監軍等は、何れも翌日の攻撃要領に就て協議した。その結果、單に鳥羽街道方面よりの攻撃は、右は桂川によつて限られ、左は沮洳地で、展開を妨げられ、我が攻撃正面狭少の爲め、我が損害多き不利がある。仍て五日には、三方面から進軍し、敵を合撃するに若かずとなし、左の部署を

取つた。

右側 即ち山崎街道よりするものは、一番遊撃隊、隊長小倉壯九郎(知恩)、外城三番隊、隊長有馬誠之丞、兵具隊、隊長川路正之進(利貞)。

中央 即ち鳥羽街道よりするものは、小銃三番隊、隊長篠原冬一郎(國尊)、小銃五番隊、隊長野津七左衛門(鎮雄)、小銃六番隊、隊長市來勘兵衛、外城二番隊、隊長土持雄四郎、及び一番大砲隊(天砲五門、白砲三門)、差引中原猶介、二番大砲隊(天砲六門)、差引隊長大山彌介(慶)、左側 即ち伏見街道よりするものは、三番遊撃隊、隊長西千嘉寛二郎、私領一番隊、隊長龍岡左八郎、私領二番隊、隊長鮫島八十郎、二番遊撃隊、隊長大迫喜右衛門(貞造)、小銃十二番隊、隊長伊集院與市(兼豊)。

別に伏見方面には、右の外、一番隊(隊長鈴木武五郎)、四番隊(隊長川村與十郎(純義))等の小銃隊及び外城一番隊(隊長村田勇右衛門)、外城四番隊(隊長中村源助)、白砲隊(隊長成田正右衛門)が参加した。

富の森敵
壘に近づく

扱も鳥羽方面に於ては、五日午前七時小銃三番隊を先頭として、横大路村を出發し、新手なる二番砲隊之に次ぎ、我が先頭の富の森敵壘に近くや、激しき銃砲火を

受けた。此に於て小銃二番隊は、本道の左に、小銃五番隊、同六番隊は、本道の右に展開し、救應隊たりし外城二番隊は、後れて小銃三番隊に追加した。

大山隊の
進戦

大山彌介の指揮する二番砲隊は、小銃三番隊の線に進み、本道附近に陣地を占領するや、直に砲火を開き、砲戦を開始した。本隊後尾にあつた一番砲隊長續いて戦闘に参加し、小銃隊の戦線増加と相交りて、激烈なる戦闘となつた。戦闘と共に死傷は増加する。敵は前夜來急造の堡壘に據つて、頑強に抵抗するばかりでなく、動もすれば、出撃せんとする勢ひだ。此時富の森村端には、敵の群集が現はれ、躍動の氣配が見えた。大山彌介は直に部下に二十拇白砲の射撃を令した。射撃は見事に命中したが、全般の戦況は依然變化なく、小銃隊長敵に迫つたが、未だ突撃の機を得なかつた。時は早や正午に近いた。大山は砲戦を中止し、自ら陣刀もて、白兵突撃を命じた。而して全線何れも之を機として、突撃に移り、正午頃敵の砲臺を占領し、大山隊は敵砲四門を分捕つた。隊長大山も輕傷ではあるが右耳に負傷した。

敵の砲臺
占領

右側山崎街道に向つた諸隊は、午前六時から、兵具隊、一番遊撃隊、外城三番隊の順序で、横大路に於て桂川を渡り、其の右岸の地區を前進し、兵具隊は富の森西方、桂

川堤に進出して、戦闘中なる敵の左側を射撃し、敵に大なる打撃を與へた。而して一番遊撃隊は、其の南方に出で、敵の側背に逼り、外城三番隊は、又其の南に迂回して、敵の背後を脅威しつゝ、漸次淀に向ふた。

同日長藩第三中隊登武は、薩藩の鳥羽街道方面に於ける本道部隊の右翼に在つて戦闘に参加し、前日山崎方面に向つた長藩の第八小隊、徳山の二小隊、岩國の一小隊亦た當日桂川を涉り、鳥羽街道の薩軍に應援した。

〔一四〕 薩藩側より觀たる正月五日の戦争 (二)

淀堤の戦

尙又た伏見方面に於ては、五日未明長藩兵二中隊(振武、奇兵)と、因州砲二門とを先頭とし、薩藩小銃十二番隊及び白砲其の他の諸隊之に續いて、淀堤へ進發し、十五六町許前進した時、長藩兵は會津、桑名兵と開戦し、小銃十二番隊及び白砲隊亦た之に参加した。然るに堤防竹藪中より、敵三十人許り、不意に槍刀を以て突出し來り、彼我の距離凡そ三十間、我が隊小銃を連發して之を倒したるが、間もなく對岸

蘆中よりも、敵現出し、烈しく我軍に向て斜射を加へ、我軍は正面及び左側より敵の十字火を受くるに至り、爲めに長藩兵は頗る苦戦し、一旦引き揚ぐるの止むなきに至つた。薩藩小銃十二番隊及び白砲隊も亦た奮戦し、小銃十二番隊長伊集院與市は、戦死した。此の状況を見るや、長藩兵は再び進出し來り、引續き薩藩三番遊撃隊、私領一番隊、同二番隊、小銃二番隊等、逐次増加して、對岸の敵兵を撃退し、進んで淀に逼つた。

淀に迫る

東軍退却開始

當日の戦闘は、彼我共に鳥羽、伏見方面の部隊相合し、淀附近に於て全力を擧げての大決戦であつた。此の間敵兵は、數次逆襲に轉じたが、何等協同動作に出づることなく、全く個々別々の出撃であつたから、全般の戦況を動かすには至らなかつた。之に反し我軍の協力攻撃は益々旺盛、急激を加へ、特に砲兵の威は熾烈であつた爲め、敵は正午頃より隊を亂して、遂ひに退却し始めた。而して此の退却に際し、敵は淀の小橋及び大橋を焼き、我が進撃を阻止して、戰場を離脱した。當日は薩軍に於ても、死傷少くなかつた。而して二番砲隊には半隊長伊東強右衛門、分隊長中島彌次郎其他あり、小銃五番隊監軍椎原小彌太、同六番隊長市來勘兵衛戦死し、野

薩軍死傷

津七次(遺其之)に代つた。

淀敵の隻影なし

初め伏見方面部隊の發進するや、薩藩小銃一番隊及び外城一番隊は、長藩第六中隊(第二奇兵隊)と共に出發したが、それより別に豊後橋を渡り、淀川左岸を淀の背面向ひ、日暮前坊之池村に達したる時、既に遅く、敵は全く淀を退却して隻影を見ない。仍て是等の薩藩諸隊は、同夜坊之池村に宿營した。

官軍淀入

官軍の淀に進入せんとするや、薩藩士益滿與右衛門は、先づ淀城に至り交渉したる結果、同夜一番遊撃隊及び小銃四番半隊は淀に入城し、其他は淀及び伏見附近に宿營した。

一先京都に引揚

小銃五番隊、同六番隊及び一番大砲隊、三番遊撃隊は、三日以來、晝夜の戦闘に従事し、勤勞少くないのみならず、且つは大阪城攻撃の爲め、更らに計畫を新たにする必要ありとして、一先づ京都に引揚げた。

仁和寺宮士卒激勵

當日仁和寺宮には、東寺に在つて諸軍を總督し玉ひ、後更らに錦旗を懸して、淀の北岸に進ませられ、大に士氣を鼓舞せられ、屢々御馬前に敵彈飛來したが、敵兵既に退走したるを以て、再び東寺に歸られた。(元帥公爵大山巖傳)

征討總督宣示 抑も仁和寺宮の征討總督たる可きは、蚤とに薩長兩藩の討幕要人等と、岩倉等討幕派の公家との間に協議成立し、それが愈よ實現したのは、正月四日の曉であつた。

慶應四年正月四日 宣

二品 嘉彰親王

補征討大將軍

而して八景間に於て、此の宣旨を賜ひ、御休所に於て錦旗を頂戴、御學問所に於て節刀を賜はり、東寺迄出馬を命せられたのだ。

伊達等の阻止行はれず 然も當時は、當今戦争之意は、薩長兩藩而已。其他諸藩は其意無之、若唯薩長に御依頼被爲在候ては、朝議一に薩長の旨趣に出候様に相成、實に嘆息之至と、伊達宗城は鬨言し、土藝兩藩亦た之に和し、東寺御進發を沮止せんとしたが、漸く再三の勅命によりて、それが實行せられ、而して五日に至りて、東寺より更らに錦旗を飄へして、淀方面に御出馬を見るに及んだのだ。

【一五】 長藩側から觀たる正月五日の戦争

豊後橋より淀に向ふ

五日は天寒く、風烈しかった。敵軍は依然伏見、鳥羽の兩街道を扼して防戦した。長藩の三中隊(整武隊)は、薩兵と共に、會津兵と激戦數回、漸く敵を破つた。伏見口は我が第五中隊(整武隊)伏見街道に沿ひ、先づ進み、我が第一中隊(奇兵隊)因州兵砲二門を率ゐて之に繼ぎ、薩兵之に繼ぎ、而して又我が第六中隊(第二奇兵隊)をして、薩二小隊と共に、豊後橋(即ち觀月橋)を渡り、宇治道に沿ひ、迂回して淀に向はしめた。第五中隊(整武隊)は、千兩松―伏見街道の中央に一大松樹あり、豊太閤之を見て、千兩の値ありと云ふたとの傳説より、之を千兩松と稱した。然も今や枯死して亡し―に於て敵と交戦し、敵の二大砲を奪ひ、勢に乗じて之を追ふた。時に敵の槍隊二十餘人、伏して葦中に在るもの、不意に起て來り襲ふた。我が司令石川厚狹介は、敵の槍手に刺されて屈せず、槍を握て其の刺す者を斬つたが、遂に他の槍手の爲めに最期を遂げた。此地は河流と、沼澤間に在る一條の道路なるを以て、我兵互に相救ふに

千兩松の戦

淀城兵官
軍に通ず

便ならず。死傷多かつた爲め、餘儀なく退却し、因州の砲隊及び我第一中隊(奇兵隊)之に代つた。戦未だ久しからずして、因州の砲車破れた。我兵頻りに進み、更らに敵の槍隊、葦中に潜むを見て、之を銃撃した。敵兵も辛抱出来ず、槍を振ふて出で戦ふた。我兵多く之を斃した。敵の槍隊は何れも會津兵にして、最も勇悍を極めた。鳥羽、伏見兩路の敵軍終に大に敗れ、火を納所に放ち、淀小橋を渡り、淀に入つた。兩路の長薩兵、均しく之を追撃し、進みて小橋に至り、橋を隔て、連りに砲撃した。敵軍左右蘆荻の中に伏して、防戦した。敵軍謂らく淀小橋を守りて戦はんには、先づ淀城に據らねばならぬ。時に淀城主稻葉美濃守は、閻老の一人として江戸に留つてゐた。然るに淀城の留守者は、窃に欺を官軍に通じ、幕兵の入城を拒んだ。而して會ま幕軍中に、淀藩の將さに幕軍の後路を絶たんとするの風説が傳はつた。此に於て幕軍は淀を捨て、大橋を焼き、退いて八幡に據ることとなり、官軍は進んで淀を占領した。因に云ふ、淀小橋は淀市街の東北端、大橋は西南端に在り、今や河川改修の爲めに既に無し。

官軍淀占領

鳥羽街道
官軍應援

宇治街道の兵は、途中敵に遇はず、而も道遠く、黄昏漸く淀に達した。當日は前日山

當時の戦況

崎方面に向ふた我が第八小隊(藤原隊)、徳山二小隊、岩國一小隊も亦た川を涉り、鳥羽街道の官軍に應援した。

當時の戦況に就て三浦梧樓は、左の如く語つた。
草臥れたものだから、白河夜舟でぐつすり寝てしまつた。朝起きて見ると、バリ／＼音がする。モウ始めたぞ、只音のする方へと進んで行つた。町を過ぎ千兩松原の近くに到れば、もふ伏見の手は大敗れで、何の影もなかつた。淀へ向ふ千兩松の土手へ掛つて見たが、薩摩の大砲が一門中途に残つてゐる。話が前へ戻るが、其の朝土手を行つて會津の伏兵にやられたといふことは、此方は夢にも知らぬ。知らぬが佛でドン／＼駈けて行つた。さうすると淀近くの土手の松の間に白いものが一寸見へたと思ふと同時に、パタツと變な音がして、兩側から鎗をさげて土手上にたをした所か此方が不注意に空銃をさげて駈出したから、仕方がない。彼は地を這ふ如く、鎗先を揃へて、進み来る。止を得ず刀を持って座れ座れと地をたゞき、兵の形を調べ、座れと號令した。其内に早い奴は丸込をして打つた。此時我が隊長藤村英二郎尤も勇氣に任して軍刀を上段に構へ、大

聲にてさあこい〜と眞先に進み、危険云ふ可らず襟髪をつかみ後へ引き戻し、此時計らず、足を棒か何かで打たれた様な気がして土手にころびをちた。此の如くして奇兵隊の中隊司令三浦五郎(稻穂)は負傷し、半隊司令藤村英二郎は戦死した。而して三浦は負傷して、百姓の藁輿に乗り、東福寺に歸るに際し、山本常治郎より重き包を託せられた。東福寺の本營に歸り、その風呂敷包を解き見れば、豈に料らんや、それは藤村の首であつた。彼が戦死したから戦友の山本がその首を敵に與へざらんが爲めの仕業であつた。

【一六】 東軍より觀たる正月五日の戦争 (一)

上田隊の奮戦

正月五日黎明、官軍は伏見、鳥羽兩道より進んで淀の東軍に薄つた。會津藩の上田隊は、淀橋を隔て、防戦するも、官軍の砲撃甚だ急にして、我隊の死傷多く、上田八郎右衛門、衆を鼓舞するも、路は只だ一筋、左右皆な深溝にして、進退に便ならず。幕軍大川正次郎、瀧川充太郎、傳習隊を率ゐて善く戦ひ、淀の城外に在る者、之に應じ

白井隊の應援

た。此時會津藩の佐川官兵衛、槍隊を蘆葦中に伏し、更らに銃手を出して挑戦した。官軍伏あるを知りて進まない。長州振武隊將石川厚狹介奮然として曰く、危を見て避くるは卑怯である。いざ進めと自から銃手數人を率ゐ挺前して之に當つた。此に於て隊士相接して進み、東軍の一隊退くこと三町許。會津藩の槍隊左右より起り、縦横に官軍の中堅を突撃し、隊將石川厚狹介等を殲した。

白井隊は淀に在りて、朝食を喫せんとするに當り、偶々鳥羽方位に砲聲起つた。因りて上田隊を援けんと、左手に銃を執り、右手に團飯を握み、且つ食ひ、且つ馳す。官軍砲銃及び散弾を發する雨の如く、本道を進むを得ず。或は堤下を進み、或は人家に潜み、且つ戦ひ、且つ進んだ。堀隊も亦た淀に在り、砲聲を聞き、直ちに馳せて上田隊を援け、淀街道の人家に潜みて射撃した。

白井奮戦

官軍は昨日敗衄の辱を雪がんと、一齊に來り迫り、勢ひ甚だ盛んである。幕兵は大砲を曳いて退却す。會津藩大砲隊の組頭松澤水右衛門等追ひて之を止め、松澤大聲叱咤してその砲門を奪ふ。白井五郎太夫大に怒つて曰く、此地を敵に取られれば何の面目ありて、世に立たんやと、衆を勵ます。組頭小池勝吉聲に應じ、衆に挺ん

で健闘して斃る。上田隊の組頭中根幸之助亦た衆に先ちて奮起し、縦横に馳驅し、衆に令して槍を入れしむ。隊長上田八郎右衛門、隊長堀半右衛門も亦た共に采配を振り、大聲進撃を令し、槍を入れしむること三回。然も官軍の連弾甚だ烈しく、一丸中根幸之助を貫く。中根辱を貽す可からずと叫び、刀を抜き、咽喉を刺して死す。飯田初次郎、其首を敲る。堀隊の組頭三宅八次郎、衆に先ちて進み、令する時、亦た弾に中る。乃ち刀を抜いて自刎した。斯の如く將長死傷し、隊士亦死傷する者多し。白井五郎太夫、既に傷を蒙るを顧みず、自から砲を發して衆を勵まし、遂ひに重傷を負ふ。隊士之を後送して、淀の病院に移した。途次幕府の目付田中林太郎の來りて、慶喜公の命を傳ふるに會した。曰く昨日の激戦捷を得たり。蒲悦の至りに堪へず、褒賞は汝の欲する如くせんと。白井痛苦を忍び謝辭を陳べ終りて眠した。

白井傷死

白井隊士
尙勇戦

白井隊組頭海老名郡治、同松澤水右衛門も亦た重傷を被り、其他會津兵多く死傷した。白井隊目付遠山寅次郎及び白井隊士猶止りて砲戦す。官軍の勢最も銳し。會津兵散兵に展開して横撃せんと、堤を下り蘆葦の間に入りて銃を發す。背後二三町に在る味方の兵、頻に大砲を發す。其弾恰も我軍の頭上に破裂し、従つて同士討

の姿となる。而して伏見街道の東軍亦敗れ、官軍所々より潛^{ひそ}かに淀に入り、大砲小銃を亂射す。市中火起る。

大垣兵來
援

會津兵は、腹背敵を受け、進退維れ谷まり、皆な殊死して戦ふたが、殆んど支へ難き折から、會々大垣藩の兵一中隊許吶喊して馳せ來りて援けた。會津兵は激戦數日且つ疲れ、且つ飢ゆ。大垣藩の兵は、一時奮戦したが、忽ち又た退いた。會津兵も漸く退却し、尙ほ路傍の人家に伏して戦うた。後高松藩、松山藩の兵來り援くるも支へず、諸兵皆敗れて淀橋を過ぎて退く。時に正月五日午後二時比であつた。死者は多く淀の寺院に葬り、傷者は一柳幾馬等周旋して、運糧の船に載せて大阪に下した。而して白井隊士等は再戦して、此の恥辱を雪がんと、淀の城濠に下りて銃を洗ふ。彈丸連りに注いだ。

諸兵皆敗
退

【一七】 東軍より觀たる正月五日の戦争 (二)

伏見堤開
戦

正月五日の早曉、淀大橋の前方より、外島泰助、淀の會津藩軍事局に來りて曰く、官

軍伏見街道より來り迫る。速かに幕兵の援兵を請ふと、田中八郎兵衛馳せて之を本營に告ぐ。歸途已に伏見堤に砲聲の起るを聞く。伏見堤は別選組、新撰組、幕府の大砲隊を先鋒とし、林隊之を援く。松田昌次郎等、小林繁之助をして、林隊の組頭小原宇右衛門に出兵を促さしめた。會々小原は悠然鏡に對して自ら梳る。顧みて曰く、急迫にする勿れと。而して諸兵と共に發した。小原は豫じめ一死を期し、故らに容儀を修めたのであつた。

小原宇右衛門沈著

會兵突撃

佐川隊、林隊は何れも官軍の陣地を距る三町許に、吶喊して路の中央を前進した。官軍大砲を發して之を拒ぐ。會津兵之を避け、左右の堤蔭に分れて應戦した。此の地點は、淀の市外二町餘。官軍發砲殊に烈しく、殺氣天を衝く。佐川官兵衛大に奮つて槍を入れしむ。衆皆争ひ進む。會津兵多く死傷す。隊士金田軍助、望月新平、淀を距ること四町許に進み、松樹の蔭に倚り、官軍の來るを待つ。官軍會津兵の奮進して槍を入るゝを懼れ、辟易して退いた。長州藩の教導官某小旗を振つて、衆を勵まし、遁るゝ兵を斫りて來り迫つた。金田、望月等踴躍して進む。金田負傷し、望月直ちに進み、教導官を刺し、其の首級と小旗とを獲た。此れが當日の所謂る一番槍であつた。

た。

佐川勇奮

伏見方面長州の隊長某(按ずるに藤村英二郎ならむ)年十八、善く兵を指揮す。隊兵皆髪を截る。若し敗れなば、何れも生還を期せざる誓ひである。佐川官兵衛は、益々勇を奮ひ、刀を抜き指揮す。偶々銃彈側面より眼を掠めて傷き、又た胸に中つた。時に佐川は胸甲を擲てゐたから、頼ひに免れた。又た彈丸佩刀に中りて、刀折れた。組頭小櫃守左衛門代りて指揮した。士卒皆な奮戦、傷者を顧みるの違あらず。屍を踏えて争ひ進んだ。已にして小櫃も亦た左肩を傷き、在竹五郎太、林治助等大砲を曳き、彈丸雨注の間を直進し、官軍に接して發射し、其の勇敢眞に人を驚かした。

小原重傷

組頭小原宇右衛門は、林隊の殘兵を指揮し、衆に先ちて勇戦した。而して重傷を被る。二回、今朝髪を梳るの志に負かなかつた。

新撰組猛戰

官軍或は淀川を涉り、或は松樹に攀ち、或は竹叢中に潜匿し、烈しく銃を發す。會津兵殆んど支へず。幕府の大兵淀より來るも、進んで戦はんとする者は、僅に三十人許。土方歳三新撰組三十人許を率ゐる。路の中央に猛進したが、官軍の銃勢烈しく、左右の堤蔭に分れ、會津兵に合して戦ふ。時に幌役林又三郎、路の中央に踞し、銃を執

林權助父子

りて頻りに戦ひしが、又た銃丸に傷き、自から咽喉を刺して死した。林の祖林權助、其子又三郎、何れも關ヶ原役に際し、鳥井元忠の臣として、伏見城を守り、戦死した。而して其の子孫會津松平家に仕へ、權助に至つた。而して權助は正月三日伏見の初戦に重傷を被り、東歸の船中に歿し、其子又三郎亦た此の如くして死す。而して其の父子殉節の跡、宛も相肖たり。如何にも奇遇と云はねばならぬ。

幕軍士氣沮喪

此の如くして、兩軍相ひ持し、彼我共に進むを得ず。各々陣地に據りて戦ふ。午前九時を過ぐる比、田中八郎兵衛援を淀の本營に請はんとして、淀の大橋に至るや、竹中丹後守、高力主計頭に逢ふた。田中二人に謂つて曰く、戦況正に此の如し。會津兵連日の苦戦、疲勞甚だし、加之今朝以來未だ餐を得ず。請ふ幕兵を進めて、敵を一掃せよと。二人其策を問ふ。田中曰く、一隊は木道を進み、一隊は紆回して、蘆葦の間を過ぎ、敵を横撃す可しと。竹中等は之を嘉するも、曰く、歩兵等の命を用ひざるを憂ふと。此の如く幕軍の士氣は、概して沮喪し、殆んど其用に勝へざるものがあつた。乃ち一大隊を派して援けしめた。田中先づ進む。幕兵途にして止まり、進む者少し。會津兵死傷過半、新撰組、幕府大砲隊亦た健闘した。

【二八】 東軍より觀たる正月五日の戦争 (三)

淀市街戦

正月五日正午頃に至り、鳥羽、伏見兩道の軍皆敗れ、東軍は退却したが、官軍は敢て追撃せず。東軍は火を淀の市家に放ち、大橋を過ぎ、淀川の南岸に退き、壘を積み、胸壁となし、頻りに大小砲を發射した。官軍二小隊許、路の中央を進む一町許、我が砲彈敵中に炸裂した。敵驚き堤蔭に匿れて、進み來つた。遂ひに市家に入り、銃撃した。會津兵亦た胸壁に據り、奮闘す。會津兵、大橋を燒かんとしたが、能はず。東軍淀の城に據りて、官軍を妨がんとし、淀藩に交渉したが、淀藩は之に應じなかつた。藩主稻葉美濃守は當時老中の一人として、江戸に在り、稻葉家は春日局以來、徳川氏とは、特別の關係あり、且つ會津松平家とも、親戚の間柄であつたが、此の如く東軍を拒み、欺を官軍に通じたるは、何故であつた乎。東軍では實に意外の感を做した。

淀藩東軍を拒む

佐川剛勇

扱も幕兵は大砲一門及び彈藥を、路上に遺棄して去り、會津兵も亦た往々退却した。佐川官兵衛は、右手に折れたる刀を杖つき、左手に雨天傘を披き、之を持ち、彈丸

今泉巨海
亦勇戦

雨注の際を、徐歩して大橋を過ぐ。傍人あり、危険なり、疾走す可しと云へば、佐川は笑つて弾丸は中るものではないと云ひ、愈よ徐歩した。傘を用ひたのは眼を傷いたから、日光を防がん爲めであつた。會津藩の今泉傳之助、巨海源八郎は尙ほ大橋を拒守し、路上に遺棄したる大砲を發して戰ふたが、或人呼びて、我兵皆な退く、卿等も亦た早く退く可しと云ふ。時に田中八郎兵衛は、我兵を顧みれば、隻影も無し、仍て三人共に退いた。當日佐川官兵衛の統率する幕軍の歩兵、築造兵等遂ひに來らず。且つ淀川前岸の蘆葦中の伏兵も亦た實施せず、一々其の命令に背きたるが爲めに、苦戰遂ひに敗るゝに至つた。(會津戊辰戰史)

會兵退却

幕軍皆退

白井隊の殘兵、及び目付遠山寅次郎等淀に止る。田中八郎兵衛を見て曰く、全隊退くは何ぞ、余等も亦た退く可ならんやと。田中曰く、全隊の退却は余其の故を知らず。然も君等寡兵もて戰ふも、寸效無し。他日の責は余之に任せんと、共に退き、八幡の近傍に至つた。偶ま幕人某曰く、此地は余善く兵を配して戰はん、貴藩の兵は、八幡を防戦せよと。田中八郎兵衛馬を馳せて、八幡に至り、之を陣將田中土佐に告げた。然るに軍議中、幕兵皆退き、一人の止まるもの無し。此に於て田中隊陣將田中土佐

幕會兵葛葉村に次す

藤堂兵戦はず

が自から率ふ。此時迄戰爭に参加せざりしもの、生駒隊亦た退却した。田中八郎兵衛は、淀街道に復り、進んで斥候した。堀半右衛門、兵を率ゐて止まり守る。堀は慷慨して曰く、幕人某余に命じて、此地を守らしむ。而して幕兵皆退く。我兵昨日以來、大に善戦し、死傷亦た多く、而して甚だ疲憊す。我が一隊のみ止まるも、孤軍如何ともしがたしと。田中曰く、幕軍約に背く。君等亦宜しく退く可し。我其の他なきを保せんと。此に於て堀は兵を率ゐ、田中と共に退き、葛葉村に至つた。幕兵、會津兵、皆な此處に在り。佐々木只三郎は、見廻組を率ゐ、橋本前方に胸壁を築き之を守り、關門は小濱藩の兵、大砲數門を裝置して、敵に備へた。而して桑名藩の兵は、八幡山に屯した。幕府兵、會津兵の隊將等胥ひ謀りて曰く、幕、會兩兵は橋本の關門を守り、藤堂藩は山崎關門を守る。宜しく幕兵を分遣して、之を援く可しと。黄昏幕兵山崎に至り、藤堂藩の守兵を援け、共に官軍を防がんと欲す。守兵之を拒んで曰く、勅使四條隆平來り、幕軍及び會桑兵を討つ可きの命あり。故に之を辭すと。松山藩主久松定昭亦た人を關門に遣し、出兵を促がしたが、藤堂藩人は曰く、勅命は公然之を拒む能はず。心は幕府に在るも、表面は勅命に隨はねばならぬと。且つ隊將藤堂歸雲未だ大

阪より還らず、故に專對し難しと、歸雲は正月元日頃、大阪にて、徳川内府に建言し、本國より二大隊を呼び寄せ、指揮に従ひ盡力せんと云ひて、大阪を發したる由なれば、當時歸雲は關内に在りしを偽れるが如し。(會津戊辰戰史)

第四章 東軍の敗因

【一九】官軍、東軍勝敗の機

東軍不統制

正月三日より同五日までの戦況に就て、官軍、東軍双方の所記を對照すれば、自から分明だ。官軍は數に於て寡であり、東軍は數に於て多である。けれども質に於ては、官軍は精であり、東軍は粗である。官軍中には、實戰を経たる精兵もあれば、然らざるも敵愾の精神に燃えたる者多く、東軍には都會にて徵募せられたる兵も混滑し、且つ餘儀なく出役したる者も少くなかつた。而して何よりの相違は、官軍には統制が取れ、且つ協同作用が完全に行はれたが、東軍には殆んど主腦なく、銘々勝手の動作に過ぎなかつたことだ。然も獨り東軍の中に於て、善く戰ふたのは、幕軍の一部と、會桑の兵に過ぎなかつた。更らに切言すれば、兎も角も東軍の勝利と云はざるまでも、其の面目を主持するを得たのは、偏へに會津藩あつた爲めと云はねばならぬ。

東軍中の善戦者

東軍敗北の眞原因

東軍の安心自慢

此の如く東軍の種々の缺陷を綜合して考察すれば、其の一大原因は、主將である徳川慶喜に、確乎不拔なる戰意なき事に歸す可きが當然であらう。云ひ換ふれば徳川慶喜の心境の不安定に歸す可きものであらう。彼は此の大切なる期間に於て戰を欲するが如く、戰を欲せざるが如く、屢ば其の心境に變化を來した。而して當初より進退無二其の所信を貫徹せんとするが如き覺悟は無かつたのだ。加之東軍は豫じめ戰はずして必勝を期し、官軍は豫じめ戰ふて必敗と云はざるまでも、苦戰を期してゐた。乃ち官軍は豫じめ開戦と同時に、主上の御遷幸を計企し、苦戰となれば、乘輿を山陰から中國方面に移し、參らせんとする準備を爲し、東軍は之に反して、土佐の内應、薩長の孤立、凡有る好條件を勘定の中に入れ、大手を振ふて、京都に打入ることが出来るものと心得てゐた。而して其の結果が必勝を期したるものは敗れ、必敗を期せざるまでも、或は然らんとしたものは勝つた。是れ正月三日より五日までの大勢だ。

萬一官軍敗北せば

要するに朝廷の形勢は、官軍が戰捷を確實に占むるまでは、未知數であつた。若し萬一官軍が敗れたらんには、如何に朝廷に三條岩倉の如き硬派あるも、其の大勢

政體消長の重大關係

萬一慶喜の頭立

は固より幕政恢復とまでは赴かざるも、慶應三年十月中旬の形勢に復歸したるものと覺悟せねばならなかつた。而して京都に於ける土佐を中心として、越前、安藝、宇和島の如き、比較的公平の地位に立つ大藩、若しくは有力藩は、何れも薩長とは其趣を殊にし、何れも徳川慶喜の深厚なる同情者にして、其名は幕府ならざるも、其職は將軍ならざるも、尙ほ實際に於ては、徳川慶喜を官階の最高位と云はざるまでも、政治上の實權者たらしむるに於て、反對せざるのみか、寧ろ之を主張し、之を固執せんとしたる人々であつた。況んや自餘の諸藩に於てをやだ。

此の如く鳥羽、伏見の一戦は、朝廷に於ける政體の消長に取りて、重大の干係があつた。されば東軍をして敗北せしむるに於て、徳川慶喜の戰意の未確實が、其の重なる理由の一とせば、それが東軍に取りては、大なる呪詛であると同時に、朝廷に取りては、大なる仕合であつた。

切言すれば、徳川慶喜が東軍に與へたる大なる損害は、取りも直さず、朝廷に對して大なる利益を寄與したるものと云はねばならぬ。若し慶喜にして、當初より確乎不拔の意志をもて、是非共、萬死を冒して、薩長を一掃せんとする覺悟をなし、自か

ら陣頭に立たざるまでも、中軍の指揮者と爲りて、十二分の準備もて此の戦陣に臨んだならば、東軍に取りては、無上の仕合せであつたが、官軍に取りては多大の不幸であつたことは云ふ迄もあるまい。

慶喜間接
仕的朝廷奉

されど徳川慶喜は、慶應三年十月十四日には、積極的に政権返上をもて、朝廷に奉仕し、慶應四年一明治元年一正月三日一五日には、戦意不確定の爲めに、間接的に朝廷に奉仕したるものと云ふも、敢て牽強附會の説ではあるまい。

慶喜庭訓

人は皆な徳川慶喜の意志の薄弱を咎むるも、其の薄弱の中には、若干朝廷に對して所謂の弓を挽くのは、恐れ多しとの庭訓が、此れに加はりたることも、計上せねばならぬ。所謂の良心は人をして弱からしむるものが、此れであらう。そは兎も角も、歴史の眼孔から見れば、徳川慶喜は、能く負けて呉れたと賞讃せねばならぬ。

【110】 當時の形勢と大久保の書簡 (一)

箕田宛狀

當時の形勢を、手短かに觀察せんには、正月五日付にて、在鹿兒島島津久光の側役

箕田傳兵衛宛の大久保一藏の書簡が、最好の資料だ。此れは云ふ迄もなく、久光への報告書として見る可きものだ。

中將様(久光)益御機嫌克被遊御坐、大慶奉存候。猶御當地太守様(忠義)御同然被遊御坐、御同慶奉存候。舊臘廿八日追々形勢は申上候通御座候。〔參照 六六册六九一七一〕

正月二日
の朝議

徳川氏、尾州、越州公(徳川慶勝、松平春嶽)之御盡力にて、兩事件御受、上京の上被、遂々泰聞と之趣、舊臘晦日言上相成候處〔參照 六六册五三〕、去る二日猶亦朝議被爲、在兼而言上之會桑未歸國不致候に付、早々歸國取計、鎮定之實跡舉り候上、慶喜上京候様、御沙汰相成る御評決に御坐候處、例之通後藤杯異論相生じ、當日御運不相付候。

此れは正月二日のこと、先づ會桑を歸藩せしめて、而して後慶喜の上京とは、大久保等の意見、然るに後藤其他の軟派は、今更ら會桑歸藩などに拘泥す可きものにあらずと反對し、遂ひに埒が明かなかつた。

阪軍出動

翌三日坂兵大軍伏見迄進入(原註、會桑、高松、松山、志州)戎服にて大砲押立、追々に到

着上京いたすとの事故、兼て同所出張巡邏被仰付置候三藩(薩長土)を以、引合に及候處、徳川氏上京に付、先手之命を受、上京致候と之返答にて、然らば朝命を以警衛被仰付置候付、何分御沙汰有之迄之間、御差控可被成段申入候處、書通を以て、押て致上京候段相答候由

此れも既記の通りだ。〔参照 七八〕

出京阻止の朝命

右引合之次第、當日早朝相成候付、則朝廷へ御届に及候處、尙尾越へ是迄之手續も有之候廉を以、斷然大阪迄爲引拂候様、盡力可致旨を、早々朝命有之、且兼て伏見出張之四藩へ、尾越御達之趣も有之候に付、若背命不得止時宜に及候節は、云云御達之御紙面相下り候。

此れも既記の通りだ。〔参照 四〕

遂に開戦

然處同日七つ時分(午後四時)鳥羽街道鶴橋邊にて始戦と相成、續て伏見奉行所邊及砲戦候趣、追々注進有之、終に干戈と相成候次第に御座候。

此れも既記の通りだ。〔参照 六六册一〇〇〕

始戦の責任者

一 鳥羽街道之方、見廻役と稱し候得共、専會津、桑名の人數にて、大砲等押立進

入候間、此方より申入候は、朝命を以、通行不相成候段、一應は及應接候得共、押て進入いたし候段、相答候に付、則砲發に及候由、固より於伏見三藩より引合、押て入京之段、書通にて返詞有之、押て通行候得ば、及干戈候旨をも相答置たるよしに候得ば、始戦之處におひても、曲直分明なる譯に御座候。流石に大久保は、如何なる場合でも、政治家たる素質を堅持してゐる。彼は始戦の責任が、彼に在りて我に在らざる所以を、堂々と辯明してゐる。

官軍勝利

扱成敗之上におひても、連日之戦、一度も敗軍無之、今日(正月五日)淀城迄責詰、賊徒敗走、官軍別て相振、淀も官軍に屬し候由。

此れも其通りだ

征討將軍進發

一 昨四日(正月)仁門公(仁和寺宮嘉彰親王)へ征東將軍を被命、節刀を賜り、烏丸卿、東久世卿え參謀被命、錦之御旗被飄、未刻(午後二時)頃御進軍被爲、在候次第、固より壯烈之宮に在し、候得ば、嚴威當りを拂ひ、只々忝じけなさの感涙を催し候外無御坐候、昨夜東寺へ御宿陣にて、今日早々淀近邊迄御進軍被爲、在、誠雄雄敷御振舞、官軍之振起いたし候程、御觀察可被成候。

仁和寺宮を官軍の總大將とすることは、豫定の計企であつた。而して其の實現に就ては、尤も大久保の勸告、刺戟、促成の力に俟つところが多大であつたことは、今更ら云ふ迄もない事であつた。

【二】 當時の形勢と大久保の書簡 (二)

薩兵の勇

大久保は更らに薩藩の兵士に就て左の如き頌德表を上りてゐる。

一 御國兵隊之猛烈進戰、誠に紙筆に難盡、聞人見る人舌を卷ざるは無之候。初戰之處御大事に候得ば、實に握掌いたし居候處、注進之度毎に捷軍を奏し、朝廷に奉對候ては勿論、諸藩に對候ても、御國之美目無此上難有次第、御同慶此事に奉存候。土藩なども、十分之戰に不至、合力一體決死を以憤戰するは、長州而已に御坐候。

此れは全く其の通りであつた。

八幡山崎

一 山崎の固め、藤堂にて候處、是も官軍に屬候。依て今日藝州へも固め被仰付、

官軍に歸す

出張之賦御坐候。長より之應接にて、動し候譯に御坐候。依之八幡山崎は、官軍を以、取固め候には相違無御坐候。賊之勢ひ大に挫可申候。是を固付候得ば、華城に大匠之巢窟も、たまり得申まじく候。

藤堂の寝返りを打つたのは、東軍に取りては、一大打撃であつたことは、既記の通りだ(參照 一八)。八幡山崎既に我が手中に落つ。大阪城もやがては覆へすことは、萬疑を容る可からずだ。

彦根官軍に味方

一 大津へ橋本卿、柳原侍從殿爲勅使被差立、熊本、彦根、佐土原、大村、備前人數發向にて相屬し候。彦根は掃部頭よほど憤發にて、是非實行を擧げ、罪を償ひ候と之事に御坐候。實に世の中は意外なるものにて御坐候。是は關東より東海道を人數繰出候故、防禦の爲に候。既に草津迄大隊の歩兵到着の由被相聞候。

世の中は意外

「世の中は意外なるものにて御坐候」の一句は、單り官軍側ばかりでなく、東軍側でも亦た同様の感を爲したであらう。就中現在の情態を見せしめたらんには、地下の井伊直弼の如きも、定めて苦笑を禁ずる能はざる可きであらう。併し幕兵が東海道を攻上るなど、の心配は、其實全く杞憂に過ぎなかつた。大體から云へば、

東軍の主將に戰意なく、其の部下の七八分通り亦た同様であつた。而して眞に戰意あつたものは、會桑以外には、幕軍中の一小部分に過ぎなかつた。

備因亦官軍

一 備前、因州官軍に相違無御坐候。備本末、本家末家、共に大津へ出張、大に相振ひ申候。因州は本末、本家末家、山崎へ出張、同斷相振ひ申候。懸ては御疑念も可有之候得共、勢ひは言外にあるものにて、實に皇威振興、神州地に墜ざる所以かと被_レ存候。

「懸ては」とあるは、遠方から見ればとの意味だ。勢ひは言外にあるものにて、實に皇威振興、神州地に墜ざる所以と被_レ存候の一節は、大久保其人の心境を、全面的に描出したるものと云はねばならぬ。多年の辛苦、經營が、今日に到りて頓々拍子に好轉しつゝある現状を見れば、何人としても如是觀を懷かざるを得ざる可き歟。

紀州鷲尾轉に通ず

紀州も愈憤發、奉勅之向に御座候。鷲尾卿被_レ奉_レ内勅、浪士或は十津川士等相募り、高野山に屯集、凡千人餘之官軍に相及候處、紀州より及_レ贈品、互に爲_レ皇國可_レ致_レ盡力旨を以、使節迄相立て候中、自然勢に依て反し候場も可有御坐候得共、何にせよ御威光之然る所以にて、不堪_レ欣喜事に御坐候。尼ヶ崎、高槻同斷にて、是等は小

藩といえども、別て要所之事候處、山崎路は道を開き候様に相成候。鷲尾隆聚は、豫じめ岩倉等の内意を承け、舊陸援隊の浪士及び十津川浪士等を率ゐ、高野山に屯し、緩急に應じて大阪城を衝かんとの準備を爲しつゝあつた。然るに徳川親藩の紀州が、使節をもて、其好を修め、此れが驩心を繋がんとするに至つたのを見れば、天下の形勢は殆んど定まる所に定らんとするの徴候が顯はれたと云ふも、大早計ではあるまい。

【三】 當時の形勢と大久保の書簡 (三)

西園寺卿
丹波路發
向

一 丹波路之方、西園寺卿爲_レ勅使被_レ差立、長藩、國人數 (藩薩) 御相屬し、今日御發向相成候。是は三丹を占め、萬一之節、鳳輦之道を開候爲也。固より山陰道列藩へ直様勅命を以、御沙汰相成居、一公卿御差向ひ相成候得ば、悉く官軍に相屬し候模様有之候故、右之御計ひ相成申候。長州は雲州路より中國を攻上り候手筈有之候。

西園寺公望は嘉永二年十月の出生なれば、當時實に數へ年漸く二十、正味十八歳三個月の青年だ。彼の家は攝家に亞ぐ清華の一にて、固より公卿としての門地も隆かつた。其父は徳大寺公純、而して公純は實に鷹司政通の子、されば當時の鷹司太閤入道拙山は、即ち彼の祖父だ。

西園寺の才氣

此の如く彼は好位地を博す可く、殆んど總ての條件を具してゐたが、其中に於ても、彼が當時才氣煥發の青年として、既に識者に矚目せられてゐたことが、彼をして此選に中らしめた所以であらう。曾て正月三日、鳥羽伏見開戦の報朝廷に達するや、之を薩長と會桑の私闘として片附けんとの説が出で来るや、西園寺は直ちに之を論駁し、薩長は朝命を奉じて戦ふもの、之を私闘とは何事ぞと、やりつけた。岩倉は側から「小僧出来した」と云ふたとか、或は「小僧能く見た。この戦を私闘にしては、どうもならん哩……」と叫んだとかとの説がある。眞否如何は兎も角も、何れにしても彼は岩倉から其の尋常ならざる器であることを見抜かれ、而して斯の如き重任に膺つたものであらう。

平運丸砲撃問題

一 今日刑部殿上京、兵庫滞留各國夷情委曲相分申候。去る二日平運丸開帆之

處、幕船より及砲發、其儘兵庫港引返し候由、ラウダ、モンブランより相諭し候には、是非談判に及ぶべし。如何様之儀有之候共、港内にて及砲發候事は、萬國公法におひて無之事に候。江戸之事も固より曲在彼、且此一條十分之曲にて候。若應接之上、六ヶ敷くば、夷人に可任と申たる由、最王師被起候に付、何れへも荷擔不致筋評議決定に及候と之事。

刑部殿とあるは、薩摩家老の一人新納刑部のこと。ラウダは、當時英國領事、モンブランは、佛人にて岩下左次右衛門が、慶應三年十月佛國より同行したるもの。平運丸は薩船にて、幕艦の爲めに追撃せられたるもの。

兵糧心配なし

一 京師中は幸干戈不動、兵火之變御坐なく、糧米等二條城等之貯も有之、朝命を以、夫々御取調相成候。若糧米等差支候節は申出候様、御沙汰も承知仕候。尤彦根官軍に屬し候間、江州之道相開け候間、暫大阪之通路相絶候とも、決して差支無御坐候。仍米穀は餘分は凡て伏見邊、兵火之者救米、京地市中等へ配當被爲、在候御内評に御坐候。

兵糧攻に遭ふ心配は、此の如くして斷じて無し。

德川重罪
顯然

一 明日德川之逆罪之次第、朝敵たるを以、瞭然相鳴し、天下に大號令御發表之、御評決に相成申候。爲、鎮撫下阪と、表向をつくろひ、則、籠城割據之形を成し、新柵を結び、要所に公然警衛を命じ、且、外夷へ朝廷之惡を示し、暴戾之所爲、抔との文面を以、布告に及候次第等、重罪顯然たる事、殊に御當地戰爭前日に當り、於、攝海砲發に及候儀、各國公使群集之中にて、公法に戻りたる所爲、宇内に曲を廣め候譯にて、大に我が幸と可申候。

如何にも朝廷側の申分としては、此れ以上のものはあるまい。

右大略之形行申上候。

朝廷より之御達書、且、戰爭之御届、死手負等、或は分捕打取等之員數、夫々從政府御問合可有之候間、態と相略、見聞之及候丈相認、晝夜之參朝にて、許多之事情難申盡、宜敷御洞察被下、被達、尊聽候儀共、以賢慮可然奉願候、頓首百拜。

正月五日夜認

大久保一藏

養田傳兵衛様

侍史

正月五日までの朝廷の施設の大略は、殆んど此の一書に盡してゐる。

第五章 戦闘第四日

【三】 薩藩側から觀たる正月六日の戦争

東軍八幡
橋本に據
る

話頭は轉じて正月六日の戦争に入る。即ち戦闘開始第四日目だ。正月五日淀大橋を焼いた東軍は、八幡及び橋本に臺場を築き之に據つた。是に於て薩長聯合軍は之を攻撃し、薩藩では、一番、三番、四番、七番、八番、九番、十二番の各小銃隊、一番、二番の遊撃隊、外城一番、二番、三番、四番、私領一番、二番隊、兵具方一番隊、二番大砲隊の一分隊等、即ち十六小銃隊と砲兵一分隊とが、之に参加し、長藩兵の参加したるは、三個中隊と四個小隊とであつた。

官軍進撃

六日早朝薩長兵は、共に淀大橋下に於て、木津川を渡つた。東軍は其の第一線を八幡東端に置き、又其の砲兵を、同村落に位置せしめ、抗戦大いに努めた。薩長兵は砲兵を渡河點南方堤防に置き、最初渡河した歩兵をして、八幡附近の敵に對し、正面攻撃を行はしめたが、意の如く攻撃進捗しない。是に於て我が兩翼を張り、敵翼を

東軍八幡
を撤退

全く包圍するの策を取つた。此時右翼に進出した二番遊撃隊が、堤防に達せんとするや、敵は蘆中に伏勢して、不意に打掛り、先驅の人々之と接戦し、敵八人を殲じ、進んで豫定の攻撃配備の位置に就いた。

我が砲兵の八幡村を砲撃中、會々其の砲弾は村内の家屋に命中し、發火炎上したので、敵兵之が爲めに動搖し、午後二時八幡の守備を捨て、橋本に向つて退却した。是に於て薩藩小銃一番隊及び外城三番隊は、八幡宮の上地を経て、橋本に向ひ、其他は同宮北麓を橋本に向つて追撃し、長藩兵も亦た此の二道より追撃した。

藤堂兵の
官軍内應

此時山崎駐屯の藤堂藩兵は官軍に内應し、側面から橋本附近の幕軍を砲撃した爲め、幕軍の士氣沮喪し、遂ひに潰亂敗走の動機を作つた。抑も藤堂と井伊とは、萬一の際には各々東西三十餘州の旗頭となる資格を持ち、幕府の尤も恃みとしたるものであつた。然るに井伊は業に既に官軍に與みし、藤堂も亦た急に寢返りを打つて、東軍を砲撃するに至つたから、此れが東軍の士氣を沮喪せしめたのは、決して異しむに足らない。元來藤堂の兵は、幕命を奉じて、山崎を拒守したるもの、其の要人藤堂歸雲は、肥後の要人溝口孤雲と共に、京都に於ける軟派の牛耳を把り

たるもの。その藤堂が東軍に與せず、中立の態度を持するさへも、異常なるに、それが一變して東軍を砲撃するに至つたのは、眞に東軍に取りては、異常中の異常と云はねばならぬ。

四條隆平
の藤堂氏
鳴諭

此れは既記の通り〔參照 二〕正月五日勅使四條隆平を、山崎に遣はし、諭さしめ、たからだ。四條隆平手記に曰く、

五日夜第十二字(時) 勅を奉じて山崎に抵り、重臣藤堂采女を見て、其の兩端を持するを責め、速に賊兵を撃たしめ、又た陣中を巡視し、天明、天王山に登て戰狀を觀れば、賊兵大に敗走す。

と、而して彼が奉じたる勅旨は左の通りであつた。

藤堂 和 泉 守

藤堂への
勅旨

今般徳川内府上京先手之家來と稱し、戎服大砲等にて、伏見迄押出候儀、意外之進退、不可言之次第に候。右は兼て懇々御内諭、且言上之次第も有之候處、從朝廷警衛被仰付置候御場所不相憚突入之妄舉、實に不得止之時機被及掃攘候。最早叛逆之色顯然候に付、進軍追討、官軍被差向候間、山崎關門之儀、樞要之地に候條、

官軍救應、守關之大任、勤勞候様被仰付候事。

正月五日

但頃日御沙汰も有之候通、深頼思召候次第、偏に盡力奉公可有之候事。

藤堂氏受
書

而して正月九日に至り、左の受書を提出した。

去る五日、於山崎表御達被成下候徳川内府御追討官兵御差向に相成候付、御關門之儀、樞要之地に候故、官軍救應、守關之大任、勤勞仕候様、勅命之趣奉敬承候。右御請申上候。以上。

正月九日

然も藤堂藩は受書に先ち、直ちに官軍に應じて東軍を砲撃したから、東軍は全く此の方面からは不意打を喰つたのだ。而して東軍は午後七時全軍崩壊して、大阪に向つて潰走した。

【二四】 長藩側より觀たる正月六日の戦争

長兵八幡の敵を撃つ

らに長藩側から正月六日の戦間を観察すれば、概略左の通りだ。

正月六日天寒く、風勢亦た愈よ烈し。早且薩兵と相應じて、八幡の敵軍を撃つ。我が長兵は、分つて二と爲し、第六中隊は木津川の上流〔從より約一里の處〕を渡りて進み、第一(奇兵隊)、第三(整武隊)、第五中隊(振武隊)は、淀川を亂りて河堤に上つた。幕軍は堤後の原野に、藁束、疊蓆の類を堆積し、胸壁を作つて之に據つた。我兵は散兵もて之に迫つた。

諸兵八幡町に入る

時に我が第八小隊(肅意隊)及び徳山兵二小隊、岩國兵一小隊亦た狐の渡より進み、八幡の南側を攻めた〔岩國の記録によれば、岩國の此の一小隊は即ち一番小隊にして、別に二番、小隊は山崎關門附近にて戦ふたと云ふ〕第六中隊(第二奇兵隊)は舟に棹して前岸に上つた。幕軍田間の地物に據るものあつたが、我兵は散兵を進めて之を撃退し、諸兵共に八幡町を攻めた。

幕軍敗走

幕軍は支へず、火を放つて走つた。薩兵は淀を渡り、科手に至つて、幕軍と相遭ひ、戦間時を移した。我兵の一隊八幡山道を越え、橋本臺場の後より、幕軍を襲はんと謀つた。幕兵の山中に在るもの、未だ之を覺らず、我兵直ちに迫つて之を襲うた。幕軍

八幡橋本悉く官軍に歸す

潰えて山下に奔つた。會々山崎駐屯の津藩藤堂氏の兵、官軍に應じ、遂に山崎砲臺より、河を隔て、幕軍橋本の砲臺の砲撃を開始した。此れより先き、藤堂氏の兵、幕府の爲め山崎關門を守つた。五日夜四條隆平卿山崎に至り、勅命を以て藤堂氏の陣に傳へ、傍觀の罪を責め、官軍救應の任に當らしめた〔參照 二三〕。藤堂氏の兵、遂に朝命に服し、官軍に應じた。徳山、岩國の兵亦機に乗じて、橋本を砲撃した。平六郎(毛利平六郎、徳山藩世子)公子、自ら出で、指揮した。幕軍左右敵を受けて遂に敗走し、八幡橋本悉く官軍の有に歸した。而して官軍は追撃し、葛葉村に至りて止つた。

林半七實歴談

尙ほ戦争の挿話として、左の一件を記載する。そは林半七(百餘女幸)の實歴談だ。彼所の淀川は木津川で、それを渡る際には、私の膝位いだ。八幡の土手へ上つたが、向うに八幡宮がある。暫時砲撃するな、先づ八幡宮の御許しを受けてくる。道は三十町もあらう。幕兵は皆な逃走したが、田の畔に稻叢がつんである。此れは迂濶には行けないと思つたが、田の中で、他には道がない。そこで探りを入れつつ行くと、先づ其の稻叢を銃撃したところ、此處に三人彼處に五人と隠れた

奴が皆なバラ／＼逃げ出した。その勢に乗じて八幡まで押し掛けた。八幡では二三發打つたが、皆な逃げて了うた。

八幡神輿
遷幸

ところが八幡様は御在でない。何處に御在かと訊いたら、昨日の戦争が激しかったから、大住村と云ふ二里程離れた所へ御遷し申し上げたとのことだ。それでは相済みぬ。官軍が敵を打つに、八幡様が御不在では困ると、留守番の坊様と談判したが、坊様が中々承知しない。仍て強ひて拒むなら、兵隊が居るから、我等が御輿を御連れ申すが、それでもよいかと嚇したところ、坊様慄ひ出し、暫時待つて呉れ、兎も角も相談すると申すから、待つてゐると、聽て御目に懸りたいと言ふ。應接すると、今度は御申聞の通りに致すで御座らうとのことにて、それは唯今御淨拂を致しますからと言ふので、御穢ひをして、私共が御供で、神輿は八幡へ御還りになつた。夜が明ける時分に、八幡様は還御になつた。

神輿歸還

此の如くして六日は八幡橋本から東軍を驅除した。

寂感御沙汰

昨夜以來及苦戰、賊徒速に退散之趣、御満足被思食候、尙又精々盡力可有之事、又た

昨夜已來及苦戰、打死手負等注進、忠勇寂感之御事に候。右之輩猶追て御沙汰之次第も有之候間、厚取扱可有之候事。
此れは薩藩にも、當然交付せられたるもの。而して何れも五日の夜、徳大寺卿よりの口達にて、後に書取にて交付せられた。

【二五】 東軍側より觀たる正月六日の戦争 (一)

東軍重大
問題

東軍側では正月六日は、官軍以上に重大の日であつた。それは單に戦争の勝敗に關する問題ばかりでなく、實は局面の一變轉であつた。からだ、具體的に云へば、其の主帥たる徳川慶喜が、大阪城を脱出して、東歸の航路に上つたからだ。然もこれは、姑らく措き、先づ戦争に就て語るであらう。

慶喜最初
の主戦論

會津戊辰戦史の語るところによれば、正月五日までの徳川慶喜は、尤も熱心なる主戦論者であつた。

正月五日大阪に於て、慶喜公、我が公(會津藩主松平容保、定敬朝臣(桑名藩主)以下幕

府の諸將及び我が藩相等を召して曰く、事已に此に至る。縦令千騎戦、殺して一騎と爲ると雖も、退くべからず。汝等宜しく奮發して力を盡すべし。若し此の地敗るゝとも關東あり、關東敗るゝとも水戸あり。決して中途に已まざるべしと。人々之を聞きて、感激せざるはなかりき。乃ち幕府の目付某に命じて戦地に行きて之を告げしむ。

とある。而して其の事に就ては、更らに左の如く語りてある。

士卒感激

正月六日、幕府の目付某、松平豊前守の陣營に至り、慶喜公昨日の命を傳ふ。衆皆感激し、士氣爲めに大に振ふ。

とある。惟うに慶喜其人の心中は何れにもせよ、兎も角も彼は口上にては、如上の硬語を發して、其の士氣を鼓舞したものであらう。されば正月六日早天、佐々木只三郎は見廻組を率ゐる。橋本驛東の路上を穿ちて、胸壁を築き、桑名藩の兵、小濱藩の兵と共に守つた。而して會津藩の町田隊、上田隊も亦た近傍に在り、生駒隊の兵は關門を守つた。午前八時、比官軍三方から橋本を襲はんとした。乃ち幕府四中隊と町田隊とを合し、又た分けて二隊となし、路の左右に備へた。

佐々木重傷

幕府大砲二門、町田隊も亦た砲二門を裝置し、整然として敵兵の來るを待つた。已にして橋本の東八幡と本道との岐點に兵士十餘人あり、淀及び八幡に向つて發銃す。一發毎に橋本に接近し來る。今泉傳之助之を望見して曰く、疑兵なりと、即ち小濱藩の兵をして、之を砲撃せしむ。官軍又た淀川を渡りて銃撃す。已にして官軍往々松林に隠れ、或は堤蔭に據り、連りに砲銃を發射す。佐々木只三郎兵を督し、町田隊、桑名兵、小濱兵、皆な奮つて大小砲を發して應戦した。佐々木は銃彈骸骨に中りて、重傷を負うた。

山崎關門の戦

此時に當り、山崎方面より百人許白旗を掲げ、小鼓を鳴らし、山崎關門に入る。會津の士見て走りて之を外島機兵衛に告げた。外島は之を軍事局に報じた。又た關門より一中隊餘、天王山方面に行くを見る。暫くして號笛の聲起るや、山崎關門より連りに橋本及び關門を銃撃し、次いで大砲を發射した。東軍亦た之に應じ、大小砲を發して戦ふた。幕兵、會津兵多く死傷した。八幡山連續の山上に在りたる桑名藩の兵能く大砲を發射し、彈丸山崎關門に至り爆裂した。橋本關門を守れる生駒隊全部、桑名兵及び小濱兵一小隊許、山崎に向つて砲撃した。

藤堂寢返りの影響

以上によりて見れば、當日の戦機に關し、如何に山崎關門に於ける藤堂兵の寢返りが、東軍を悩ましたるか、判知る。尙ほ此事に就て、會津戊辰戦史は、左の如く記してゐる。

津藩のき
たなき

後江戸にて、藤堂侯使を、我が藩邸に遣し、謝して曰く、前日山崎關門にて、弊藩の兵、貴軍に向て發砲せしは、官軍より迫られ、已むことを得ず砲口を仰がせ、責を塞ぐのみにて發せしなり。然るに貴藩兵の屯所に彈丸至ると聞く、實に分疏の詞なし。右につき在江戸の弊邸を貴藩兵焼き討するとの流言あり、幸に寛恕せられよと、藤堂侯又た上野法親王に請ひて内府に分疏し、又我公にも分疏を請ふ。故に法親王使僧を我邸に遣して説解し給ふ。此の頃の津藩の舉動こそ淺ましくもきたなけれ。

と、會津の立場から見れば、應さには是の如くなる可しだ。然も藤堂藩の立場からは、尙ほ申譯もあるであらう。

【二六】 東軍側より觀たる正月六日の戦争 (二)

官軍關門に迫る

會津藩上田八郎右衛門隊は、橋本を出で關門に入ったが、砲戦に不便の爲め、更らに又關門より二、三町下方の堤に據り、斜に山崎關門を砲撃した。堀半右衛門隊、組頭門奈治部等進みて淀川を渡り、山崎關門の側面より進撃せんとしたが、舟無くして渡るべからず、乃ち堤畔に伏して發射した。會々津藩の兵三十人許り川を下るを見て、之を銃殺した。橋本の諸軍利あらず、町田隊も亦た彈丸已に盡き、上田隊生駒隊と共に、退却の已む無きに至つた。既にして山崎關門の官軍、東軍の退くに乘じ、淀川を渡りて至り、橋本方面の官軍も亦た群がり進みて、關門の我が塞壘に入り、大聲凱歌を揚ぐ。此時橋本の兵火熾んにして、焰烟天に漲つた。

東軍枚方に退く

此日の戦に、官軍偽り新撰組の中に伍する者あつたが、後露はれて殺された。幕兵及び會津兵、桑名兵、小濱兵皆な枚方に退却した。午前八時頃、田中土佐は隊兵を率ゐて枚方に至る。幕兵及び大垣藩の兵、亦た枚方に在り、共に鳥羽の戦に將長を失ひしを以て、殘兵を此處に休養せしめてゐた。會津藩の林、白井兩隊の殘兵も亦た

此處に休養してゐた。正午會津藩の家老内藤介右衛門表用人山川大藏大阪より枚方に到着した。林、白井の殘兵を合し、山川其頭を命せらる。仍て赤扇を以て、隊の標識とした。

枚方軍議

午後四時比、總督松平豊前守及び諸將皆退却して枚方に來り、軍議した。會津藩の陣將田中土佐及び田中八郎兵衛、柴太一郎等亦た來會した。田中八郎兵衛曰く、退くこと此の如くならば、底止する所なけむ。宜しく此地を畫して、斷じて一步も退却す可からず。犯す者は皆な斬る可しと、竟に其議に決した。竹中丹後守、瀧川播磨守竝に會津藩の内藤介右衛門等と共に行き、防戦の地理を觀る。會々幕兵の守口に退く者陸續相接す。田中八郎兵衛、柴太一郎及び大野英馬、葛葉方面に至り斥候す。田中土佐は枚方近傍の山上に待つことを約す。田中八郎兵衛等斥候の途、町田隊の食事を做しつゝあるに遭ふ。更らに進みて偵察するに、官軍の來るべき形勢無し。乃ち返りて山上に至るに、田中隊は已に退きて在らず。三人失望して山を下れば、日已に晚れ、唯だ幕兵の僅に留るを見るのみだ。三人乃ち枚方を出で、行くこと二三町にして回望すれば、枚方已に火起る。蓋し幕兵の火を縱ちて退却したの

枚方出火

諸軍退却
命令

だ。三人行くこと一里許、町田隊佐太村の民家に入りて息ふに會す。衆曰く、疲勞甚だし、此に一夜を過さんと。三人曰く、諸兵皆な退く、予等獨り此に留るは最も危しと。町田隊已むを得ず、大砲を曳きて退いた。此れが退却の殿軍であつた。

竹中丹後守、瀧川播磨守及び會津藩の内藤介右衛門等守口に至る。若年寄永井玄蕃頭尙志來りて慶喜の命を傳へて曰く、深き思召あり、諸軍皆な大阪に退くべしと。此に於て諸軍漸次退いて大阪に至る。内藤介右衛門は、田中八郎兵衛、柴太一郎大野英馬等をして、之を會津藩の諸隊に傳へしめた。時に諸隊皆な疲れて睡る。之を聞いて曰く、飢え且つ疲れて一步も進む能はずと。大野乃ち近傍に在る小濱藩の陣に至り糧食を乞ふ。未だ至らざるに諸兵眼覺めて速に退かんと欲す。大野等曰く、假令敵此處に來り戦ひて死すとも、食はずして退く可からず。小濱藩に對して何とか云はんと、固く之を留む。暫くありて糧食至る。乃ち或は食し、或は携へて發す。諸兵同夜より七日の朝に至るまで、皆な大阪に還り著した。

此日橋本の戦利あらず、全軍守口に退くや、大阪城中大に騷擾す。且つ幕兵、菱原振はす。此に於て幕兵は會津藩の佐川官兵衛を歩兵頭竝雇に、望月新平、井口源吾等

大阪城中
騷擾

四五人を歩兵差圖役頭取並雇に、其他別選組士を、歩兵差圖役並雇に任じた。而して佐川は築城兵を率ゐて守口に至り、胸壁を築き防戦せんとしたが、形勢一變、遂ひに果さなかつた。

【二七】 中根雪江下阪の使命 (一)

慶喜及會桑兩藩主の態度

正月六日は、何よりも重大なる一の出来事があつた。それは徳川慶喜が、會津、桑名兩藩主及び關老等を従へ、大阪城を立ち退き、東歸の艦に上つたことだ。けれども其の以前、彼が如何なる態度もて、此の數日を経過したるかに就て、語る可き必要がある。

慶喜初志

如何に申譯けしても、彼が討薩檄を飛ばし、それを朝廷に捧ぐ可く特使を發し、其の兵士を驅つて京都打入を行はしめたる事に就ては、知らぬ存せぬとの申譯は立つ可き筋では無い。然も會桑側では、決して獨自一己の專斷でなく、全く彼の同意を得たばかりでなく、彼の命令の下に、此舉を企て此事を行ふたと云ひ、且つ信

慶喜變説病

じてゐた。而して彼が正月五日の夜までも、決死の覺悟もて、戦闘を激勵した次第は、既記の通りだ(參照 二五)。但だ此れは會津側の所説にして、徳川慶喜當人の心事は、果して如何、それを確むるは、決して容易の業では無い。何となれば、慶喜の心の中には、恐らくは多大の動搖あり、變化あり、所謂變説病(會津戊辰戦史の彼に與へたる稱號)が、尤も昂上したる際であつたからだ。但だ此際京都の軟派と、大阪との間を周旋したる、中根雪江の消息は、聊か者般の事情を側照するに足るものがある。

雪江大阪發向

扱も中根雪江は、正月三日京都から大阪に向け發向した。此日(正月三日)雪江は午後發邸、伏見舟行指支候由に付、竹田街道より陸行す。七條邊より辻々に、薩兵七八人、或は十餘人計つゝ、屯集せり。未刻午後二時前四つ塚に至るに、市橋下總守殿持之關門、菱垣結廻し、木戸を打ち、戎裝執銃之兵士守之。薩兵も將卒共に多勢整屯す。是より南行する處に、撤兵を布き伏兵を設け、殺氣隠々たり。

如何にも開戦數時間前の光景を描き出してゐる。

肥後世子
上京

此日肥後侯(藩主にあらざ、世子細川喜延——謙久——)である上京にて、此邊より以南、従兵絡繹として來れり。此處を過て數丁にして、薩兵三人あり、南より來つて行き違ひさまに、二大隊計あるべしと囁き合て通れり。是れ薩兵の斥候なりしを、後に思ひ當れり。

肥後藩世子は、藩主に代りて、御召に應じ、慶應三年十二月十八日熊本を發し、正月二日大阪を發し、入京の途に就いた。世子今朝大阪御發之處、華城之兵數千、太鼓を鳴らし喇叭を吹き、會桑の重士は、多く甲冑にて、拔身の劍槍を提げ、前後致充備候處、内府公近日朝廷より被爲召、多勢御引率は不穩候間、先供之撤兵隊等上京と返答に付、無頓著其隊を御通行有之とある通り、若し細川氏が大阪城下に滞在し、若しくは徳川慶喜を訪問したらんには、其の大勢に捲き込まれる可き危険は、十二分にあつたが、斯る道草を喰はず、一直線に上京の途に就いた爲め、幸にして免れた。然も彼は枚方に於ては、幕會桑の兵士と同宿し、翌三日は彼の東京に打混じて、幕會桑の兵も、相共に京都に打入る可く行進した。中根雪江の途中で出會したのは、則ち此れであつた。

鳥羽村阪
兵充満

是れより鳥羽村に入るに、村裡に阪兵之第一大隊の印ある歩兵整列して、勢揃への體なり。十四大隊の印も見受たり。此人數を押分け、通行す。阪兵に續きて、桑名、松山兩藩の兵隊、各甲冑し銃を先とし、槍を後として、村内に充満し、夫より以南阪兵の押來る事、引きも切らず、行路甚困難なり。淀小橋より八丁畷の堤上を経て伏見に赴く。阪兵又陸續として、蟻行之如く、兩氏の大兵、目を驚かし、心を寒からしむ。景況如斯、翻譯將に起らんとする勢現然にして、吾事の成り難からんを恐懼せり。

如何にも正月三日、開戦の當日、其の戦闘開始の數時間以前に、兩軍の間を縫ふて下阪しつゝある中根雪江も、その光景に對して、自から悲觀禁じ難きものあつたに相違あるまい。

【二八】 中根雪江下阪の使命 (二)

戦火既に
開く

扱も中根雪江は、正月三日調停の目的もて下阪しつゝあるが、淀以南の光景に就

ては、左の如く語りてゐる。

淀の城下は、阪兵北に向ふて去り、寂然として唯大垣藩の兵隊而已屯集せり。橋本驛にて日暮れ、驛南之臺場なる關門を過ぎ、數丁にして從者砲聲の聞ゆるを告るによつて一驚、回顧するに、男山を隔て、火光之天を衝くを見る。於是疊已に伏水に啓きたるを知り、大息一聲、心膽消阻して、進退爰に谷り、下阪無益に屬すといへども、宗家之御安否、且華城之形勢をも可相窺と、強忍氣を勵して前進し、戌刻(午後八時)比枚方驛に至る。此時未だ晩食せざれば、輿夫不堪勞、仍之舟を買はんとするに、此邊の民屋、惣而頃日阪兵の休憩所となせし故、酒食竭乏、土人も多く離散せり。辛くして一店を求め得て吃飯し、漸に阪兵の乗り棄てたる一船を買得て、亥刻(午後十時)過纜を解きたり。船中より回視するに、火光熾んにして、大阪に至る迄炎々たり。

正月三日の晩景から夜にかけてが、官軍、東軍決戦の第一次だ。それを中根雪江、淀川夜舟の上から回看したのだ。

大阪著

此曉(慶應四年——明治元年——正月四日)寅刻(午前四時)過、雪江大阪中島邸へ著船。

辛うじて一船を得

中根討薩
檄を見る

中根は此處にて始めて徳川慶喜の討薩の檄、即ち上奏文と、先般獻言之次第も有之處、豈料や松平修理太夫、要幼帝、不盡公議、矯勸慮、天下之亂階を醸し候件々不暇枚舉。依之別紙兩通之奏聞を遂げ、大義に依て、君側之惡を拂候に付、速に馳參軍列に可相加者なり。(別紙既掲に付略す)との達文を見た。

中根登城

一 今朝(正月四日)卯刻(午前六時)雪江登城、永井殿(安番頭)へ逢對申陳候は、昨日下阪之途中、伏見の火光を望見候ては、爭端已にひらけ、百端既往、惣而無益に屬し候得共、下阪之旨趣も一應は申上、乍恐御機嫌をも奉伺、且即今此地之御様子も拜承仕度と及、登城候段、演達之、朔日己來京都之事情申述候處。

以上は中根の永井に語りたるところ。

永井の依
頼

永井殿も大息擧眉のみにて、扱々遺憾千萬なりとの挨拶にて、被申聞候は、此間老侯(春嶽)御下阪之節、御請之御廉も有之、京地より之御左右次第、御上京の御積故、其節御人數多分被召連候も如何に付、御先供として二大隊、大久保主膳正引繼出立被命、且瀧川播磨守を以、別紙御奏聞書被差出、右は三日朝、條城(三條城)

へ著、御奏聞書御木紙は、戸田大和守へ相渡、御奏上に相成、寫一通づ、尾越へ御渡之分は、則雪江呼出、播州(備川具舉より相渡積に有之。然る處、同日細川右京大夫(世子喜延後に護久上著、二大隊之隨兵引連れ入洛に付、播州は夫に引續き罷越處、四つ塚關門にて、細川勢は異議なく通し候得共、播州は徳川氏之家來故、通し難きとの事にて、抑止に付、彼是及懸合候へ共、約る處、爭論に相成より外は無之勢に付、無是非引取、大久保へ申談じ、同人之兵隊に引副ひ、通行之積の所、大久保も指留に付、一二問答之内、早や彼方よりも打懸候故、此方よりも打懸、忽砲戰相始り候次第にて、誠に意外千萬之事共に相成、播磨も今以淀表に滯留罷在候間、雪江彼地へ罷越、御奏聞書竝御直書も有之候間、播磨より受取之、直に上京いたし、御奏聞書は戸田和州へ指出、吳候義は、相成間敷哉との頼談に付。

大阪側目
己陶酔

以上は永井から中根への依頼だ。元來討薩の上奏を捧げ、大兵をもて京都へ押入るに際し、それが無事に通過せらる可しとは、餘りにも虫の善き話である。然るにそれが意の如く行はれざればとて、永井がそれを、誠に意外千萬之事共とは、餘りに事情に迂遠の話である。要するに大阪側は、自己陶酔して、反對派に對して、全く

認識不足であつた。

【二九】 中根雪江下阪の使命 (三)

上奏文携
行辭絶

中根は正月四日の朝、永井玄番頭と大阪城中に會見し、永井より依頼せられたるに就て、左の如く返答した。

御申聞之趣、承知は致候得共、雪江輩御奏聞書持參と申も不體裁、且道路之障礙も難計、萬一徳川氏之密使杯と被怪候ては、此節柄主人迄も不都合相成候ては、迷惑仕候間、此儀は御免奉願度候。

例の討薩上奏文の携帶を、此の如く理つた。

溝口依頼
を勤む

愚按を申試み候へば、御用狀成共御仕立、肥後家老溝口孤雲罷出居候へば、此方へ御托し被成候ては、如何可有之哉、外藩之方嫌疑も有之間敷と申談候處、如何様其方も可然かと承引なり。

肥後の溝口も亦た調停組の牛耳を把る一人として、當時下阪中だ。

慶喜當惑

雪江又申候は、扱々様に事破れに相成候て之御策略は如何候哉と詰り候處、誠に不意に出でたる事故、更に術計無之、上様(徳川慶喜)も殊之外御當惑、隨而何れも無策、如何相成可然哉との模様ニ付、

當初より無準備

此れが全く大阪城中の真相であつたらう、彼等は物見遊山同様、何等の抵抗をも見ず、寧ろ内部より内應者の驩迎を受けつゝ、京都に大手を振りて打入るつもりであつた。然るにそれが鳥羽、伏見の役となり、而して其役が又た東軍の不利となつた。迷惑とも、當惑とも、當てが外れたとも、何とも、策も略も、分別も出なかつたのだ。彼等には當初から何等の周到なる準備も、計畫も無かつた。

永井尙奏聞を欲す

乍恐夫にては、御濟被成間敷、萬一御人數等、勢に乗じ、釐下を騒がし候様之事には相成申間敷歟と申候處、其處は念を入れ、毎々嚴敷申越候事故、決して其氣遣ひは有之間敷候へ共、々様相成候に付ても、猶更御奏聞之筋、行届き候筋有之間敷哉と、頗に垂問有之に付、

永井も今尙ほ憤々乎たるを免れない、今更ら征薩上奏文の行衛杯に苦慮する場合では無いのだ。

中根溝口等會談

今日は申合せ、外藩四家之家老共、登城致候筈に候得ば、猶又申合見可申と申達、退座せり。

此の如くして中根は溝口等と會談した。

一 即刻溝口孤雲(肥後藤堂歸雲)並、十時攝津(柳川登城)控所におゐて對談之處、孰れも昨夜中に著阪、少々づゝ遅速は有之候へ共、途中にて砲聲火光を見聞し、不可救之勢と相成候を知り、愕然失措而已ならず、於阪地昨夜之御布告を拜見し(参照 二八)、再度吃驚、駟馬難追次第と相成、挽回之道絶果たるは、四人同嘆之至にて、猶此上にも、御名義之可相立條理可有之哉と、蹙額議論致試候へ共、更に開明之良策無之、當惑罷在內、三老之面々へ、追追閣老初諸有司對談は有之候得共、滿城拂地之無策にて、唯御奏聞之貫通、或は前途之意見垂問之外、一之定論も無之に付、三老も愈以慨嘆を極め、即今と相成候ては、惣而一點之見込も無之趣申達、申刻(午後四時)頃より遂々に退去せり、孤雪へは、御奏聞書傳達之儀を頼談有之候へ共、御家門之方可然趣申立、不及御請由。

此の如く中根雪江は所謂る奏聞書の傳達を、溝口孤雲に譲り、溝口は又た之を中

根に譲り、遂に奏開書は途中に惑ふ姿となつたが、漸くそれは中根が受取る事となつたのは、次に述べるところにて分明だ。

為城拂地の無策

要するに大阪城中の光景は、滿城拂地の無策の一句にて之を盡してゐる。彼等は何等の思慮も無く、分別もなく、只だ血氣に逸りて京都打入りを試みたところ、案に相違したる障礙に遭遇し、今更ら途方に暮れつゝあるのだ。

【三〇】 中根雪江下阪の使命 (四)

中根等歸途に上る

斯くて中根雪江を首とし、肥後溝口孤雲、津藤堂歸雲、柳河十時攝津なども、何れも歸京の評議をした。

一 如形兵端己に開之上は、四人歸路之通塞難計に付、孤雲は今朝伏見邊之形勢爲取調、家來指遣したる故、歸報之次第により、歸京之見込を立候積之由、歸雲も同様、前路見分之者指出候由に候得共、雪江は十里外之消息坐待も焦思之至に付、いづれ之道にも、支度次第發船、淀邊迄廻り、其上にて進止可相決と、其段永

井殿へ及申談候處、左候は、是非共御奏開狀竝御直書共持參致吳候様との事にて、酒井雅樂頭殿、板倉伊賀守殿より、戸田大和守殿に之御用狀に仕立被相渡に付、受取之退出せしは申半刻(午後五時)頃なり、此節淀川船留にて、通船無之に付、御目付榎本殿指圖にて、四藩之分は、舟會所より印鑑を出されたり、雪江は昨夜留置たる船にて、酉半刻(午後七時)頃發船せしかど、乘棄たる大船なる故、船脚疾からず、五日曉寅半刻(午前五時)比、漸くにして枚方に至れり。

戰鬪開始後、潮江の困難、以て想ふ可しだ。

土藩の行動

一 雪江退出之節、御城中(大阪城中)の口に而、土老深尾鼎に逢ひ、引入對談するに、印鑑を持たざりし故、御門所に而、手間取及延刻たる由、城中之情狀物語、共に大息して空敷退出せり。

如何に土藩が此際行動したるか、此の一事に徴しても判知る。

八幡町邊の状況

一 今朝六つ時前、雪江枚方發船、橋本砲臺之邊に至るに、朝霧之内に、稀に小砲聲を遙聞す。砲臺に旗を建、人數を配り、形勢異常なり。怪みながら進船、橋本を過ぎ、科手村に至るに、砲聲大小交も聞へて、霧晴れ、戰の漸く始りたるを覺ゆ。堤上

を奔走往返之兵士あり、馬を馳せて歸り來る斥候あり、前途の砲聲漸く盛んなれば、舟子恐れ舟を進る事を肯んせず、依之村端に上陸し、兵士に問ふて、道を八幡山の麓に取り、八幡町を過て、數丁にして、會藩之大野英馬が、今一人と馬を並べて出陣せるに逢ふ、彼云、淀より以北砲戰尤盛んにして、伏見堤上亦爾り、勝敗未決、唯願くは一刻も早く歸京して、盡力せん、事を庶幾する由を言棄て、過行ぎたり。

勝敗未決と云ふ通り、五日は全く激戰であつた。

此頃に而は、淀川以北之大小砲戰猛烈を極め、轟然地を動かし、烟天に漲る。八幡山に會兵砲臺を築きて屯集せり。放生川邊には、宮津藩守衛之關門あり、是を過て、堤上を行く、東軍之二大隊に逢ふ。未刻(午後二時)過ぎ、木津川を渡り、新田村に至る。途中淀邊之放火を望む。此頃に至つて、砲聲漸く希なり。未半刻(午後三時)頃、新田村之民屋を憑み、午飯を喫し、夫より宇治川を渡り、小栗栖よト栗栖野を経て、汁谷越より清水へ出、暮時過著邸せり。

此の如くして中根雪江は、正月五日の夜、京都越前邸に歸著した。

淀川以北
砲戰猛烈

雪江歸邸
復命

直に御前(春謀の坐前)へ出、阪地之事情申上、御直書指上之、御拜披之處、左の如し。奏聞之次第は有之候へども、鞞鼓之下におゐて、干戈を動かさざる様、兼而兵隊之者どもへ、申諭置候得共、彼より已に砲發之上は、此之上形勢心配致候間、吳々も鳳麓守護被致候義、厚く御頼申上候、已上。

御 諱 (慶喜)

尾 州、藝 州
越 前、宇 和 島 殿
土 州、細 川

正月四日八字(時)認

御老中より戸田殿へ之御封物は、鹿之介(モモ)を以、戸田殿へ指出處、御同人被申候は、御奏聞狀は、瀧川播磨州大垣之藩士に托し、今朝相達せし故、封之儘直に朝廷へ被指上由、仍之雪江持參せしは、重複に相成に付、戸田殿手元に被預置段被申聞たり。

此の如く徳川慶喜の討薩の奏聞書は、瀧川播磨守から之を大垣藩士に托し、正月

奏聞書既
に提出済

五日朝、漸く到達するを得たのだ。固より後の祭にて、今更何の詮もなき事となつた。而して中根雪江の使命も、折角苦心して京阪の間を上下したが、殆んど何等手の著け様も無く、空しく歸京した。

第六章 徳川慶喜の大阪城退去

【三一】 何故に徳川慶喜は大阪城を立退きたる乎

徳川慶喜
本意に反す

徳川慶喜が、慶應三年十二月十二日、京都二條城を立退き、大阪に去りたるは、二條城では、部下の鎮撫が出来ぬからとの理由であつた。然らば彼は又た何故に慶應四年——明治元年——正月六日の夜、大阪城を立退きたる乎。それに就ては先づ慶喜側をして語らしめよ。

公は初より戦意ましまさねば、將士北進の後も、曾て大阪城を出で給はず。わけて此數日感冒の心地なりければ、寢衣のまゝにて、多くは蔭中にまします。開戦の報を聞くに及びては、萬事休すと決心し、ことさら内におみ籠り居給へり。公後に當時を回顧して、此際の處置は、余自らも宜しきを得たりとは思はざれども、城中の有様如何にしてもせんすべなく、遂に形の如き始末となりたるは、終生の遺憾なりと仰せられき。

三一 何故に徳川慶喜は大阪城を立退きたる乎

徳川慶喜公傳には此の如く語りてゐる。當初から戰意なくして戦争せしめたは、如何にも聞捨てならぬ言葉であるが、之を平らたく解釋すれば、部下に強迫せられ、威嚇せられ、壓迫せられ、心ならずも、それを許容したと云ふ意味であらう。

鳳麓守護
依頼

四日戦始まれりと聞き給ひ、中根雪江の歸京に託して、直書を尾張大納言松平大藏大輔、松平容堂、松平紀伊守、伊達伊豫守、細川右京大夫に寄せて、奏聞の次第はあれども、葦穀の下に於て、干戈を動かさざるやう、豫て兵隊どもへ申諭し置きしに、彼より既に發砲せしからは、此後の形勢心配なり、くれぐれも鳳麓を守護せらるゝやう、厚く御頼み申すといへり。

此れは既記の通り、事實である〔參照 三〇〕。

悔恨の念
に堪へず

やがて錦旗の出でたるを聞くに及びては、益驚かせ給ひ、あはれ朝廷に對して乃向ふべき意思は露ばかりも持たざりしに、誤りて賊名を負ふに至りしこそ悲しけれ、最初たとひ家臣の乃に斃るゝとも、命の限り會桑を諭して歸國せしめば、事此に至るまじきを、吾が命令を用ゐざるが腹立たしさに、如何やうとも勝手にせよといひ放ちしこそ一期の不覺なれと、悔恨の念に堪へず、いたく憂

鬱し給ふ。

無責任の
申譯

此れは主將としては、如何にも無責任の申譯けた。此れは公廷に於ては、決して通る可き筋のものではない。會桑其他主戦派の旗下等は、到底斯る申譯に承服す可き理由は見出さぬであらう。

若し慶喜
勝たば

假りに東軍の捷報が頻りに聞え、東軍が豫想通りに京都に打入り、薩長の軍勢を一掃し、京都を占領したらん曉には、此れも心外千萬であると徳川慶喜は悔恨す可かりし乎、否乎、將た彼は憂鬱に沈む可かりし乎、否乎、而して何故に會桑をして、蚤くに歸國せしめざりしかと、述懐す可かりし乎、否乎、恐らくは然らざるべし、否、寧ろ其時は彼は平氣で二條城に復歸し、松平春嶽や、山内容堂や、伊達宗城等を首め、後藤象二郎、辻將曹、其他の徒と共に、彼の注文通りの施政の開始に乗り出したであらう、されば如上の申譯は、畢竟敗軍後の昔日譚として受取る可きものであらう、但だ主將としては、彼が全責任者であるが、若し其の情狀を酌量すれば、彼は、従犯にして、決して主犯ではなかつた、彼の申譯は先づ此の主犯でないといふ一點に於て成り立つ。

【三三】 如何にして徳川慶喜は大阪城を立退きたる乎

東歸思立の日

されば彼は何日頃から、大阪城退却を思ひ立ちたる乎。

六日(正月)に至り、寧ろ東歸して恭順せんものをも思案し給ひけれど、恭順の事をば深く御心に秘し給ひ、板倉伊賀守、永井玄蕃頭を召して、事敗れぬる上は、東歸して更に講すべき手段もあらんと仰せらるゝに、二人は東歸再舉の事と信じて、容易に賛成しまゐらせたり。乃ち玄蕃頭を戦地に出張せしめて、諸兵を大阪に退かしむ。(參照 二五、二六)

堅忍持久の心なし

徳川慶喜は畢竟翻々たる一才子である。彼は聰明才敏なれども、堅忍持久は、彼の長所では無かつた。されば敗軍の報を聞いて、大阪城を堅守する杯の思想は、到底彼に湧く可き筈は無かつた。彼が當初から果して恭順を覺悟したる乎、それも所謂事後譚であつた乎。其邊は何れとも分明せぬが、彼が徹底的に抗戦するの意志無かつたことは、分明と云はねばならぬ。

密々東歸準備

大阪町奉行松平大隅守(信悠)には、乗船を用意し、密々御東歸の準備をなさしむ。折しも會藩士神保修理(長輝)戦況を視察し歸りて、松平肥後守に見えて、速に兵を收めて東歸するに如かずと説きたれども、同藩の壯士等は聽入るるさまもなし。修理は更に公に謁して勸め奉るに、公には既に決心し給へる事なれば、直に之を嘉し給へり。

渡りに船

此れはこの通りであらう。慶喜ほどの漢であれば、必らずしも神保修理の入知慧を諒つまでもなく、自から東歸を思ひ立つたのであらう。而して神保の入説を渡りに船として、之を嘉したのであらう。

出戰勳士の諸説

公は東歸の志既に決し給へるも、臣屬の之を妨げんことを憂ひ給ひ、故らに諸有司隊長等を大廣間に召し集めて、此上は如何にすべきかと尋ね給へるに、孰れも血氣に逸りて、再舉を熱望する輩のみなれば、異口同音に、一刻も早く御出馬遊ばさるべし。然らば士氣頓に振ひ、薩長を討ち平げんこと何事か候ふべきと申して、ひたすらに公の出馬を迫りければ、よし是より直に出馬せん、皆々用意せよと宣ふにぞ、衆大に喜び、勇みて持場へに退きたり。

徳川慶喜も、甘く部下を瞞過した、それにしても部下の面々こそ、笑止千萬であつた。

密に出城

公は此隙に乘じ、元守護職松平肥後守、元所司代松平越中守、老中酒井雅樂頭板倉伊賀守、大目付戸川伊豆守（忠愛）、外國總奉行山口駿河守（直毅）、目付榎本對馬守（道章）、醫師戸塚文海、外國奉行支配組頭高島五郎等を従へて、六日の夜亥の刻（午後十時頃）ばかりに、潜に後門より出で給ふ。衛兵の見咎めて誰何しけるに、
「御小性の交替なり」と詐りたれば、深くも怪しまざりき。

此の如くして徳川慶喜一行は、大阪城を脱出した。

先づ米艦に乗る

やがて八軒屋より舟に召されて、天保山に著せらる。天保山沖には、徳川家の軍艦開陽、富士山、蟻龍、及翔鶴（翔鶴は汽船なり）の四隻碇泊せり（原註、淺野氏船——もと美作守——の談話によれば、美作守は順助丸に乗りて、六日天保山沖に著すとあり。然らば此時間所）ありしは、總て五隻なるべし。公は開陽艦に乗り組み給ふべき豫定なりしが、御供の人々は、其艦を見知らざるが上に、折からの闇夜にて、艦の所在さへ定かならず、折しも英、米、佛の軍艦も、天保山沖にありしかば、先づ最も岸近くに淀泊せ

る米艦に赴かせ給ふ。同艦は一行を艦長室に請じまゐらせ、酒肴などとりくにもてなし奉りぬ。

以上は徳川慶喜が大阪城を退去したりと云はんよりも、寧ろ脱出したる行徑の大略である。如何に其の倉皇であつたかは、豫じめ搭乘す可き軍艦とも打合せなく、その爲めに軍艦からの出迎をも疎たず、自から乗り付けんと欲して、其の目的を達せず、先づ米艦に乗り付けたのであつた。

【三三】 徳川總勢の退去

開陽艦に轉乘

扱も正月七日の曉となりて、始めて開陽艦の所在が明白となつた。仍りて山口駿河守は、米艦の端舟を漕ぎて之に赴いたが、船將榎本和泉守（武揚）も、軍艦奉行並矢田堀讃岐守（逸）も、折ふし上陸して不在だ。山口は副長澤太郎左衛門に告げて曰く、高貴の御方、米艦に在す。只今當艦に轉乘し給ふにより、足下宜しく自から御出迎へ申上げよと。太郎左衛門乃ち海兵を率ゐ米艦に漕ぎ寄せたるに、思ひきや高貴

の方とは、前將軍慶喜公ならんとは、澤は大に驚き、我を忘れて、左右の人々に其故を訊ぬるに、榎本對馬守は之を遮りて、委細は轉乘の後にせられよ。兎も角も速かに御案内あるべしと促した。仍りて大形の端舟に慶喜を載せ、會桑二藩主之に陪乘し、澤自身も亦た附添うた。他の一隻には、老中以下の諸有司を乗せて、共に開陽艦に導き、艦長室を以て、慶喜の室に充てた。

英艦の偵察

折しも御側御用取次室賀伊豫守も亦た大阪より馳せ加はつた。此時英國軍艦二隻開陽艦の周囲を乗廻して、艦内を偵察し、頗る不穩の狀あつた。澤副長はこれ高貴の方のおはすらしきを疑ひてのことであらう、暫らく潜ませ給へと申すにより、慶喜は艦室に閉ぢ籠つてゐたが、其後は何の異狀も無かつた。

開陽艦東向

斯くて開陽艦は、八日の夜錨を抜いて東に向ふた。

大阪城中の役

大阪の人々は、七日に至りて、慶喜の在らざるを聞き、相顧みて茫然であつた。老中松平豊前守、若年寄永井玄蕃頭、平山圖書頭、大目付淺野美作守、目付妻木多宮(頼矩)等は、城中に残り留つたが、當日令して、詰番所警衛の諸大名には、人數を撤して在所に還らしめ、旗本の將士をも、江戸に歸らしめたが、今は誰を統率者と仰がん様

もなく、何れも禽奔獸走の體たらくであつた。而して松平豊前守、永井玄蕃頭、平山圖書頭、淺野美作守等も亦た此日もて東歸の途に就き、矢田堀讃岐守、榎本和泉守等は、十二日富士山以下の艦隊を率ゐて、江戸に航したから、京阪の地には、徳川氏海陸軍の隻影をも留めなかつた。

海上の小戦

抑も陸地の戦争は、鳥羽、伏見に始つたが、然も海上に於ては、その以上に小戦があつた。當時幕艦は蟠龍艦を首として七隻、兵庫に碇泊し、大阪方面と瀬戸内海方面とに分れ、出動警戒してゐた。正月二日薩の平運丸が大阪川口を出港するや、幕艦は之を追跡して發砲した。辛くして平運丸は兵庫に入港した。此に於て春日の先任士官和田彦兵衛、平運丸の士官有川藤助の二名談判員として、開陽丸に赴き、之を詰つたところ、艦長榎本和泉守は曰く、軍艦が商船に停止を命ずるに空放三發す。若し停らざれば實弾もて砲撃し、之を撃沈するも妨げずと、而して何故に當初より實弾もてしたる乎と詰れば、榎本は傲然として曰く、最早貴藩とは江戸に開戦した。何時にても十文字の船旗を認めれば、砲撃す可しと、正月四日春日艦は翔鳳、平運の二運送船を率ゐて、歸航せんとするや、幕艦開陽に追躡せらる。而してや

春日開陽接戦

慶喜東歸
届出

がて開戦となつた。然も遠距離の砲戦にて、互ひに大事には至らなかつた。而して春日艦は土佐沖を経て、一月六日鹿兒島に著した。但だ翔鳳丸は田岐浦にて擱坐自焼し、平運丸は機關に故障を生じ、正月二十日鹿兒島に歸著した。當時春日、開陽の接戦には、春日の速力は十六ノツトにして、開陽は十二ノツトに過ぎなかつた爲め、如何に追躡しても、到底追及する能はなかつた。扱も徳川慶喜は大阪城中を脱出するに際しては、

此度上京先供途中偶然之行違より、近畿騒然に及候段、不得已場合に、素奉對天朝、他心無之段は、兼て御諒知之通に候。併聊たり共奉惱宸襟候段、恐入候儀に付、浪華城は尾張大納言、松平大藏大輔へ相托し、謹て東退仕候已上。

正月 月

慶 喜

而して副書として曰く、

此度上京先供、途中偶然之行違より、前文と同様、謹て浪華城、各へ相預、退去歸東に及候間、右之趣可然御執成、御奏聞有之度頼存候。

正月 七日

慶 喜

尾張大納言殿

松平大藏大輔殿

此れが徳川慶喜の東歸の捨臺詞であつた。而して之を一讀すれば、彼が胸中に戰意なきは分明だ。

【三四】 徳川慶喜大阪城脱出の後日譚 (一)

神保修理
の勳説

尙ほ徳川慶喜自身が、四十餘年後に語る所によれば、大阪城を脱出及び其後の模様は、左の通りだ。

神保修理(會津藩主)には逢ひたり。其の言ふ所は、事此に至りては、もはやせんかたなし。速に御東歸ありて、徐に善後の計を運らさるべしとなり。永井玄蕃頭(尙志若年寄)此議を然りとす。予は初下阪の時、たとひ刺し殺さるゝまでも、會桑二藩を諭して各其國に歸らしめ、然る後再び上京して、今は一己の平大名に過ぎざれば、願はくは前々通り御召し使ひ下さるべし。朝廷の御爲には粉骨碎身仕

るべしと懇願せばよかりしに、事此に出でず、會桑二藩をも諭し得ずして、遂に如何やうとも勝手にせよといひ放ちしが、一期の失策なり、斯く後悔したる際に、神保の建言を聴きたれば、寧ろ其説を利用して江戸に歸り、堅固に恭順謹慎せんと、決心せしかど、そは心に秘めて人には語らじ。

此れは間違なき告白であらう。何と云ふも京都打入は、徳川慶喜に取りて、取り返しのつかぬ大失策であり、大失敗であつた。

板倉永井
東歸賛成

試に諸有司、諸隊長などを大廣間に召し集めて、此上は如何にすべきと尋ねたるに、孰も血氣に逸れる輩のみなれば、皆異口同音に、少しも早く御出馬遊ばさるべしといふのみなれば、よきほどにあしらひ置き、板倉（勝靜）老忠、永井を別室に招きて、恭順の眞意は漏らさず、唯東歸の事のみを告げたるに、兩人は、ともかくも一旦御東歸の方然るべからんといへるにより、愈それと決心し、再び大廣間に出で、形勢を観るに、依然として予が出馬を迫ること頻なりしかば、予はさらば是より打ち立つべし、皆々其用意すべしと命じたるに、一同踊躍して、持場へに退きたり。

諸士を出
し抜く

憐れむ可し、城中の士空しく慶喜に翻弄し去られんとは、然も慶喜其人も欺かんが爲めに欺きたるではなく、力及ばずして、此の小策を用ひたのだ、されば慶喜も亦た憐れむ可く、否な寧ろ尤も憐れむ可きものだ。

城門脱出

予は其隙に伊賀辰倉（勝靜）、肥後松平（定篤）、越中松平（定篤）、等纒に四五人を隨へて、潜に大阪城の後門より脱け出でたり。城門にては衛兵の咎むることもやと、いたく氣遣ひたれど、御小性なりと詐りたるに、欺かれて別に恠しみもせざりしは、誠に僥倖なり。

會桑藩士
の心中

如何にもその通りだ、會桑二藩士等も、全く其の藩主に置いてけぼりを喰はされたのだ、兩藩士の心中想ふ可しだ、されど彼等は、我等の藩主をして斯る事を做さしめたのは、偏へに前將軍の仕業として、彼等は其の心中には、兩藩主よりも、兩藩主を餘儀なく此舉に出でしめたる、前將軍其人に咎を歸したであらうと察せらるゝ。

乘艦の部
末

さて天保山に到りて、船を尋ねしに、嚮に開陽丸、此處に碇泊せしかど、今は薩艦を追跡して在らずといふ、然らば繫泊せる米艦に依頼せんと思ひたれど、餘り

に卒爾なれば、先づ佛國公使に紹介せしむるこそよけれとて、使（原註、山口駿河守直毅、泉處と號す）なりしと覺ゆれど確かならずをロセスの許に遣はしたるに、ロセスは快く承諾して、紹介状を與へたり。一行は之を携へて米艦に赴きたるに、米艦には佛國公使の紹介ありし爲めにや、極めて優遇し、酒肴を出してもてなしけるが、とかくする中、開陽丸歸港したるをもて、更に同艦に轉乘したり。

紹介か偶然か 以上の顛末は、既記の通りだ（參照 三三三三）。然も當時倉皇の際、果して佛國公使の紹介状を得る餘裕ありし乎、否乎、それは暗夜風波高き際なれば、寧ろ陸上に接近せる米艦に偶然漕ぎつけたのではなかつた乎、慶喜公傳には、その通りに記してゐるが、恐らくはそれが事實であらう。

【三五】 徳川慶喜大阪城脱出の後日譚 (二)

東歸巻順言明

徳川慶喜一行の幕府軍艦開陽丸に乗り移るや、

此時英國軍艦來りて、頗りに開陽丸の周圍を乗り廻し、艦内の狀を偵察するもの

の如し、澤太郎左衛門（貞説、開陽丸の副長）之を見て、英艦は高貴の人の在すらしきを疑ひて、之を探るに相違なし、暫く隠れ居給ふべしと申すにより、暫く船室に閉ぢ籠り居りしに、英艦は程なく舵を轉じて、いづれにか走り行きたり、それより開陽丸にて、江戸に歸りたるが、予は艦中にて、（原註、紀州沖邊にての事と覺ゆ）伊賀守に向ひ、嚮に會桑二藩並に、旗下など、如何に騒ぎ立つるとも、泰然として動かす、一步も關下を去るべからざりしを、大勢に抗するを得ずして、汝等の爲さんと欲する所を爲せと放任して、遂に鳥羽、伏見の變を惹き起したるは、ぐれぐれも失策なれば、江戸に歸著の上は、飽くまで恭順謹慎して、朝裁を待つ心の決心なれば、汝等も其心得にてあるべしと語り聞かせたるに、伊賀守は、仰せさることながら、關東役人の見込の程をも承らざれば、未だ遽に御請もなし難しと論ひしかど、予は斷然として、一向恭順を主張したりき。

慶喜心境の變化 此れは慶喜其人の本音であらう。大阪城中に於ては、彼の心境には、恐らくは幾多の變化、幾多の動搖ありしならんも、正月三日より五日に至る敗戦の後に於ては、彼は官軍に抵抗するの意志は、全然抛却したるものと察せらる。

途中の風波

由良に寄港せんとせしは、當時は非常の暴風にて、常の航路を取ることは能はず。蒸汽を止め、風に任せて、五十里ばかりも沖合に流されたる程なれば、已むを得ず、一時避難せんとせしものなるが、やがて風波も穩になりしにより、再び針路を定めて、江戸に向ひしにて、決して大阪に引き返さんなど、いふ議論のありし爲に、あらず。浦賀に寄港せしことは、更に記憶せず。されば、山口駿河守を横濱に遣はしたりなどといふことは、猶更知らざる所なり。

以上は徳川慶喜其人が、四十餘年の後日譚なれば、果して四十年前の實際と相違なき乎、否乎を詳にせざるも、大體に於て、先づ其通りと見て、差支あるまい。尙ほ又た當時若年寄並の淺野美作守の語る所によれば、

慶喜戦闘心の有無

君側の惡を拂ふと云奏開狀の如きも、慶喜公には、御同意なくて、既に墨を以て、一度は消し給ひしが、後には寧ろ慶喜公を刺し奉りても、徳川の御家には代へ難しと言ふが如き暴論ありて、閣老初これを制御する能はず。又た此頃佛公使（ロッシニ）には、在阪にて、川勝近江守（廣道、外國奉行）と頻りに引合、自然争論を開くに至ては、佛國は幕を佐くべしと云語ありしとて、尤も得意に戦論を主張し、

寧ろ討薩を欲す

遂に伏見の一戦を開くに至りたる也。（晚香堂雜纂）

討薩上表提出の際までは、淺野は江戸にありて、彼が大阪に到着したのは、正月六日であれば、慶喜其人が其の上表の討薩の一項を、墨にて抹殺したなど、云ふことは、傳聞を録したるものにて、彼が親しく實見したるものではないから、何とも保證の限りでない。何れにもせよ、當時の大阪城中の氣分には、慶喜其人と雖も、恐らくは一時は捲き込まれたかも知れない。特に薩の態度に就ては、慶喜は前年來頗る不快を感じつゝ、あつたから、討薩上奏文の主旨は、寧ろ彼の意中其儘を描き出したるものと云ふも、不可なき程であつたから、恐らくはそれを抹殺したなどのことは無かつたであらう。況んやそれを一切知らぬ存せぬ筈はないのだ。

第七章 慶喜退去當時の状況

【三六】 浅野美作守の後日譚 (一)

浅野上阪の命

尙ほ當時江戸より大阪に到着したる浅野美作守（氏直）の談話は、能くその事情を曲盡してゐる。

稻葉閣老の申渡

慶應の末、余は若年寄にて、陸軍奉行を兼務せしが、卯年（慶應三年）の十二月二十七日、御用有之、大阪出張を命せられたり。是は閣老稻葉美濃守（正邦）の申渡にて、其要領といふは、先般大政の返上より引續きて、將軍職御辭任も聞食届けられたるからは、即ち王政維新といひて、萬機の政令は、天下の公議に従はせらるる儀なれば、豫め之に應ずるの準備を要するは勿論にて、其中にも現今の世態萬國交通の道も漸く將に開けんとする場合なれば、海陸軍備の擴張は、最も急務中の急務なりとの御趣意にて、既に海軍は英國の制にならひ、陸軍は佛國の式に據らんとて、夫々教師も御召聘になり居れば、兼ての計畫に従ひて、先づ大

計薩に關

阪に於て、地所を選定して、日本全國の海陸軍大傳習所を設置すべしとの御考案なり。

此れは勿論、斯る計企ありたるに相違なし、けれども浅野等が急遽倉皇、江戸から上方へ出掛くるに就ては、別に其の必須の事情あつたに相違なく、それは恐らくは徳川慶喜討薩に干係しての事であつたと察せらるゝ理由無きにしもあらず。だ所謂る君側の逆徒一掃に就て、斯く取り計らうたるものであらう。それは板倉閣老等が、大阪から佛國陸軍教師等を、速かに上阪せしむべしとの達書に徴しても、知ることが出来る。

上阪人々

就ては差向き陸軍總裁たる縫殿頭松平乘謨、老中格の出張すべき筈なれども、方今病中なればとて、余（浅野美作守）に代理を命せられしなり。尤も急速を要すれば、支度取合せ次第出立せよとの事にて、明れば慶應の四年（明治元年）正月二日を以て、順動丸といふ汽船に乗り込みて出帆したるが、同船にて上阪したる人は、大名にて九鬼長門守（隆義、攝津三田藩主）旗下にて山口駿河守（外國總奉行並直齋、糟屋筑後守（外國奉行、義明）等にて、其他の役々は、今其名を遺忘したり。余の隨

行に屬せる人々は、歩兵奉行向井豊前守、同差圖役頭取兼通辯官長田銈太郎、佛國陸軍カピテイン、エタマジョール、シヤノワンを始として歩騎砲兵の教官長一名宛にてありき。此等の外國士官は、皆此以前より幕府にて雇聘したる教官なれば、傳習所設置に付、實地の顧問に充てたるなり。

兵權放棄の意なし

之を見ても幕府が陸海の兵權を、決して容易に手離ししない覺悟が察せらるゝ、大政を返上しても、將軍職を辭退しても、其の名を避けて、其實を存せんとは、幕府君臣一同の心掛けと見て、差支なし。されば武力解決派が、強て硬論を主張したるも、彼等としては、亦た自から其の見解ありと云はねばならぬ。

戦報を聞く

正月六日に至り、天保山沖へ著船したり。此時天保山出役の軍艦役根津勢吉訪問し來り告げて曰く、諸君は未だ御承知有る間敷が、當地には由々敷大珍事こそ起りたれ。其は正月三日以來、伏見、鳥羽の戦争にて、詳報には接せねど、聞く處によれば、味方御勝利の趣なりとて、欣々として喜色面に溢れたり。人々相顧みて事の意外に驚きたれど、固より其の理由を知るに由なければ、余は速に上陸して實況を聞かんと欲し、先づ同行のシヤノワン始め、外國士官の一行を山口

駿州に引渡し、堅く彼等の上陸を禁ずることを談合し置、さて向井、長田の二人を伴ひて短艇を卸し、に、折節風威烈しく、怒濤は山の如く、水夫勉めざるに非ざれども、短艇は同じ處に上下するのみにて、左まで遠からざる距離も、容易に達することを得ず。辛うじて正午の頃、著岸しければ、此處にて午飯を喫し、大阪城へと急ぎたり。

【三七】 淺野美作守の後日譚 (二)

板倉の戦敗報告

淺野美作守の語るところは、以下につゞく。

途中にて大阪町奉行支配の者なりとて、乗馬を牽きて、出迎ひ來るに出會したり。曰く伊賀殿（老中板倉勝重）の命なり、一刻も早く登城せられよ。且戦争は恐ながら御敗北なりとの注進なれば、扱はとて馬に跨り、驛地に大阪城へ乗付、直ちに御用部屋に行きて視れば、閣老も參政も只今御前へ出で、一人も居らずといふにぞ、引返して陸軍局に到りて、大久保主膳正（陸軍奉行忠愨）に面會し、近況の

大要を聞くことを得しが、同人は戦地にて股に銃丸を受け、なかなか苦痛の様子にて、詳細の事は聞得ざりしも、閣老戻りたりとの報あるに因り、急ぎて御用部屋に詣れば、板倉閣老は慍然として、偕て美作殿時態は救ふ可らざるの難局に陥りて、聞がるゝ如き大變動は起りたり。此に至りては、最早議論も術計も盡果たり。

以下は板倉閣老の語るところ。

城中硬軟
兩派

抑も頃日城中の議論は、硬軟二派に分れ、閣老にては豊前殿（上總大多喜二萬石、松平——大河内正實）、參政にては竹中丹後（重岡若年寄並、陸軍奉行）塚原但馬（昌義、若年寄並、外國惣奉行）、平山圖書（敬忠、若年寄並、外國惣奉行）等を始として、陸軍部内は勿論、會津、桑名の藩士は、異口同音に硬説を唱へ、中にも近藤勇の配下杯に至りては、劇烈も亦甚しく、其極終に、寧ろ君上、徳川慶喜を斥きを退け奉りても、徳川氏の家名に對し、彼れ薩長の制御に屈すべけんやといふに至り、戦論の熾なること、恰も狂瀾怒濤の如き勢ひなれば、君上の御趣意を膺けて、始終の恭順を貫かんとするものは、自分を始めとして、雅樂殿（酒井忠悳、老中）是に次ぎ、參政にては、永井

板倉申譯

主水（尙志、此時支審頭と稱す）等、其他二三子の少數にて、なか／＼に彼が暴威には抵抗し得られず、終に今日の極難に陥りたり。事實正さに此の通りなる可く、事情正さに此の通りなるべし。返す／＼も遺憾千萬ながら、畢竟は自分が不行届より、統御の大任を誤りし結果にて、此責は他人にあらず、自分が甘んじて受る所。如何にも殊勝なる申分だ。

慶喜に會
見を馳じ

さるにても美作殿、今日となりては、實に貴殿に對する面皮はあらずかしと、さすが忠悳なる伊賀殿の事として、しばし血涙に咽ばれけるが、思ひ返せるさまにて、已みなん／＼今更言論は無益なり、疾く行かれよ、上にも御逢遊ばすとのことなれば、意見あらば忌憚なく申上られよとの事なれば、

慶喜述懐

此れよりして、淺野美作守は、愈よ前將軍慶喜に謁見の段取となる。直ちに拜謁を願奉りしに、公の仰せに、委細の事は、伊賀に聞きつらん、時態日々切迫して、過激論者暴威を極め、制御の道もあらばこそ、終に先供の間違より伏見の開戦となり、錦旗に發砲せりと誣られて、今は朝敵の汚名さへ蒙りたれ

ば、余が素志は全く齟齬して、又如何ともする能はず、さればとて此上猶滯城するときは、益々過激輩の餘勢を激成して、如何なる大事を牽き出さんも計られず、余なくば彼等の激論も鎮りなん、故に余は速に東歸して、素志の恭順を貫き、謹みて朝命を待ち奉らんと欲するなり、秘めよ、との仰なれば、

以上は徳川慶喜の浅野美作守に向つての述懐、恐らくは此れが慶喜其人の當時に於ける心境を、その儘吐露したるものであつたらう。

【三八】 浅野美作守の後日譚 (三)

浅野東歸
賛成

浅野美作守は、徳川慶喜より、東歸の旨を聽いて、

始終を聞き奉りて、胸先づ塞がり、一言の申上様もなき次第なれども、仰せの程實に御尤、恐れながら一先づ御東歸のこと、愚臣美作に於ても然るべう奉存と御請申上、力なくも御前を退出して、詰所に歸らんとせしに、美作殿と呼び留るものあり、顧みれば板倉閣老なり、一通の書を手にして、これは御親筆ぞか

東歸手配
親書

し、よろしく頼み入る、且又豊前守殿(松平)後には、大河内正實には、未だ歸城せられねど、或は屠腹して申譯せんなどいはるゝも計られず、若し然らんには、十分に諫止せられよとて、足早に出行かれたり。

以上は浅野と板倉との問答。

扱御親書は何事ならんと拜見し奉りしに、即ち御東歸に付、參政以上の進退を直命し給へるものにて、御文面は左の如くありしかと覺えたり。

- | | | | |
|----|---------|---|---------|
| 供 | 雅樂頭(酒井) | 供 | 伊賀守(板倉) |
| 殘 | 豊前守(松平) | 供 | 主水正(永井) |
| 隨意 | 美作守(浅野) | 供 | 圖書頭(平山) |
| 殘 | 丹後守(竹中) | 殘 | 但馬守(塚原) |

水井の東
歸御供辭

御供の面々は、はや何れも退出したり、同僚中にて、永井氏は恭順論の首魁にて深く御東歸を賛し奉りしは、勿論にてありつらん、俄に御供を辭み奉りて、大阪に居残りしは、深き仔細ありての事か、其いふ所に據れば、伏見、鳥羽の一擧は、何處迄も我公の素志にてはなく、全く御先驅の行違より生せる戦争なり、故

に公には御恐懼の餘り、御東歸遊ばされしなり。我公既に此御城内を退かれし上は、我は此に留りて、豊前殿の歸城を待ち、伏見の行違は其曲何れにあるかを明白にし、萬一其情を達し得ずんば、武門のならひ、不得已一同此城を枕に一死あるのみ。御先驅の總大將たる豊前殿を始め、深く此處に死果てなば、其にて戦は我公の本意ならざりし事も判然として明白なるべし。故に我は御供を辭み奉るなりとの事にて、板倉閣老の申残されし豊前殿の決心を諫むることなどは、相談にもならねば、後事は永井の意に任せ置きて、余は退城したり。

永井の眞意

此れにて見れば、永井尙志は、大阪城に止まり、討薩論の急先鋒たる松平——大河内正質をして、自ら處決せしめんことを期したるものと察せらる。永井從來からの立場からしても、左もある可き筈だ。

榎本の歎息

余は去留隨意との命もあれば、御供して東歸せんと欲し、平山圖書の旅宿に至り、同船にて天保山に行かんことを促し、同家にて午餐を喫し居たるが、榎本和泉（武揚軍艦頭並）も亦來合せたり。是より先き同氏は、開陽艦にて、薩摩の軍船を追駈け、淡路沖に於て、其の二隻を打沈め、餘勇を帯びて城中に來り、大に爲すあ

らんと欲せしに、何ぞ計らん、君上には既に御退城の後ならんとは、其事の意外なるより、雄志も遂に空しくなり、遺憾に堪へられずとて、腕をさすりて歎息したれど、事及ばねば、其儘富士山艦へ歸りたり。

以上によりて、徳川慶喜立退の模様一斑が判知る。

淺野紀州
加太浦より
東歸

余淺野は、平山と共に天保山へは行きたれど、此日も又風波殊にあらく、和船にては開陽の御座船造行くことを得ずといふにぞ、已むを得ざれば、余は一旦紀州へ退くことに決心したり。平山は如何せしにや、此處にて見失ひたり。さて紀州へ下りてみれば、端なくも富士山艦は、同所加太浦へ寄せ來れり。榎本の招きもあれば、これに同乗して横濱へ入港したり。直ちに上陸して、神奈川奉行に打合せ、多くの船舶を雇ひ上げ、紀州に残れる兵隊負傷者など呼迎ふべき手筈をなし、麴て江戸へ歸りたり。

塚原將士
に罵らる

加太浦にて乗船の時、塚原但馬守も同乗を頼みしが、艦中乗組の新徴組、會桑等の負傷者、塚原の名前を聞き、敗軍の大將、何の面目ありて、乗船するやと、口々に罵りければ、再び紀州へ戻り行きたり。

小野内膳正(勘定奉行並)も榎本へ用談ありて來りしが、艦長柴誠一等に奸物奸物と罵倒せられ、是も端舟に乗りて何地へか避けたり。(晚香堂雜纂)

土氣潰蕩

當時一方に於ては、如何に土氣の潰蕩し、他方に於ては、如何に人心の激昂したるかを見る可し。斯る情態にて、江戸城を枕に、東下の官軍と抗戦せん杯は恐らくは思ひも寄らぬ次第であらう。

【三九】 福地源一郎の大阪城退去譚(一)

内應豫期に反す

當時外交官屬僚の一人として、大阪城中にありたる福地源一郎の、懷往事談に於ける記事は、能く其の情況を活描するものがある。

三日の開戦よりして、四日に至りて、敗報荐りに聞えたれども、兼て平山圖書頭に聞たる内應(土藩が京都に於て、幕軍に内應すること)の沙汰は、一向に其の事ありとも聞かず。大に豫期に反したれば、彼平山圖書頭の老猾めが、我々を欺きたり、否々彼が欺かれたるに相違なしなど、罵り騒ぎたれども、其甲斐ぞ無き戦地

城中の倉

よりの注進、城中よりの御使、互に櫛の齒を引くが如く、是より援兵を操出せば、彼よりは手負を歸へし、其の混雜は名狀すべからず。六日に至れば淀の手も既に敗れて、今は橋本にて防戦最中なりとの注進に接し、砲聲さへ微かに風につれて聞ゆる様なる心地したり。

如何にも大阪城中倉皇の情況が察せらるゝ。

籠城説記

然れども彼の薩長の兵隊、いかに、猛く戦ふとも、思はざる勝利を得たりとも、眞さかに大阪城を圍むが如き事は、よも有まじ。此城にさへ籠りなば、安泰なりと待みて、籠城説も漸く軍隊諸將校の間に行はれたるが如し。

大阪籠城説も、當然此際には生ず可き理由がある。

慶喜出馬の噂

其中に戦地よりの注進として(此の注進は、今の澁澤喜作氏と覺えたり)、隊長の來りて事情を陳述して引返すと共に、愈々前將軍家御出馬と云ひ觸らす聲の聞えしかども、其御出馬は、臆想に止まりしと見えて、暮に及べども其御事も無かりき。

慶喜は既に脱出の支度最中、出馬などとは思ひも寄らぬこと。

御雇佛將
校無用

然るに此時陸軍傳習教師佛シャノアンは、山口駿河守と共に、軍艦に乗りて江戸を發して、恰も此日を以て大阪に著し、黄昏過ぐる頃に登城して、前將軍家に謁し、程も無く引取つたり。但し此の拜謁は、陸軍にて諸事取扱ひ、外國方に關係せざりしかば、余輩は其の御席には列らざりき。(參照 三六—三八)

恐らくは佛人御雇陸軍將校も、戦闘の目的の爲めに召喚したのであつたらうが、最早退城となれば、其の必要も無きことゝなつた譯合だ。

慶喜立退
の知らせ

此日(六日)の晝過ぎより、平山川勝の兩氏は、頻に佛國公使の旅館に往復したりしかども、例の機密連中の所爲なれば、余輩は固より其何事たるを知らず。當時役所に詰合せたる外國奉行は、川勝近江守、糟屋筑後守、石川河内守にして、山口駿河守も此夜來りて座に連なりしが、十時頃に至れば、奉行は一人も残らず、其席には居らざりけり。又候奉行衆が、機密相談として、御用部屋(内閣)に出られるか。此の敗軍の最中に、何の無益の相談を成さるゝぞと、西(吉十郎)も余も俱に冷笑して、烟草を燻らせ、果ては雑談にも倦みて、毛布にくるまり居睡りして居たるに、夜半に及び、松平太郎(組頭)は戎服に容を改めて來り、余輩一同が、悠然

として落付たるを見て、余と西に向ひて、君たちは何と落付て居るか(と親指を出して、モウ疾にお立退に成ましたぞ、早く落る用意を仕たまへと告げたり。如何にも思ひ掛け無き告知だ。前將軍が城中の者共に置いてけぼりを喰はす扱とは、意外千萬だ。

真相判明

西は此語を聞いて怪しみ、色を爲したるに、余は早く語を發して、太郎殿そんな不吉な戲言は仰せられぬもので御座ると、一本やり込で見たれば、松平はどつちが戲言と思ふなら、御用部屋へなり、御座の間へなり往て見たまへ、御老若方も奉行衆も、皆お供で立退かれたせ、僕は今遽に陸軍の歩兵頭に轉じて是から出陣する所だ。君たちは早く立退たまへと云捨て、急ぎ役所を出往たり。

斯くて真相は判然した。

内閣人影
なし

是にて満座一同も大に驚き騒立たるを、西は制し止めて、兎も角も太郎が詞の虚實を見證すべしとて、余と共に役所を出で、御用部屋の方へ赴き、覗きて見たるに、内閣は寂として一人の影も見えざりけり。

此の如くして大阪城中、將軍を首として上役の面々は、それ〴〵大阪城を脱出し

去つた。

【四〇】 福地源一郎の大阪城退去譚(二)

實否調査

扱こそ松平太郎が既に御立退と相成たりと報知せるは、實説にてありけれ。いざ去らば御錠口の邊まで推參して、其の虚實を慥めんと云ひたれば、西吉十郎(成彦は、余を制して、否々御錠口近く推參せんは、其恐あり、先づ御邊は詰所に戻りて、一同立騒がぬ様に、鎮め置たまへ。僕は御目附部屋(監察局)へ罷越し、實否を備さに承合せて參るべしと云ければ、余も實にもと其説に従ひ、御用部屋(内閣)の外にて西に別れ、外國方の詰所に立歸り、役並定役調同心書物方等が、頻に騷擾せるを取鎮め居たるに、西は程なく戻り來りて、一同に對ひ、深き思召あらせられて、上(前將軍を斥す)には、當大阪城御立退となり、御軍艦にて御東歸遊ばされたり。尤も當城は尾張殿に預けられ、御留守居役、御目付其外とも役々夫々に仰付られたり。此儀唯今御目付より慥に承り及びたり。従つて外國方の儀は、

西の部下
申達

變轉の世

奉行衆已に御供して東歸の上は、我々共一同は、當城に残り止まるに及ばず、是より東歸の都合を、我々相談の上にて、御達し申すべし。其分に心得られよと嚴然と申達し、事實を陰蔽する事も無く、又毫も狼藉の狀なかりしは、余が西の舉動に感服したる所なりき。

何となく平家が都落の模様を、聯想せしむるものがある。慶長、元和の過渡期、冬夏二陣に於て、天下の兵を動かし、漸く之を徳川氏に收め得たる大阪城が、此の如くして放棄せらるゝとは、扱も有爲變轉の世の中である。

奉行詰所の狼藉

是よりして西は余を招き、兩人にて奉行の詰所に入て見れば、公用書類は取亂し、誰か護身の爲めにと携へたりけん拳銃も、其まゝ座隅に取残してありけり。(是は東歸後に聞けば、奉行某の品なりしとの事ゆゑ、原主に返し與へたり。)猶笑止なりしは、何やらん四角なる風呂敷包ありしを開いて見れば、鴨の切身に青菜と切餅とを夥しく入れたる雑煮の用意にてありけり。扱は奉行の一人が、今夜の料にとて旅店より取寄たる品にてあるべし。好々、我等賜はつて久振の御馳走に與からんと、打笑ながら同心をして鍋を捜させたるに、果して鍋も汁も用意して、下

部屋にありければ、一同寄集つて且つ煮かつ食ひたり。如何にも意外なる御馳走だ。

福地西等
兵庫に赴

其時西は余に向ひ、御邊は是より如何せらるゝ所存なりやと問ひたれば、余はさればなり、是より僕は紀州路に掛り、陸路東歸の所存なりと答へたるに、西は否々それは上策に非ず、今や陸軍の敗兵、みな紀州に赴かんこと必然なれば、其の混雑は想像するに餘あるべし、幸なる哉、柴田日向守は、兵庫奉行として、現に彼地にあり、彼人は外國奉行兼帯なれば、我等一同が進退も、彼人の指揮に従はんこと當然なり、其上に兵庫は開港場なれば、此の内亂の今日に當りても、自から中立の状勢を占むべき歟、此議は如何と申されたり、余は深く其言の理あるに服し、何様貴説その理あり、速に同意すべしと答へたれば、然らば其事に定むべしとて、一同に口達して、其の處置に及びたり。

當座の上
分別

此の如くして外國局の屬僚一同は、西吉十郎、福地源一郎等の申合により、兵庫を指して落ち行くことゝなつた、西が兵庫の中立地帯であることを想起し、且つ兵庫奉行柴田日向守が、外國奉行兼任であることを想起し、其の節度に従はんと主張したるは、如何にもその當座柄、善き分別であつた。

【四一】 福地源一郎の大阪城退去譚 (三)

後始末

福地と西とは、其の外交部員を率ゐ、彌よ大阪城中を立ち退くことゝなつた。

先づ元締(會計役)を呼び、外國方御用意金は、現に何程ありやと尋ねたるに、御勘定所へ還納すべき分とも合せて、四百六十餘兩ありとの事なりければ、西を初め十一人の者が、高下の別なく、銘々貳拾五兩づゝ拜借の事に定め、組頭宛の證書を認めて、是を配當して肌付金と爲し、其餘の貳百餘兩は、御用金として、元締に所持せしめ、夫よりして書類を盡く取出し、斯る時に臨みて、書付を取殘し置くは、第一の恥辱となり、て西(吉十郎)成度は、金と與に都て一々に檢閲し、無用の書類は都て引裂て焼捨させ、緊要の書類は、是を葛籠文庫及び用箱に藏め、同心三人に是を背負て、従はしむる事となし、次に定役一人を八軒屋に遣はし、急に川口まで降るべき傳馬船を、一艘用意せしめたるに、曉に及びて此船の支度は

蕭然出城

宜しき旨を告げたり。然らば各々當城を退出して、一旦銘々の旅宿に立歸り、宿料其外等の仕拂を残り無く償却し、明荷兩掛等の如き、手荷物に至るまで残らず擔がせ、九時まで八軒屋へ參著すべしと達して、正月七日の朝六時半頃に打連れ、蕭然として大阪城を出でたりき。

取り残されたる外國方の屬僚共は、此の如くして退去した。因みに云ふ前將軍慶喜等は、其の前夕をもて脱出したのだ。

敗兵歸城

此時敗兵は既に城内に歸り、御玄關より御座敷に涉りては、會桑および諸隊の幕兵みな屯集して、更に秩序も無く、況て中の口（文武諸役人の昇降口）の如き、雜人跡のものが、草鞋の儘にて昇降なし、其の混雜は、一方ならず。

如何にも亂雜の情態だ。地下の家康をして、此れを見せしめたらんには、果して如何なる顔色を作す可き乎。變れば變る世の中だ。

東照宮神輿入城

櫻の御門を出たる時は、陸軍の一隊は（何隊なりしや、其隊名を忘れたり）是より紀州路に赴くべしとて、敗餘の殘兵を整列して、猶儼然その軍紀を紊さざりしは、此際に於て尤も諸人の目を驚したる所なりき。大手を出る手前にて、天滿なる東

照宮の別當の僧が、御神體の神輿を昇がせ、自らは衣の袖に褌を掛け、長刀を杖に突て、御城内に入るに出會ひたれば、一同に下座して拜み奉つたりき（此御神體は、其後如何なりしや、蓋し九日の炎上に焼亡し玉ひしなるべし）。如何にも殊勝の至りだ。併し東照宮も、此の情態では、格別の靈驗を示現することは出来無かつたであらう。

市中平穩

斯て余は、瀬川俊三を牽て、今橋町の旅宿に立戻りたるに、市中には戦争の風聞こそ聞えたれ、敗軍の模様も、前將軍家大阪御立退の事も、未だ知れざりしと見えて、極めて穩にして、平日の如くなりければ、余等は旅宿にて、心靜かに七草粥を喫し、湯浴して後に、荷物を取付け、人足を命じて擔がせ、九時前に八軒屋に赴き、一同傳馬船に打乗りて、淀川を下り、午後二時頃に川口に著したりき。

當時の大阪は未だ新聞無き大阪なれば、何事も知らずして、平靜を保ちつゝ、あつたのも、決して不思議は無かつた。

此所にて兵庫へ急行の押送船を捜させたるに、同心は直に一艘の船を約して連れ來れり。此の船頭は戦争中とて、兵庫までの船賃十五兩を需めたり。非常の

大風出船

高價を食るとは知つたれども、外に詮すべなければ、之を雇入るゝと定め、扱直に出船すべしと命じたるに、其時西風烈しく吹たれば、逆も出船叶ひ難き由を申す。

鴻池別荘
投宿
此の如くして彼等は船には同心三人に番をさせ、市兵衛新田の鴻池市兵衛の別荘に投じた。

【四二】 福地源一郎の大阪城退去譚 (四)

神戸著

明れば正月八日、この日も西風烈しく、船頭共は、出帆なり難き由を申したれば、終日この市兵衛新田に在りて、風待をなしたり。……斯くて夜に入り、風少し静まりたれば、船頭を促して、川口を船出なし、兵庫に向ひたれども、海上は猶荒かりけり。翌九日の十時過に船は恙なく、神戸の濱邊に著したり。

此の如く大阪神戸間を、殆んど二日半にて到着した。

兵庫奉行
所の狼狽

一行は上陸して、濱邊の旅居に投じ、午餐を命じ休息したり。西は調役並を従へ

て、直に兵庫に赴きたりけるが、暫くして歸り來り、大嘆息して、兵庫奉行所に至り見たれば、奉行組頭を初として、諸役人一同が、官軍の來襲を恐れ、奉行所及び税關を、米國領事に預け、俄に英船を雇入れて、唯今江戸へ逃歸らんと、支度最中にて、周章狼狽を極め、我等が申條は、誰一人として耳を傾けて聽くものも無し。斯くと知りたらば、福地の説に従ひ、大阪より陸路直に紀州路に赴くべかりしものを、扱も江戸育の幕吏が、打揃ての氣慨なさよと、且は悔み、且は憤りて語つたり。

如何にも幕吏共は、臆病風に襲はれたるものと見ゆ。

英船乗込

余は是を聽くよりも、直に其座を立ちて、此家を出で、濱邊に赴き、兵庫の御奉行様が、御乗込の異船は、どの船であるぞと、其邊に繋ぎたる小船の水手等に問しめたるに、それそれ彼蒸汽船にて候へと答へて、一隻の汽船を指し示したり。乃ち座に復り、余等一行は既に東歸の便船を得たり。愚存に任せられなば、其策を建つべしと云ひたれば、西も此場に臨みては、兎角の異議は申さずとの答なり。然らば疾々用意せられよ、余が策は云々なりと發議し、夫より荷物を盡く小船

に積込ませて、英國汽船へ漕附かせたり。此汽船は「オーサカ」と號せる螺機の商船にして、即ち兵庫奉行の一行が雇入たる船なれば、余は船に上り、船長に面會し、兵庫奉行の屬官が、船中部屋割、其他の用意の爲に先著したるなりと告げ、手荷物を船中に入れさせ、二、三室をトして寢所と定め、船中に休息したりけるに、午後四時頃に至り、兵庫奉行柴田日向守は、組頭森山多吉郎、調役竹中佐次兵衛及び其外の役々を引從へて、乗船したり（前島密氏も、當時前島宗助とて、其一行中なり）。余は柴田に對ひて、私共御便船相願ひ奉ると簡單に挨拶して、済ませたり。

此の如くして、彼等は彌よ退去の目的を達した。

大阪城燒

斯くて錨を揚る頃に至り、午後五時頃大阪の方に當り、黒烟大に立ちて、火焰頗る熾なるを見て、扱こそ大阪の御城は、最早官軍の爲に一炬に附せられたりと思ひ、首を俛れて望見するを得ざりき。（此大阪城の放火は、諸説紛々たり。官軍の方にては、徳川兵が無慚にも自から火を放たりと云ひ、又た舊幕人は、先著の長州兵が放火したるなりと云ひ、今日まで誰が爲したる惡業とも知れず。或は無頼の人足等が、混雜に紛れて城中に入り、砲臺を働き、其の痕跡を掩はんが爲に放火したるなりとも云へり。余は其孰か實なるやを知らず）斯

江戸歸著

くて、十二日に横濱に著港し、夫より上陸して、一行みな江戸に歸著したり。畢竟兩氏が落附たる取計に由て、余等は此の危急の中に在りて、安全を得たるなり。以上によりて、大阪城中退去の混雜、及び其の附近の幕吏等が、倉皇狼狽、江戸に引き揚げたる模様が判知る。

第八章 慶喜退去後の大阪城中状況

【四三】 徳川慶喜脱出後の大阪城 (一)

妻木の城引渡し任務 扱も正月六日の夕、徳川慶喜立退前後、大阪城の光景は、前記の通りであるが、(参照 三九—四二) 正月七日以後の状況に就ては、更らに記す可きものがある。當時大阪城に居残りて、徳川慶喜の命令通り、之を尾越兩藩主へ預くるの任務は、目付妻木多宮(頼矩)に在つた。此れを以て妻木は、その通りに取り計らうた。

正月七日

越前藩同
本への申
談

一 八半時(午後三時)頃松平豊前守始、役々立拂候後、御奏聞狀、並御兩家之御直書共(参照 三三)京師之運び方取計候に付て、御兩家大阪詰御家來呼出候處、同日七時(午後四時)過、越前御家來岡本晋太郎罷出、尾州様御衆は詰合不申に付、私一人罷出候趣申立候間、左候はゞ次筆には候得共、貴殿へ御頼申候間、此御奏聞狀、御自書共、京師に御廻し被下、且當城御受取被成候様にと申談候處、答に

京師表に運び方之儀は、委細承知仕候間、即刻早馬にて私持越可申、御城受取之儀は、一應主人之申付承り、明日中には立歸り可申候間、夫迄之處御猶豫被下度段、達て申聞候間、任其意、尤御奏聞、並御自書表にては、當城は兩公に御托し濟之つもり被仰置之御文言に付、貴様と之御引合は私づく、表向は既に御引渡濟之格に御心得被下度段、具に申談、晋太郎相返し申候。

尾州の代表者は來らず、越前の藩士岡本晋太郎來りたれば、當人に申渡したところ、當人は早速之を京都に携へ赴くことゝなつた。

尾州淺野
への談

一 同日薄暮頃尾州御家來淺野辰藏罷出、先刻御呼出し之處、他行中にて延引いたし候段申聞候間、過刻越前衆被罷出、御藩には御詰合無之との事故、無據岡本晋太郎一人に御奏聞狀、御直書共相托し、同人即刻上京被致候、尤御城之儀は、兩公に既に御引渡し之積心得居候旨申聞候處、辰藏委細承知、左候はゞ、明日越前衆被罷越次第、御沙汰被下候はゞ、私義も同時登城可仕旨申聞、引取申候。

此の如くして七日中には、名儀は兎も角も、事實に於ては、未だ大阪城は、尾越兩藩の手には受取らなかつた。

城外出火

一 此夜五半時(午後九時)城外れ向小屋より出火、御城風下にて、城内松樹に火移り一時動搖、消防方は、御城代残り居候家來に命じ、半時餘にて鎮火致候。兎に角大阪城の火災の先觸とも申す可き事柄だ、當夜までは大阪城も其災を免れた。

引渡未済

八日 晝後と覺候、尾州御家來中村修之進、鬼頭健二郎兩人、四半幟爲持、人數七八人召連登城いたし、昨日淺野辰藏に被仰聞之儀も御座候間、罷出候趣に付、猶前書之趣申聞未だ越前衆は不罷出候得共、尾州公には御初筆之儀故、貴様御引渡申度段申談候處、同人申候には、辰藏申口少々不分明に付、猶委細之儀伺として罷出候得とも、御受方之義は、御城附之もの京地より呼下し候上ならでは、取計兼候間、只今直に其段急飛を以、京師に申遣候旨にて、殿中にて書狀認、飛脚差出候様子に見受申候。

繁文の世の中、大阪城の受取渡さへも、思ふ様手軽に、迅速には行かなかつた。

越前藩士
來ら少

右相濟健二郎一と先引取度段申聞候得とも、昨日早馬にて、晋太郎上京致候義に候得ば、最早歸阪可致頃合に付、貴様被引取候ては、又候欠違、御引渡方遅延可

致、其儘乍御迷惑越前衆也、其御城附也被罷出候迄、當城に御詰切有之度段申聞候處、承知にて、健二郎、修之進相留り、人數は不殘返し申候、同日夕淺野辰藏も再登城、尾州衆都合三人相成、局中在合之酒肴支度等(原註、酒は御立拂之節、上向より給り、飯は多宮旅宿賄人呼寄申付之)差出、越前衆相待居候處、此日は終に京師より沙汰無之、三人共天井間は一泊爲致、多宮(妻木儀八)未詳次の間にて休足いたし候。此の如くして、八日までは要領を得なかつた。

一 今夕刻、御城外所々にて、何者とも不知、城中虚實探り之爲にも候哉、小銃相發し候趣、斥候之者申出候。

【四四】 徳川慶喜脱出後の大阪城 (二)

外人大阪
籠城の噂

尙ほ正月八日の記事として、當時大阪町奉行支配調役金枝鐵太郎の談話を掲げんに曰く、

八日(明治元年正月)町會所の人々より、種々の世話を受け、荷物兩掛等を整へ了

り、之を人々に託し置き、聽て家來一人を召具して、愈歸東の途に臨んとせしが、俄に流言あり、昨日日本艦へ歸りたる外國人等、再び上陸して、大阪城に據り、長州薩州等の軍を迎へて、戦端を開かんとす。今にも銃砲の音すべしと市人の混雜一方ならず。

風聲鶴唳、當時倉皇の際、固より斯る風説もあつたものと察せらるゝ、而して外人中には——特に佛人——幕府への同情者も、決して皆無ではなかつた。

城中異状なし

中には既に外兵一小隊ばかり城中に繰込みたりと傳ふる者あり、是固より無根の風説とは思ひたれど、此際の事情、亦捨も置かれねば、先づ虚實を探らんとて、急ぎて東町奉行所に至り見れば、此處ははや人影もなく、門扉も堅く鎖されたれば、直ちに御城内(天阪越)に入りしが、固より何の異状もなし。

斯る事のある可き筈が無い。

風説の因

併し此の風説は全く據り所なきにもあらず、此日外國人數名、昨日出城の際、取られたる物品を受取らんとて、打連れて入來りしより起りしなりとぞ。

斯る事さへも、斯る場合には、斯る風説の端緒となる。

城中在留の人

此時城中に在りし人々は、妻木(頼矩)目付を始めとして、御徒目付、飯塚練作、大山兼三郎の三人にて、獅子の間に詰め合せ、外に尾藩の御城使某、其付添役、鬼頭謙次郎の兩人は、御徒部屋に控居たり。

此れは前記の尾藩中村修之進、鬼頭健二郎のことであらう。

雜人亂入

此時恰も正午頃なりしと思ふ、自分が城中に入りし時は、雜人ばら勝手次第に出入して、種々の物品を持出し、傍若無人の状を目撃したれば、斯くては御取締も立難きゆゑ、何とか御考案あらまほしき段、私かに申出しに、妻木殿は、去ればとよ、其事心付かぬにあらざれども、如何にせん現在の人員にては、手も足も届くものかは、併しながら御城代の家來は、猶残り居るもあらん、これを利用して取締る便法はなきやとのこと故、自分はこれに答へて、然らば京橋、玉造の兩御門を閉鎖して、大手御門の一方を通行口とせられよと申ければ、妻木殿は、早速御徒目付を以て、御城代の家來に申達し、其事を決行せられたり。

當時の城代

斯る場合には、必らず雜人等の亂妨狼藉が行はるゝものだ、之を取締ることは、決して容易の業ではない、因みに云ふ、當時の大阪城代は、牧野越中守貞明にて、常陸

笠間藩主であつた。

金米書類
の搬出

八つ時頃(午後二時頃)にかありけん、大阪詰御勘定奉行(奉行並小野内膳正の命を帯びて、奥野由郎(勘定方外一人、城中に出頭し、妻木殿に向ひて申述ぶる様は、御城中御金蔵に、銀錢八萬兩餘、難波御蔵に米一萬石餘の御貯へあり、是は其筋の御達しに依り、今般大阪市中へ下賜はるべきに付、其御取計ありたし、これは内膳殿の申付られたるにて候。且又御勘定所備付の本箱並に書類等も取片附持出し可申とて、其々荷作して懸て城外へ運び出した。七つ時頃(午後四時頃)に至り、御小性頭取新井筑後守、奥醫師松本良順の兩人、御城内に入り來れり。此兩人は先頃御直書を奉じて、讃岐の高松殿へ御使に行きしが、今日歸阪したるなり。

新井筑後守とあるは、白石の後裔であらう。松本は即ち他日明治陸軍々醫の開山たる松本順だ。

【四五】 徳川慶喜脱出後の大阪城 (三)

慶喜手元
品搬出

大阪町奉行支配調役金枝鐵太郎の談話は、以下につゞく。
斯くて詰合の尾藩等へ申談じたる上にて、御手元の御品々を取纏め、御大小類は勿論、御箆筒長持等を始末して、皆々御城外へ運び出し、一旦先づ東本願寺の掛所へ運搬したり。

榎本の妻
木見舞

此れは前將軍慶喜の持物を、城中より運び出したものだ。
程なく榎本和泉守(武揚軍艦頭並)も入城し來り、妻木殿(多喜)を慰めていはるるには、倍て御居殘の御役目、誠に御苦勞、其々の御心配察し入る所なり。此一樽只今市中にて買求めたれば、聊ながら足下の勞を慰むる料にとて、持來りし也とて、之を贈られければ、妻木殿は、元來の酒好き、殊に打喜びて、厚く好意を謝せられたり。泉州は猶種々妻木殿と談合の末、奥向の取片付に従事せられしが、此時御城中にありし黄金二十五萬兩を收めて、軍艦に積込まれたりと聞きしが、自分はこれを目撃はせざりしなり。

米金分配
指圖

果して然らば、一樽の酒は、二十五萬兩に値ひす。好個の交換價值だ。此時妻木殿は、自分等に向ひて、あなた方も種々御苦勞を掛けしが、明日は御軍艦も猶天保山沖に碇泊し居れば、これに乗組みて、歸東せられて然るべしと申渡されたり。夜五つ時（午後八時）頃、兼て召出し置たる大阪總年寄今井與總右衛門出頭したるを以て、妻木殿は、御金藏の銀錢八萬兩餘、並に御藏米一萬石餘、大阪市中へ被下（下）に付、配分方等可然取計致すべき旨を口達せられしに、與總右衛門畏りて申すやう、難有仰せにはあれど、斯る非常の御時節に候へば、所詮平等に配分することは出来得まじ。其間或は恩賜に漏るゝ者もありなんと存するなり。此等の所はいかゞ心得侍らん哉と當惑の體なれば、妻木殿は今日の場合それは是非に及ばず、詰り御金を御城中より、御米を御藏より持出して、之を大阪市中全體に下し賜はると云ふ御趣意なれば、其心得にて、臨機の取計致すべしと諭されければ、然らば兎も角も御請仕らん。去るにても御口達のみにては、計らひかぬる事情も侍れば、後證となるべき御書下げこそ願はしけれと申出せるを以て、妻木殿は自分を顧みて、是は本職の認むる場合ならねば、貴殿奉

行に代りて執筆せられよと談せられしに依り、左の如く認めて與總右衛門に渡したり。

分配命令
書

今度大樹御東退に付、大阪城之儀、尾張前大納言殿、松平大藏大輔殿へ御引渡相成、御取締向、追々可被仰出候得共、市中爲鎮靜、難波御藏に於て米一萬石、御寶藏に於て銀錢八萬兩餘被下候に付、速に配當方可取計候也。

右大阪町奉行御供に付、御目付妻木多宮立會、金枝鐵太郎申渡之。

正月八日
以上は正月八日までの記事だ。更らに九日に於ける、妻木多宮の手記に據れば左の如し。

城中出火

九日 朝五つ時（午前八時）頃、城外東北之方より、破裂丸と覺しき大砲一二聲相響き候に付、襲來之者有之義と相心得、斥候差出置、直様尾州家來寢所に罷在候三人を呼び起し、其段申聞候。青屋口小屋より出火の趣にて、御城風下相成、火煙盛に相掛り候間、夫々用心、人少なから、御城代足輕に申付、相防候内、斥候之者罷歸り、只今長州之印相附候兵隊、追々御城に近附候趣申立候に付、萬一空城と不心

長兵來迫